

---

# キミの求めるモノを教えて

袖雨

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キミの求めるモノを教えて

### 【Nコード】

N3650T

### 【作者名】

袖雨

### 【あらすじ】

キミの求めるモノを教えて 求められる望み。それに伴って捧げられる代償。“彼”の求めるモノ、“望み”は一体なんなのか。そして捧げられた代償の意味は？……………これは、魔術が当たり前になった“地球”のとある魔術学院で織り成される、最高峰の魔術師家系で生まれた魔術行使不可能者の物語。／／／／遅筆ですが、プロットらしきものはありますので、最後まで書くように努めさせていただきます。

## プロローグ・キミの求めるモノを教えて（前書き）

活報で今作の試作品版を発表して、一ヶ月以上が経ちました。

よつやく、 “キミの求めるモノを教えて” 略してキミもとが始動します。

長くなりそうですが、これからよろしく願いますね。

## プロローグ・キミの求めるモノを教えて

夢を見ていた。それは自覚出来た。ただ、身体は動かなくて。それでも意識はハッキリしていて。視界はゼロ。それどころか、聴覚も、嗅覚も、触覚さえも、何も感じ取らない。この調子ならおそろく、何かを食べたとしても味を感じることは出来ないのだろう。…そんなコトを考える余裕まであった。

### キミの求めるモノを教えて

不意に聞こえる、透き通るような声。せせらぐ川のように、俺の中に静かに染み込むソプラノ。

先ほどまで聴覚もないと仮定したのがウソのようだ。それほどまでに唐突に、その声は頭に響いた。

いや、“頭に響いた”のならば、それなら耳は関係ないのかもしれない。聴覚とは関係なく、俺の脳に直接語りかけているように感じる。身体は動かず、感覚は麻痺し、思考だけがぐるぐる回っているような感覚。……金縛り？ いや、夢だ。今は寝ているはずだし、目を閉じているわけでもないのに、映すのは闇。ならば、この状態はありえない。俺が突然、全ての感覚を失ったのでなければ。

……そんなに深く考えることじゃないか？ なんせこれは夢。なんでもあり。なら、こんな無意味なことを考えるのはやめよう。それより…。

『求める、モノ…。なんだよ、それ』

それが気になる。俺が欲しいモノを、この声は知っているのだからか？

キミが欲しいのは、どんなもの？ なんでもいい、教えて

もう一度、脳に響く透明な声。どうやら、俺の問いかけには答えてくれるらしい。それならば、この変な夢の中、目が覚めるまでの時間潰しに利用させてもらおうかな。

そう思い、俺は再び“声”に言葉を投げかける。

『欲しいモノ……あるけど、言ってなんの意味が？ それを与えてくれると？ やめてくれ。俺は、他人から与えられたモノなんて信じない。だから要らない。俺が誰かを頼ることなんて、ない』

なにを言っているの？ キミは、誰にも与えられずに生きてこられたとも思っているの？

『は？ あんたこそ、なにを言ってるんだ？ 俺は、他人から何かをもらった記憶はない。強いて言うのなら、この生命いのち。これだけは、与えられたモノかもな』

それともう一つ。あいつからもらったモノ、それだけは、俺には返せないほどに大きい。ただ俺は、あいつの期待に応えられない。

誰にも認められない俺が、唯一、俺を認めるあいつにしてやれることなど、何も…。

俺の頭の中で脱線を始めた思考とは関係なく、“声”は俺の先ほどの発言を受けて、言葉を俺に染み込ませる。

それだけじゃない。キミが今までを生きてこられたのは、この世界からたくさんの恩恵を受けてきたから。たとえ親の施しを受けられなかったからと言って、キミがなにも与えられていないことにはならないよ。人間社会を支えているのは紛れも無い人間で、キミはその社会で暮らしてきた。それは、キミが人間に支えられていることと同義。キミが人に忌み嫌われ、蔑まれようと、それに変わりは無いの

なぜ、俺が忌み嫌われていることを知っている？ ……いや、これは夢なんだ。俺が親からの施しがゼロであることは俺の中では大前提であり、夢の中の住人がそれを当たり前のように語るのも、また当然なのかもしれない。

それならば、気にすることはない。会話を続けよう。

『……………そうかもな。確かに、そうだ。考えを改めることにしよう。俺は、たくさん力を、知識を、世界から、社会から、先人たちから、与えられ、そして今も支えられているんだろう。だけど、俺は身内にそんなものをもらった記憶はない』

論点がズレてるよ。キミが身内に何をしてもらったか、あるいは何をされたかなんて関係ない。私は、与える対象にキミを

選んだ。ただ、それだけ

『選んだ？ 一体、どういう……』

私の選択は間違っていないはず。キミの望みは、私の目的に通じなければならぬ。これは、私からあなたへの一方的な施しじゃなくて、ただの交換条件だよ。まあ、この交換条件以外にも、私からあなたに求めるモノはあるけども

『交換条件？ 求める、モノ？ ……そんなモノが必要なら、俺は求めない。俺は俺で、あんたとは関係なく生きていくよ』

なんだ、キミ……大したコトないのかな。せつかく私を選んだのに。選択に用いた魔術は、全てが完璧だったはずなのに。だから言った、私の選択は間違っていないと

『そんなの、知らん。関係ないね。大体、夢の住人が何をほざいてんだ。さっさと起きたいんだけど』

キミは……いや、性格なんて関係ない。私が勝手に与え、奪えば、キミは私の目的に沿った結果を出すことしか出来ない。だからあの魔術でキミが選ばれ、私はそれを信じ、キミの求めるモノまで訊ねた。だけど、関係ないよね。私の目的に必要な能力をキミに授ければ、それを使ってキミは私を導いてくれる。そういう選

択なのだから

『意味不明だな。……………それに、勝手に与えられるくらいなら、俺は違うモノを望む。あんたの魔術によれば、俺が望んで選ぶコトが、あんたの目的に繋がるんだろ？ なら、俺は望む』

夢であるにも関わらず、俺は必死だった。確かに、俺が欲しくないモノを与えられ、さらにその代償を求められるのは癪だ。だけど、コレは夢で。起きたら、当然にしてそれが反映されることはないワケで。ここまで必死になってしまっ、意味が分からなかった。

……………まるで、この夢での取引が、現実になると思っているかのように、必死なのだ。

やっと、望んでくれた。それなら、私は文句なんてない。

さあ、キミの望むモノ、求めるモノ、欲しいモノを、教えて？

『俺は、望む。』

『の獲得を！！』

声高に、俺の求めるモノを願う。それは、自分の力では、見出し、手に入れることは不可能なモノ。

それが、キミの望み？ それでは私の目的は……………いえ、そうか、それなら解釈の仕方による。ならば、目的に沿う解釈であると信じよう



『勝手に信じる。ただ俺は、あんたの思い通りになるつもりはないからな』

ふふっ、可愛くない。でも、選択の魔術に間違いはないの。キミが自分の思い通りに動いた結果、それが私の目的の達成に繋がる

俺は答えない。ただ、脳に声が響く代わりに伝わってくる感情が、俺を不快にさせるのを、受け入れるしかないだけ。この感情は、明らかかな嘲りと、どうしようもなく溢れる期待。俺がコイツの目的を叶えると信じて疑わない、期待の感情。

この感情を、止めることは出来ない。なにを言っても、コイツが“選択の魔術”とやらを疑うことなどない、そう思ったから。

さて……では代償も告げよう。安心して。キミが払う代償は、私の目的を遂行する妨げにはならない

……逆に、妨げになった方が嬉しいと思うけど。

答えないのね？ でも、関係ない。キミは望み、その代償は今、捧げられるのだから

『ああ、もう……うぬぬい。さっさと教えろ』

せつかち。でもいい、告げよう。キミの代償、それは…  
…。

“時”よ。

プロローグ・キミの求めるモノを教えて（後書き）

次回投稿は、五月二十一日（土）を予定しています。

## 俺と一緒にいてくれるなら

この世界の歴史には、二つのハジマリがある。

一つは、文字の誕生から始まる、文明の発達。それに伴って人類の歴史は始まった。文字の誕生によって歴史は数えられ始め、その詳細を残されるようになったのだ。つまり、文字は人類最大の発明とも言える、という考え方も出来るといふことだ。今の科学は、文字によって知識が伝えられてきたことで、積み重ねられて発達したようなものなのだから。

もう一つは、魔術の歴史。ある大規模災害の末、魔術の歴史は始まった。

人類としての歴史の始まりと違い、魔術の歴史はとても浅い。それは今から三百年ほど前のこと。地球の世界各地に、巨大な隕石が降り注いだ。その隕石は地球に多大なる被害を及ぼし、世界は大混乱に陥った。

……それからだった。世界が魔力に満ちたのは。

唐突に魔力に満ちた世界は、当然、生命体にも影響を及ぼした。

ここでは人間を例とするが、人間の精神、その奥底にも魔力というもの眠っており、世界に魔力が満ちたことによって、自身の魔力便宜上、“オド”とするが、それが刺激され、少量ずつ体内で魔力が生産されるようになったのだ。こうして体内からオドが発生するようになり、世界には魔術を扱う者、つまり魔術師が誕生した。世界に満ちた魔力　こちらは“マナ”と呼ぶが、それを取り込

んだ全世界の人間は魔術師となり、魔術は当たり前のもとなった。また、“マナ”は人間の容姿にも影響を与え、人々の髪や瞳は、今まで遺伝子上あり得ないとされていた色を持つようになった。そしてもう一つ、“マナ”は人間の身体能力を向上させることがあるとされ、魔術の存在しなかった所謂“旧時代”よりも、確実に身体能力の高い者が稀に生まれるようになった。

結果、“マナ”が充満した地球では魔術の研究が始まり、魔術を用いた戦争などを経て、およそ二百五十年前、世界はようやく平定されたのだった。

ここまでが、この世界のもう一つの“歴史”のハジマリだ。

これは、科学の発達した世界で、もう一つの歴史、“魔術の歴史”が始まった場合、辿るであろう地球の歴史の仮定。魔術が当たり前になった世界。その世界の“日本”に住む、最高峰の魔術師家系で生まれた、魔術行使不可能者の物語

朝。寝癖の付いた黒髪をかき上げ、眠たげな金色の眼を半開きにして、彼は目を覚ました。カーテンの隙間から差し光を大層鬱陶しいとも思っているかのように睨みつけ、非常に不機嫌そうにしかめられた表情で上体を起こした。なんてことはない、それが彼にとつての常の表情。しかめっ面に鋭く細められた目。それが彼の特徴でもあった。

それはどう考えても見苦しいものには見えなハズなのだが、この男がやると不思議と絵になった。それ程までに、彼の容姿は優

れていたのだ。

だが、彼はこの容姿を嫌う。家族との接点が一つでも増えることを嫌がるのだ。贅沢だが、切実な悩み。      ああ、今日もまた始まるのか。意味のない日々が。

意味はなくとも一日は始まる。彼は仕方なく起きだし、ベッドの右側から安物の絨毯が敷かれた床に足を下ろし、そのまま立ち……  
…いや、立とうとした所で眩暈に襲われた。

キミの求めるモノを教えて

真つ暗な視界のまま、もう一度ベッドに倒れこむ。安物のベッドは、それだけで酷く軋んだ音を立てた。

「なんだ、これは……。いや、この言葉、どこかで……」

彼は思考する。……浮かんできた言葉。それは、彼がつい先ほどまで見ていた夢の内容だった。

告げよう。キミの代償、それは……“時”よ

ここで、全ての会話の内容を思い出した。      この記憶は、なんだ……？

「夢………？ 望み、代償……夢じゃ、ない？」

いや、そんなはずはない。確かに夢とは思えないほどに思考ははつきりとし、先ほど思い出したとはいえ、内容を鮮明に覚えている……それはおかしいことなのかもしれない。ただ一つ。自分の願った望みのことだけはどうしても思い出すことは叶わなかったが、それは些細なことだ。

“明晰夢”というモノもあると聞く。先ほどの夢は、その明晰夢なのだろう。そう仮説をたてようとするも、やはり彼の中の何かはその可能性を否定する。彼の求めた“望み”。そして、“声”から言い渡された“代償”……“時”。それは確かに叶えられ、捧げられたと。そう、感じるのだ。

とはいえ、感じるだけで実際はそうではない。今までとなんら変わらない、意味のない日常が始まるうとしていただけなのだ。身体に軽い違和感を覚えるものの、いつもと変わらず、始まる日常。そこには叶えられた望みも、捧げられた代償もない。　　だいたい、“時”が代償？　ふざけるな。主語がなければ何の時間を捧げられたのかも分からないではないか。

そんな当たり前なことに思い至り、やはり先ほどまで感じていたモノは全て錯覚だという答えに行き着いた。いい加減な夢に、彼も付き合っていられない。

そうして彼、“永崎 晃雅”は再び足を下ろす。ベッドから立ち上がり、身支度を整えるため、部屋を後にするのだった。

自身の住む安物のポロアパートを出た晃雅が向かうのは、幼馴染

の家。今日は“学院”の入学式であり、幼馴染は同学年で同じ学院に入学するのだ。

「あつ、晃雅！ おはよう」

その少女は柔らかい印象を与える茶色の髪をポニーテールに纏め、晃雅の方へ控えめに手を振っている。髪と同色の瞳は遠慮がちながらも優しさに満ちていて、学院の物であろう制服を身に纏っていた。同じく制服姿の晃雅が彼女の家に着いた時、彼女はちょうど家を出るところだった。二階建ての彼女の家は、小洒落た青い屋根の家。先ほど晃雅が出てきたボロアパートなど、比べるべくもないほどに大きな家だ。

「おはよう、咲良」

咲良。さくらと読む。“上原かみはら 咲良”というのが、彼女の名前だった。

「うん。……あの、会ってく？」

“会ってく”……彼の家族に、ということだ。晃雅は、家族に忌み嫌われている。それは魔術が当たり前の現代において、魔術師として最高峰の家である“天城寺家”の息子である彼が魔術を使えない事実依る。彼が普段から名乗る“永崎”という苗字は、本来の名前ではないのだ。その上、“天城寺”の名を剥奪されただけでなく、家から追い出されるほどに、忌み嫌われている。彼が“天城寺”姓を名乗ること、それが天城寺の名を貶める……そう考えての、冷たい処罰だ。

当然、晃雅はそんな家族を快く思っていない。



「いや、必要ない」

答えは決まっていた。

だが、運命というのは時として残酷だ。代々“天城寺”に仕えてきた家系、“上原家”は、当然のように“天城寺”の屋敷のすぐ近くにある。………二人の会話途中、ちょうど、天城寺家の者と出くわしてしまったのだ。やはり、ここまで来るべきではなかったかもしれない。彼は思わず、そう嘆息してしまう。

当然、天城寺家の住む屋敷はすぐそばに見え、純和風のその様相は、高い貫禄を見せ付けるかのように威圧的であった。そんな屋敷から、天城寺家の者は現れた。

「あら、無能さん。どちらに？」

現れた女性は、黒い髪に紅い瞳を持つ、妖しい魅力を纏う美女だった。目元など、晁雅に似ている部分があり、なんらかの血縁関係この場合は姉弟なのだが、それを感じ取ることが出来た。

「今日は学院の入学式だぞ、天城寺 希美<sup>のぞみ</sup>。新入生が幼馴染と登校しようとして、何が悪い」

それでも、晁雅にとっては嫌味な姉でしかない。最近は巷で“最速の魔術師”と呼ばれ始めている彼女を、その性格からどうしても受け入れることが出来なかった。もともと、受け入れられないのはこちらかもしれないけど。そう自嘲してしまいがら、反抗の意志だけは示すように、その鋭い瞳に力を込める。

「……やだ、“汚点”に睨まれたわあ、こわい」

“汚点”………天城寺に類する親戚関係にある者たちによる、彼

の通称“天城寺家史上最悪の汚点”からくる略称のようなものだ。魔術適正が低い者を見下す傾向にある彼らは、当然のように、魔術を使えない晁雅を弾劾し、見下し、“天城寺”との縁を切らせた。他にも“無能”などの呼び名を使い、晁雅はそんな彼らを常に忌々しく思っていた。

「なんとか答えなさいよ。……それに上原の者。あんたはいつまでこんなヤツと一緒にいるつもり？ 無能に慈悲をかけてるつもりかもしれないけど、やめなさい。代々“天城寺”に仕えてきた“上原”の優秀な血が腐るわ！」

ニヤリと笑いながら、希美は言った。……それは咲良に向けての言葉であったが、晁雅にとっても看過できない言葉だった。

何も言い返せない咲良の代わりに、晁雅は姉に向けて言葉を吐く。

「天城寺 希美……！ 咲良は関係ない。咲良には、絡むな」

肉親をフルネームで呼び、しかめっ面を崩さない彼は、常にそれを標準装備するに至った。そんなしかめっ面で、彼女を睨む。にじみ出す殺気は、彼が意図的に放出したものだ。

「……野蠻。いいわ、“無能”に興味はないもの。じゃあねえ、“無能”とその“腰ぎんちゃく”さん」

そう言って、彼女は去っていった。風の魔術を“最速”の名にふさわしい早さで展開（自身の“オド”を魔力として放出することを指す）し、纏った風によって空を飛んで去っていったのだった。

「……………ごめんね」

去っていった晃雅の姉、希美とは反対方向に進み、学院を目指す。その途中で、唐突に咲良が口を開いた。

「ん？ なにが？」

「お姉様のこと。……………私がもっと早く起きて、晃雅の家まで迎えにいけばよかつたのに」

なんだそんなことか。彼はそう思う。晃雅にとって、あんなものは一人暮らしを強要され、金だけを押し付けられた十三歳になる前まで、ずっと慣れ親しんできた（といえば語弊があるかもしれないが）“敵意”なのだ。どうということはない。

「いや、あれは俺の家族の問題だ。咲良は関係ないよ」

「……………ちがう。私、なにも言い返せなかったから。私は、私の意志で、望んであなたといえるのに」

「お前がそう思って、俺と一緒にいてくれるなら、それでいい。咲良は俺の唯一の味方なんだ」

それよりほら、いくぞ。そう促し、晃雅は学院に足を向ける。これ以上、恥ずかしい言葉を吐きたくなかったのだろう。心持ち、彼の歩きは速いものになった。

咲良はそんな彼の後ろ姿に微笑み、そんなコトをしている間にとんどんと離れていく距離を埋めるため、走って晃雅の横に並ぶのだった。

俺と一緒にいてくれるなら(後書き)

次回投稿は五月二十三日(月)を予定しています。

よろしくな、親友っ！！

国立天凧上位魔術学院。天城寺家が居を構える天凧市に造られたことがその名前の由来だ。

通称“学院”。学院と名乗ることを許されるのは、ここだけであることから、全ての人々に“学院”と呼ばれている。

世界で一番の権力を持つ天城寺家が創立したため、その教育水準は非常に高く、特に魔術学において、他の学校では足元にも及ばないほどの水準を誇っている。良い家柄の者にとっては、この学院を卒業することが一種のステータスともされるほどである。

七年制である“学院”の入学資格は、至って単純。四月の入学式の際に十五歳以上になること。筆記試験をパスすること。最大魔力上限が規定以上であること。そして、一つの魔術を披露し、認められること。……それだけだ。

実技が、魔術を一つ披露し、認められるだけで済むのには理由がある。最大魔力上限が高い者は、総じて魔術師としての才覚に恵まれているのだ。そして、最大魔力上限を計ることは至極簡単。魔力測定水晶に触れるだけでいい。

例年たくさん受験者がいるこの“学院”が、このようなシステムで入試を行うのは、むしろ当然なのかもしれない。たくさんの実技で実力を測るのと比べ、水晶に触れるだけで実力を推測出来るのだから。

その構えは壮麗であり、とても広い敷地を有する。どこかの王宮か、と言わんばかりに立派な学院本棟と、そのデザインに合った寮が、まるで離れのように渡り廊下で繋がっている。一々七年生までという膨大な数の生徒を抱え込むことの出来るその寮は、とても立

派だ。さすが、家柄の良い者のステータスとされるだけのことはある、と納得出来る豪華さを誇っているのだ。

そんな“学院”に立つ少年、“吉井 海斗”は、とある事実には驚愕していた。まさかこれほどとは。

「ふっ、おもしれえ。……この魔力量、マジハンパねえな」

彼は赤く染めた髪の下から覗く蒼い瞳を好奇の色に染め上げ、手にしたツールを見つめている。ツールとは魔術的補助機器のことであり、彼の呟きから察するに、ここでは魔力量を測るために使う機器のことを指すのだろう。

「ちよいと様子見に行きますか」

海斗は一つ、ニヤリと笑みを残し、一番強い魔力の元へ向かうことにした。

しばらく歩き、ツールが一番強い魔力を示している人間の方を見る。後ろから見える影は二つ。黒い髪の少年と、ブラウンのポニーテールの少女。少女の方も高い魔力を有しているとツールは示すが、海斗を驚愕させるのは黒髪の少年の方だ。現在ですら驚異的な魔力量を誇っているにも関わらず、まだまだ尋常でないスピードで増え続けている。はっきり言っておかし過ぎる。この分ならば、魔術学上有り得ないと言われている、膨大な魔力量の証である金の瞳を持っている、なんらおかしくはない。普通ならあり得ない金の瞳でも、この魔力量ならあり得ると考えることは可能かもしれない。

そんな“あり得ない”特徴を持つ少年は、隣に立つ自分の肩より少し上ぐらいの身長を持つ少女と共に、“学院”の一角の壁に張り出されているクラス発表の紙を見て、自身のクラスを確認していた。

「咲良。お前、何組だった？」

「ええと……あ、A組みたいだよ。晃雅は？」

「ああ、俺も同じみたいだな。運がいい」

その容姿に見合った綺麗な微笑みをこぼし、咲良を見る。いつもは鋭い印象を受ける金色の瞳は、薄く細められている。

「ホント?! やった! 席も近いといいね」

「そうだな」

実際は出席番号からして近い席などはありえないと分かっていたが、晃雅はとりあえず肯定の意を示す。魔術を使えず、同学年の者にも蔑まれてきた晃雅にとって、唯一親しい仲にある幼馴染が近い席になることは、嬉しいことに変わらないのだ。

そんなことを考えながら、そろそろクラスの方に向かおうと咲良を促そうとした時、彼はふと後ろから近づく気配を感じ、振り返る。どうしたの? そう咲良が聞く前に、その気配の主が二人に話しかける。

「やあやあお二人さんっ! 同じクラスだったんだって? 話、聞こえたぜ。実は俺も同じA組だったりすんだよな。まあ、よろしく頼むわ」

赤く染めた髪。耳には派手なピアス。蒼い瞳を輝かせ、吉井 海斗がそこにいた。……つまり、魔術を使えない晃雅、その彼の魔力量が、海斗を驚愕させる膨大さを誇っているということだ。

その彼は、晁雅が何かを答える前に、さらに言葉をつなげる。まるでマシンガントーク。自分の言いたいことを言うだけ言って、そのまま去ってしまうのではないかと思うほど、一気にまくし立ててゆく。

「んでさあ、俺ってツールの制作が得意だったりするわけよ。ない才能は技術で補えってな。そんなんだから、自分で作ったツールをいつつも持ち歩いてたりするんだ。で、今使ってたのは魔力量を測るツールだったんだけど……あんだ、すっげえ魔力だな？　しかもまだ増えてるし。暴発とか、しないワケ？」

今度は、『早く話せよ』とでも言いたげな目で、彼の方を見る。どうやらこの少年、随分自分勝手な性質たぶのようだ。

だが、彼の疑問はもつともでもある。何故なら、魔術師にとつて“暴発”とは一般常識だからだ。“暴発”　それは、自身が保有出来る魔力の最大量、つまり最大魔力上限に、回復していく“オド”が達し、三日ほど経った場合に起こる現象で、力が暴走して最終的には爆発してしまうことを指す。晁雅の、自身が持つ魔力である“オド”の増える速度が尋常ではないために、彼は晁雅が暴発してしまうのではないか、と思ったのだろう。だが、これは杞憂でしかない、というのが晁雅の持論だ。何故なら……。

「いや、まだ上限に向かって回復してる途中だ。俺の最大魔力上限はまだまだ先過ぎる。未だに上限まで達したこともないし、大丈夫だろう」

そういうことであった。晁雅の最大魔力上限は、果てしない。よって、暴発もないだろう、ということなのだ。晁雅曰く、俺の最大魔力上限は無限だ、ということだ。自身の魔力状況については、自身が一番理解しているハズなので、これは案外正しい見解なのかも



しない。

「ほうほう、そーかそーか。なーんかおもしれえな、お前っ！ 余裕なところが、なんか気に入った！」

ニシシッと笑い、明らかな不良ルツクのくせに邪気の無い瞳を向ける。海斗は、本当におもしろいと思い、その笑みを隠そうともしない。

「あつ、そういえばさあ。やつべえ魔力持ってて、でも魔術が使えねえって噂の残念なイケメンって、もしかしなくてもあんたか？ …… ありゃ、でもなんで魔術使えないのに、“魔術披露”の試験をパス出来たんだ？」

相変わらず無邪気な表情で訊ねる海斗であつたが、三人の間に流れる空気は確かに凍った。せつかく晁雅に友達が出来ると思ったのに。咲良はそう落胆し、非難の目を海斗に向ける。

そんな咲良がさらに不機嫌にならぬよう、晁雅は名前も知らない目の前の赤髪少年に、別れの言葉をかける。

「俺を笑いにきたか？ やりたければやりゃいいけど、今は邪魔だ。後で陰口なりなんなりたいたいといってくれ。じゃあな。……いや、魔術披露について一つだけ。俺は魔力量だけは高いから、魔術に対する抵抗力が強い。それで、面接官の簡易的な魔術を無効化したら合格出来た。……じゃあ、今度こそこれで。咲良、行こう」

咲良を促し、彼は右足を踏み出す。……いや、踏み出そうとしたところで常時しかめっ面の顔をさらにしかめる。

「……………なんの用だよ」

海斗だ。彼は晃雅の行く道を塞ぐように動き、慌てて両手を挙げて抵抗の意志がないことをアピールし、弁明する。

「いやいや、誤解なんだって！ そりゃあおもしれえとは言ったし、思ってるけど、そういうんじゃないよ！ あんたみたいなヤツ、嫌いじゃねえんだよ。無能って言われながらも、どっか自信を持ってるように見える。たぶん、魔術が使えなくても有能って言えるほど、すげえヤツなんだろ？ そういうヤツ、俺にとっちゃ興味の対象になるわけよ。んで、友人として、お近づきになりたいワケ！ どう〜ゆ〜あんだすたん？」

友人？ 晃雅は困惑する。今まで、こういう人物には会ったことがなかった。彼を取り巻く世界には、自分を疎ましく思い、蔑む人間と、自身と共に育ち、唯一味方でいてくれる咲良、その二種類しかいなかった。このように友人になろうとしてくる人間は、魔術を使えないと知った途端に離れていった。しかし、海斗は違った。彼は、魔術を使えないことを理解した上で、それを笑いものにするわけでもなく、ただ興味を惹かれて友人になろうと提案してきたのだ。それは、晃雅にとって初めてのことであった。

「……俺と、か？」

「そつ、あんただつつつてんだろ？ いいじゃん、友達が出来たって悪いことなんて別にねえだろ？ ……あつ、もしかして、その可愛いお嬢さんと一緒にいられる時間が少なくなるのが嫌だったか？ すまねえ、まさかそんなに惚れこんでいるとは思わなかったか！？」

最後の言葉は掛け声の類ではなく、悲鳴である。要らんことを言つてのけようとした海斗に対し、晃雅が下した鉄拳による悲鳴なの

だ。

「咲良は俺の幼馴染だ。誤解を招くようなこと言うんじゃないよ」「誤解い？ さっきの二人での会話からして、そういう風には見えなかったけどなあ？ めっちゃ嬉しそうに“運がいい”とか言ってる微笑んでたじゃないかあ？？」

今度の言葉も掛け声ではなく、悲鳴である。先ほどよりも力を込め、凶悪な拳を海斗の頭に落としたのだ。

「さっきより痛いっ！ さっきより数百倍痛いっ！ 大事なことから二度言いましたよおお？？」

「あのっ……晃雅をからかったあなたが悪いと思うよ……？ それに、さっきの数百倍を頭につけて、それが本当なら最早死んでると思う……」

先ほどまで海斗のテンションについていけず、口を挟まなかった咲良の抗議が入った。基本、彼女は晃雅側に着くので、現在の攻撃の対象は間違いない海斗であったのだ。……もちろん、今の晃雅と咲良にとって、これはただの面白半分、冗談半分のようなものだ。その点、彼らはすでに海斗を友人として認めているとも言えるかもしれない。

「ががーん！ こーんな可愛いお嬢さんにまで……っ！ ああ、鬱だ、やべえよコレ。っわけで詫びとしてあんたは俺の親友な。これ、決まりだからよろしく。もちろん、お嬢さんともお近づきに……あわよくば俺と付き合いたああああっ！……」

今までで最大級の叫び声。今度の制裁は、晃雅としても看過出来ないことに対するモノだったので、当然と言える結果だろう。

「調子に乗るなよ？ 友人になるのは認めるけど、それは絶対にな  
い」

「私としても、あなたはちょっと……」

咲良の辛辣な言葉が、海斗のガラスハートに突き刺さる。

「ちっ、もういいしっ！ 恋人にするのは諦めるしっ！！ もうこ  
れでフラれんの二十回目だし、慣れてるから別に気にしねえぞっ！  
！！」

それは色々と虚しい……そう言おうと思う晃雅であったが、これ  
以上のダメージを与えるとさすがに可哀想なので止めておく。この  
海斗だって、チャラくて不良ルックであるという点を除けば、人懐  
っこく、それなりにモテてもおかしくないのだ。それなのにモテナ  
いのは……ご愁傷様としか言えない。

それに、晃雅も人に言える立場ではない。告白をした経験はない  
とはいえ、そしていくらか容姿が整っているとはいえ、晃雅は魔術が  
使えない。よって、彼に恋人がいた時期はない。咲良はあくまでも  
幼馴染なのだ。……と、二人共が言い張るが、それが本当かは定か  
ではない。

晃雅や咲良が、そのように返答に困っている間に、海斗はいつの  
間にか復活し、大きく声を張る。

「さあっ！ 今度こそっ！！」

「今度こそ、なんだ？」

「自己紹介、しなきゃだろ！！ 友達なんだから、名前知らねえと  
な？」

もっともであった。彼らはこれだけにぎやかに話しておいて、ま  
だ自己紹介も終わっていない。……その暇もないくらいに、海斗はし

やべり続けていたのだから、当然と言える結果なのかもしれないが。

「ああ、そういえば名乗ってなかったな。俺は、永崎 晃雅だ。よろしく」

「私は、上原 咲良だよ。よろしくね」

晃雅はいつものしかめっ面をほとんど崩さず、しかし幾分か柔らかい表情で。咲良は軽く微笑みながら。彼らはそれぞれの名前を告げた。

「“こうが”と、“さくら”な。うん、りょくかい！俺あ、吉井海斗だ！よろしくな、親友っ！」

不良ルックのくせに人懐っこい無邪気な笑みを浮かべ、彼はやはりニシシッと笑った。

「があっ！ やっべえ！！ 早くしねえと遅刻じゃね？！」  
「入学早々遅刻とかふざけんなっ！ お前のせいだぞ？！」  
「晃雅っ、そんなこと言ってる間にも走らないと！」  
「あっ！ 忘れてた！ メアド教えてよ！！」  
「いやいや、吉井くん！ 今はそんな暇じゃないから！？」

……中々しまりのない三人組の誕生だった。



よろしくな、親友っ！！（後書き）

次回投稿は五月二十五日（水）を予定しています。

苗字呼びは許さないからな！

結果から言えば、三人は遅刻することなく、教室に辿り着いた。無事に、とはいえないかもしれないが。

「ぜえぜえ……俺、もう天国がみえるぜ……」

「……はあはあ……あれ、綺麗なお花畑が見えるよ、晃雅……」

この通り、若干二名が生死の境を彷徨っているのです、やはり全く以って無事じゃない。とてつもなく広い“学院”なのだ、いくらすでに敷地内にいたとはいえ、先ほど会話していた場所から教室までは、それなりに距離はあるので無理もないが。

そんな中、晃雅だけは少したりとも呼吸を乱さず、自身の席と残りの二人の席まで調べたのち、落ち着いた口調で二人に声をかける。

「だらしないな、お前たち。少しくらい身体鍛えとけよ。だいたい、大抵の魔術師は……いや、そんな場合じゃないか。そろそろ担任もくるだろう。席つけ。咲良はあっち、吉井はこっちだ」

「おいつ親友っ！　なんで俺は苗字呼びなんだよ?!」

海斗は、先ほどまで疲れきっていたのが嘘のかのように抗議の声をあげるが、晃雅は気にせず、返事が出来ないほどに疲れて俯いている咲良に囁く。

「咲良？　大丈夫か？」

「あうう、こつがあ、連れてってえ」



本当に、咲良は危ないようだ。通常だったらあり得ないような甘えた声で、晃雅に助けを求めた。　　こういつ時の咲良は、何を言っても無駄だな。晃雅は、幼馴染のそういう一面をよく知っている。初めて出会った五歳の頃から、ほとんど一緒に過ごしてきた二人だ。あらゆる秘密はあってないようなモノ。互いに、互いのコトは大抵分かっている。

だからだろう。彼は抗議することもなく、素直に彼女を席まで導いた。そして、何食わぬ表情で自身の席につく。その光景は整った綺麗な顔立ちのカップルが、公然と惚気<sup>のどけ</sup>ただけにしか見えず、まだクラスの者は晃雅が魔術を使えないことを知らないので偏見や差別の念は挟まれることはなく、男子からは晃雅へ憎しみにも似た決して好意的ではない視線、女子からは咲良へ憧れの視線が突き刺さった。そんな状態をニヤニヤしながら批評するのは海斗だ。

「ニシシっ！　晃雅、お前らは本当にただの幼馴染か？　朝っぱらからラブラブしやがいだあぁあ！？」

最早お馴染み、晃雅による鉄拳制裁……………　かと思いきや、海斗に叩きつけられたのは明らかにほっそりとした女性の手だった。その白雪のように綺麗な指先をぴんっと伸ばし、その側面を彼の頭に……………つまりチョップの形で叩き込んでいる。

「ぐらあ、席つけえ！　もう朝のHRの時間は始まっているよっ！！」

随分豪快な言葉遣いの女性。言葉の内容からして、このクラスの担任だろうか。その彼女は、紅い髪　海斗のように染めた紛い物ではなく、純粹に紅い髪をストレートに下ろして靡かせ、薄く化粧を施した綺麗な顔にあくどい笑みを浮かべ、にんまりとして立っていた。妙齡の女性ながら、かなりの威圧感を持っている。

「今日はあるたらの入学式なんだっ！ うだうだしてんじゃないよっ！！」

気圧けあつされて大人しく席についた海斗を見届け、その彼女は教卓をばんつと叩き、みなに怒鳴る。……彼女としては普通に“言った”だけだったのだが、“怒鳴る”という言葉が正しいほどにその言葉は荒々しい。

「アタシはあるたらの担任で、名前は関本せきもと 千種ちくみつてんだ。千種先生か、千種ちゃんつて呼びなさいっ！ 苗字呼びは許さないからな！ よろしくう！」

二カつと人懐っこい笑みでサムズアップする。基本、荒々しくてもどこか憎めない……そんな感じの女性だった。彼女のそういう魅力に負けたのか、数人の男子生徒は彼女にサムズアップを返し、  
「よろしくお願いします、千種先生っ！！」と声を揃えて返している。  
……いや、これはただ彼女の色気にやられただけかもしれないが、  
晁雅や咲良は軽く会釈だけで済ませて（基本、挨拶は重んじる性質ちである）いるが、返事をしない生徒もいた。ノリが悪い云々ではなく、ただ彼女のテンションについていけなかったのであるう。朝からあのテンションは、存外キツイものがある。とはいえ、挨拶を返さなかった生徒や、会釈で済ませた生徒が、朝でなければサムズアップを返したかと訊かれれば、問いの答えは否であるのだから。  
そんな中で、海斗はもちろん……。

「千種ちゃんっ！ 俺と付き合ってくださいだああっ！！？」

懲りずに告白（紛い……？）をして、それを受けた当の本人に鉄拳制裁をくらっていた。……痛みに快楽を感じるという、おかしな性癖の持ち主となる者が開ける扉は、是非とも開かないでいただき

たい。

「さあて！ 変質者の討伐も終わったところで、さっさと連絡済まして式場まで行ってもらおうよ！」

こうして、朝のHRは騒がしく始まり、つつがなく進行され、数分で終わりを告げた。

「よし、じゃあ連絡終わりっ！ 今から式場向かうから、みんな着いてきな！ ……あーっと、道中、変質者には気をつけるよ？ 最近、いきなり告白し始める赤髪ピアスの変質者がこのクラスで出没するらしい。特に女子っ、気をつけるように！ うし、それじゃ、始業式もそろそろ始まるから、さっさと行くぞ。ちゃんと着いてこないと、この広い学院で迷子になっちまうからな」

彼女は冗談半分（であろう）言葉をニヤリとしながら言い放ったのち、クラス中が笑いに包まれる前に式場への先導を始めた。生徒たちも、早速近くの者たちとくすくす笑い合いながら（中には豪快な笑い声をあげる男子生徒もいたが）、その後を追っていった。

「いやいや、俺は変質者じゃないからね?！」

残された海斗の、虚しい反論が空っぽのクラスに響く。

「吉井、反論が遅いぞ。もう既にあの人は生徒の先導を始めてる。ここからじゃ聞こえないだろうな」

「……………いや、なんか一応反論しておかなきゃいけない気がするよ……………」

「吉井くん、変なの。……………あつ、置いてかれちゃう。晁雅、行こ

う?」

釈然としない海斗に首を傾げつつも、咲良は晃雅を促す。彼も、それに対して『そうだな』と、海斗など全くお構いなしに答え、教室を出た。

「いや俺は?!」

またもや、海斗の悲痛な叫び声。

そんな叫びを哀れに思ったのだろう。晃雅を追いかけて教室を出ようとしていた咲良は、振り返って微笑み、一言。

「吉井くんもついでに、行こっ」

「ついでにつ???!」

なかなか可哀想な仕打ちを受ける海斗であった。この時、既に彼の“いじられキャラ”という役割は定着し始めているのだった。

「入学式……………本当にやるのかね?」

国立天凧上位魔術学院、学院長室。そこで壮年のオヤジのくせして大人気なく愚図る、白髪混じりの金髪の男一人。東條 斉。  
これでも“学院”の長である。

「毎年のことでしょうか? 学院長はもう少し、しっかりなさってください」

そんな物臭ものくさいな学院長を、なんの感情も込めずに諫める声。 谷  
口 真樹まき。艶やかな黒髪が特徴の、メガネをかけた秘書である。彼  
女は内心呆れ返っているのだが、その感情が面おもてに出ることは無い。

「それでも「しっかりなさってください！」……………やればいいのだ  
らう?」

真樹の二度目の諫める声。今度は、先ほどのモノとは違い、軽く  
怒気も込められた叱責であった。いつまでも駄々をこねる子供のよ  
うな学院長に、嫌気が差したのだろう。

無感情だった彼女が、唐突に内心をむき出しにする。…………中々の迫  
力を持ち合わせていた。その迫力に負けたか、はたまたどれだけゴ  
ネても入学式の進行に学院長は不可欠であると諦めたのか、東條  
斉はその重い腰を上げる。

「……………仕方ない。私としても責務は果たさなければならぬから  
ね。ただ、今年も入学式直後に“アレ”をやる。いいね?」

「“アレ”ですか。確かに、伝統ではありますからね。ですが……  
…わざわざ入学式の日に行う意味、ありますか?」

どうやら、彼らの言う“アレ”とは、入学式に行くべき行事では  
なかったようだ。少なくとも、真樹はそう思っている。

そんな彼女は、自身が問いかけたことに斉が答える暇も与えず、  
話を続ける。

「“アレ”は、言ってしまえば授業の一環のようなものです。少な  
くともあなた以前の学院長は、入学式の日……………しかも抜き打ち状  
態で、行ってはいなかったと聞き及んでおります。第一、生徒たち  
が困惑してまいりますよ」

「困惑、大いに結構。その方が、こちらとしても見ていておもしろいじゃないか。だが、私は生徒たちが困惑することだけを楽しみにしているわけではない」

彼はここで言葉を切り、なにが嬉しいのか満面笑みで、“アレ”を入学式の直後に行う理由は……と、まるで子供のように告げる。

「ただ単にめんどくさいからだっ！！ 入学式直後にやれば、適当に進めても『生徒の困惑を誘って、困惑時の対応を学ばせるため』みたいな理由をつけて説明も適当に、唐突に始めることが出来るではないかっ！！！」

それに、面倒なことは早めに消化するに限る。そう続け、彼は満足そうに学院長室の扉に手をかける。やっと、入学式の式場へ向かう決心がついたのだろう。

真樹は学院長の言葉に更なる呆れを感じるものの、今度は『言っても無駄』という事実負け、その感情を面に出すことはない。そのまま出て行く学院長を見届けた後、自身もその後ろにぴったりと着いてゆくのだった。

ちなみにこの会話。入学式が始まる五分前に始まり、開始予定時刻の十分後に終わった会話である。……学院長・東條 斉が、どれだけギリギリまで、というより予定時刻をはみ出てまで『入学式なんてやりたくない』とこねていたのか……そう考えるだけで、この学院の存続を危ぶんでしまうのは、秘書である谷口 真樹だけではないのだろう…。

苗字呼びは許さないからな！（後書き）

次回投稿は五月二十七日（金）を予定しています。

存分に楽しんできてくれたまえ！

入学式式場。ここは学院の食堂にもなっている所であり、普段は  
一〜七年生までの生徒、延べ千人以上が一堂いっどうに会かいする大食堂とでも  
言うべき場所なので、そのスケールは非常に大きい。また、学院の  
外装に負けることはなく、壮麗で優美。さらにたくさんシャンデ  
リアを高い天井からぶら下げており、これもまた豪華な美しさを魅  
せている。

大食堂の隅に飾られている、咲き誇る花のようなガラス細工は、  
繊細な魔術行使による賜物だ。その色は赤や青、緑や黄色……………つ  
まり火や水、風、土などの四元素……………いろいろな魔力を宿し、とて  
も鮮やかに煌く。普段は食事をするためのテーブルも、現在いまは取り  
払われ、変わりにたくさん椅子が立ち並ぶ。これもまた豪華で、  
生徒の座るものとは思えない。そこで、“国立天凧上位魔術学院”  
の入学式は執り行われるのだ。

そんな式場の椅子、そこに座る二人の人物。彼らは自身のクラス  
の最後尾に二人並んで座り、学院長が来ないのをいいことに、二人  
で騒々しく……………いや、片方の赤髪ピアスの少年が騒々しく、もう  
片方の黒髪の少年は軽く聞き流し、たまに『そうだな』などの合い  
の手を入れるだけだが、そのような感じで会話をしていた。

晃雅と、海斗である。入学式ではクラス毎に男子二列、女子二列  
で並んで席に座るらしく、ちょうど折り返しの出席番号であった晃  
雅と、男子で一番最後の出席番号である海斗の席は、隣同士になっ  
たのである。残念ながら咲良の席は少し離れており、会話は出来そ  
うもないが、海斗はそんなことも構いなしに、愉しそうに喋り続  
ける。



「晃雅晃雅っ！俺さあ、あだ名呼びに憧れてんだよねっ！！」  
「だから？」

ハイテンションの海斗に対し、晃雅の対応は冷たい。……それは当然だろう。何故か学院長が中々姿を現さず、その間はずっと海斗のマシಂಗントークを聞かされていたのだから、不機嫌になっても仕方ないのかもしれない。

「だから！俺はあだ名というモノに憧れているっ！！そういうことだ」

「……憧れているから、どうしたいんだって聞いてるんだ。それくらい解れ」

ついでにでこぴんを一発。ここらでストレスを発散しておかないと、マシングントークアレルギーでやられる……！そう判断したのでこぴんだった。

そして、晃雅のでこぴんは存外に痛いモノらしく……。

「いってえええ！なにすんだよ晃雅ア！？」

「うっさい。学院長が来てないとはいえ、ここは結構静かだ。自立っぞ」

まあ、すでにマシングントークだけで十二分に目立っているのだが。そのようなことを考えながら、晃雅は前に向き直り、『この赤髪バカとは無関係ですよ』とでも言いたげな真面目くさった表情でぴんつと背中を伸ばして座りなおした。

「……………なあ、俺の扱い、酷くな」うるさい「……………はい」

海斗は、口答えをする勇気を奮い起こすことすら出来なくなっていた。

だが、学院長はそれからしばらく経っても来ない。先ほどまで騒々しい話をずっと聞かされていた晃雅は、ざわついているとはいえず、隣が静か過ぎる状態にも逆に違和感を覚え、先ほどの海斗も少し可哀想だったかもしれない、と考えを改め、もう一度話しかけてみることにした。

「……………吉井」

「おつ、なにになに？ 話してくれる気になった？ やっぱ晃雅もこの沈黙の暇さには耐えられなくなったか！ そーかそーか、俺は嬉しいよ、うん！ で、さっきの話だけどさあ、俺はあだ名に憧れているわけよ！ 分かる？ あだ名っ！！」

この時点で、晃雅は既に後悔を始めていた。やはり話しかけなければよかった。そう思ってしまうほど、海斗の音量は大きく、晃雅を後悔させた。

だが、晃雅はもうこれ以上彼を諫めることはない。諫めたところで、この赤髪少年の声の大きさは変わらない。そう悟ったのだろう。その代わり、海斗の話を聞いてやり、さっさと会話を切り上げることを選んだのだ。

「そうか、あだ名な。じゃあ、お前にあだ名をつけてやろうか。しようがないな、まったく。……………そうだ、バカイトというのはどうだろう。お前があまりにもバカであることに由来す「いやいやいや、おかしいよねええ？」……………悪い、ふざけた」

早々に会話を切り上げることを選んだはずだったが、晃雅は自ら会話を盛り上げてしまった。静かにしている周りの生徒からは、

颯<sup>ひんざつ</sup>の視線の嵐である。

「って、そういうんじゃないよ。あだ名で呼ばれるってよりは、あだ名で呼びてえんだよ。………つーわけで、これから晃雅のことは崎ちゃんって呼ぶ！ おーらい？」

「永崎の“崎”から取って、それか？ ……センス、ないな」

確かに、いいセンスをしているとは言えないかもしれない。ただ、あだ名というのは元来そういうものだ。そこまでセンスのいいあだ名など、そうそうない。よって、今回のセンスのなさも、“標準的な”センスのなさと言えるだろう。

とはいえ、大抵のあだ名というモノは呼びやすさを重視することが多いのだが、今回の場合は明らかに“晃雅”の方が呼びやすい。そこから察するに、海斗はただ“あだ名呼び出来る親友”というものがいることに憧れたのだろう。このような人懐っこい性格ならばそれくらいの親友はいそうなものだが、全ての友人は名前呼びに留まっていた。つまり、海斗にとってはあだ名呼びの親友など初めてであったというわけだ。………晃雅も親友と認めているかどうかは別として。

「うっさい、いんだよ別に！ だから！ 今からお前のあだ名は崎ちゃんです！ ハイ、けつてーい！ 異存は認めんっ！！」

ニシシッと笑い、嬉しそうに海斗は告げた。対して晃雅の表情はいつも以上にしかめっ面で、不機嫌丸出しである。

しかし、晃雅は悟る。これは、いくら抗議しても無駄だな。

悟った瞬間、彼は訂正することを諦めた。深い溜め息をついたのち、心底呆れかえり、不機嫌であることを隠しもせずに答える。

「……………勝手にしろ、吉井」

「だからさあ、俺は苗字呼びは嫌いだって言つて「そんな話聞いたことない」……………ともかくつ、親友なんだから名前で呼んでください！」

「うるさい吉井。……………おつ、学院長もこちらに来たようだぞ、吉井。だから前向いて静かにしとけよ、吉井。それと、まだ親友とは認めないからな、バカイト」

辛辣な言葉は、海斗のいたいけなガラスハートに突き刺さる。通常ならば『苗字呼び連発うううう！！』どんな嫌がらせですかア？！それとさりげなく“バカイト”を混ぜんな！！それがいつちばん腹たつ！！』などと抗議したのだろうが、それは叶わなかった。何故なら、先ほどの昇雅の言葉通り、本当に学院長が食堂の奥にある壇上、そこにあるマイクの前に立っていたからだ。

『あー、ゴホン。テストスつ……………よし、大丈夫のようだ』

間抜けなマイクテストを行い、満足そうに頷く学院長。白髪混じりの金髪に、碧い瞳を持つ壮年の男性 東條 斉ひとしである。その横には秘書の谷口 真樹も控えている。標準装備のメガネがキラリと光を反射し、それだけでなぜか威圧感を生じさせている。まるでその威圧感にやられたかのように、式場に未だ残っていた少量のざわめきさえも完全に途絶えた。

『私は天城寺家第十八代目当主、天城寺 秀貴ひでたか様によって命じられ、ここの学院長を務める東條家第十九代目当主、東條 斉だ。よろしく……………それでは、今から“国立天凧上位魔術学院”入学式を執り行う！ 起立しなさい』

ガタガタつと椅子から立ち上がる生徒たち。どうせ起立をして礼をするだけの、面倒な行事だが、学院の入学式としてこれは通例。

生徒たちもなんの疑問も持たずに起立した。

しかし……そんな“通例”に疑問を持つ者一人。

『いや、やっぱり立たなくていい。よく考えたら起立礼着席とか意味のないことは、する必要がないね。というわけで座りなさい。ほんの少し話してすぐに他の先生方にマイクを譲ろう。もうここに立つのすら面倒だ』

……………他ならぬ学院長である。彼の勝手な物言いに、折角立ち上がった生徒は、それでも素直に従って着席した。それは、東條斉の威厳によるモノなのか、それとも『また勝手なこと言いやがって』とでも言いたげな谷口 真樹のさらなる威圧感におびえたのか、どちらなのだろうか。

「かあ、てつきとうな学院長だなあ！ でも、おもしろえ」

それでも海斗にとっては大した威圧感も覚えなかったらしく、皆が着席した後に悠然と、偉そうに腰を下ろした。そして、先ほどからずっと座っていた晁雅に小さく声をかける。

「なあ、なんで立たなかつたんだ？ まるで、すぐ座らされることを知ってたみたいだな？」

そう、晁雅は学院長の『起立しなさい』という言葉をあつさり聞き流し、ずっと着席したままだったのだ。

「知らないのか？ 学院長の東條 斉は、天城寺家の傘下、“御尊おんみこ四家”……その中でも東を守護する東條家の第十九代目当主だ。あその当主は代々物臭な人物が多いらしくてな。一にも二にも“面倒だ”……そんな人間ばかりだが、意外と話の分かるヤツも多い。

それでも、やはりめんどくさがりなことに変わりはない。だから、どうせ礼はしないと、そう思った」

「ほえ、なんかおもしろえ家系だなあ！ ……ん？ でもなんで、そんなことをお前が知ってたんだ？」

当然、晃雅が実際は“天城寺 晃雅”だからこそ、標準知識として知っていた事柄だ。だが、これくらいの情報は調べれば誰でも分かることでもある。それは、天城寺家によって束ねられ、日本経済を動かす権力者家系である御尊四家の情報についても同じである。

「調べれば、誰にでもわかる。まあ、今回は天城寺家に仕える上原家の者……つまり咲良から聞いて仕入れた情報だけだな」

天城寺家に仕える上原家の咲良と幼馴染である晃雅は、一体何者なのか。そんな疑問が出てもおかしくはなく、晃雅が天城寺家の者であること、つまり“永崎 晃雅”ではなく、“天城寺 晃雅”であることがバレる可能性もあったのだが、海斗は全く気付かない。存外鈍いようだ。いや、イメージ通りに鈍いようだ。

「ふーん。意外と情報の流出って簡単におこるもんなんだな？」

「いや、それぞれの機密についてはかなり厳しい情報規制がなされているらしい。俺が分かっているのは、東を守護する東條家、西を守護する西藤家、南を守護する南原家、そして北を守護する北川家

その全ての家の子供が、この学院の生徒として通ってきているということと、その中でも東條家の息子である東條 仁は、俺らと同じ一年生だということだけだな」

補足だが、それぞれが東西南北を守護すると言っても、日本のそれぞれの東西南北の端に居を構えているというわけではない。彼らは皆、日本の中心地であり、天城寺家が居を構えている天風市に住

んでいる。それぞれの方向に、自身の家系に仕える家系の者を配置し、管理しているだけであり、そのおかげで、彼らの子息は魔術学の最高峰である“学院”に通えるというわけだ。

#### 閑話休題。

晃雅の知る、明かしても問題のない御尊四家の情報を明かし終えたところには、すでに学院長が交代した先生の話も終わろうとしていた。……二人の会話は、存外に長続きしていたようだ。

「話、聞いてなかったけど大丈夫か、俺ら？」

「大丈夫だ。最大魔力上限を超えての“暴発”に気をつける、やら、格式高いこの学院に相応しい生徒として生活しろ、やら、そういう話しかしてない」

どうやら海斗に説明している間にも、晃雅は壇上からの話をしっかり聞いていたのだ。晃雅にとって、これくらいはどうということはない。

「それと、寮の部屋割りについては、あとで学院の掲示板に張り出すらしい。それを見て向かえと、そう言っていたぞ」

「崎ちゃん……あんた、頭の回転速えんだな？ 聖徳太子的な？ いや、あれは数人の話を聞くだけか。崎ちゃんは話しながら他人の話も聞いて、もっとすごい？」

「何言ってるんだ。どっちも軽く流してるから、重要なポイントしか聞いてないし、適当なことしか言っていない。すごいとはお世辞にも言えない。……それより、またあの学院長が壇上に上がるみたいだぞ。あの人はなに言い出すか分からん。だから、前向いてしっかり話を聞いとけ」

晃雅はそう促し、海斗との会話を止め、自身も前を見た。海斗としても“おもしろえ” 学院長に興味があったのか、素直に前を向き、静かになった。

『これで、入学式を終わりとする。……………さて、ここで君たちに一つ。おもしろいことをさせてみようと思う。一泊二日だな。心配するな、君たちの荷物はすでに学院へ届けられ、寮のそれぞれの部屋に空間魔術の補助ツールを使って転送させておいた。思う存分楽しんできたまえよ』

晃雅の“なに言い出すか分からん” という危惧は、早くも現実のものとなった。宅急便で学院に届け、のちに自分で部屋まで運ぶはずだった荷物は、すでにツールの力で転送され、これからの準備もない状態で一泊二日の“おもしろいこと” をさせられるという……………天城寺家の者として、学院の事情や東條の事情も少しは分かるつもりだった晃雅でも、この事態は全く予想していなかった。

『それでは、めでたく“学院一年生” となった諸君、存分に楽しんできてくれたまえ！』

学院長は言葉を吐き、手にしたツールらしき物のスイッチを押す。

その瞬間。

式場が光に包まれ、大きな魔方陣を浮かび上がらせ……………それを確認した生徒たちは他のことを考える暇もなくその場から消え去るのだった。





存分に楽しんできてくれたまえ！（後書き）

次回投稿は明日、五月二十八日（土）を予定していますが、その後は就学旅行も近いので、少し遅い投稿となりそうです。

遅い、とは言っても、六月一日から始まる修学旅行の前には、次回も含めて二回は確実に投稿しますので、よろしく願いますね。

## 〈燦然たる雪の…〉

“空間魔術”は、文字通り空間を操る魔術だ。だが、その空間を操る力を以ってしてもワープやレポートと言った類の力を使うことの出来る魔術師はいない。理論上は可能であるのだが、それほどまでに有能な“空間魔術”を、素面で行使出来る使い手が存在しないのだ。

とはいえ、ワープやレポート。それを成功させることの出来る方法がある。それがツールの力を借りることだ。空間魔術補助ツール“レポートキー”である。

今回、晁雅たちが消え去った折、学院長がスイッチを押したツール。それが“レポートキー”であった。その力と、東條の者としての学院長の有能さにより、今回の転移は可能となった。とはいえ、“レポートキー”は印と印の間の転送しか出来ないのです、事前に式場に印を描いていた、という条件付きなのだが。

それでも、かなりの最先端技術と、ハイレベルな魔術行使能力である。さすがは天城寺家に次ぐ権力者家系、御尊おんみこと四家の者のことである。

そんな“レポートキー”によって転移させられた晁雅たち。彼らは、学院の敷地内にある森にいた。約百四十人強の“学院一年生”たちが、それぞれ別々の場所に転移させられており、近くには誰の気配も感じられないほどには広い森であった。

実際には、東京ドームが二つ三つ入るほどに広いのではないだろうか。百四十人がそれぞれ森の各所に転移させられたのなら、近くに

人の気配がないのも領ける。その上この鬱蒼とした木々……おそらく、他の生徒と遭遇するのは中々に難しいだろう。一泊二日の中で、四、五人の人間と出会えればいい方なのではないか。

晁雅にとつてもそれは同じで、先ほどから圏外になってしまったケータイをイライラしながら、それでも咲良に連絡を取ろうと躍起になっている。

「くそっ……！　いくら授業の一環とはいえ、こんな無茶をやらかすとは。ふざけんなよ、せめて咲良の近くに転移を……いや、文句言つてもしょうがないな。探そう」

いつもは冷静な晁雅でさえ、余程焦つたのか、独り言が増えていく。それほどまでにこの“授業”は唐突であり意表を突くものとはいえ、学院長の言葉を借りるならば“困惑時の対処の訓練になる、”という意義があつたと言いつい訳出来る”ものとなつたのだろう。

そんな授業の意義を体言するかのように焦る晁雅は、それでもまだマシな方だと言えた。何故なら彼は、魔術を使えない分の努力を惜しんでこなかった。魔術師として国防の任についている者たちにも引けを取らない技術を身につけるため、サバイバルの知識もすっかりと学んできた。魔術で事を有利に進めることが出来ないとはいえ、ここで生き残るだけなら、彼にとつて造作もないことだった。それ故の余裕。

だが、それ故にこの“授業”の危険性を理解する。それ故に幼馴染を案じる。あいつは俺が護らなければ……！　魔術が使えなくても、幼馴染を護れるように。それが、晁雅の努力の理由でもあった。

なぜなら、魔術の誕生によって乱れた世界が再び平定された二五十年前より、日本は天城寺家と御尊四家の魔術的才能の高さによって、力を持ちすぎた。彼らが力を失くせば、それを期に諸外国の

者たちは日本を一気に制圧するだろう。現在の力関係的に、日本は外国をほぼ制圧しているような状態にあるのだから、仕方がない。

また、“マナ”が満ちたことよって魔術を使えるようになった人間と違い、一部の獣はマナによって凶暴化し、強力な魔獣と化した。獣のほとんどはマナの影響をあまり受けなかったとはいえ、魔獣化した獣は確かに存在するのだ。……つまり、世界は危険に満ちている。だからこそその“学院”であり、だからこそ“学院”では魔術的戦闘技術の訓練が重視され、だからこそ魔術師の仕事は国防なのだ。

そして、それ故に晁雅は努力した。危険な世界で、魔術師は力を持つ。そんな彼らにも負けたくはないから。魔術を使えなくとも、唯一の味方である幼馴染を護りたいから。彼女が有能であると信じていても、やはり彼には“幼馴染”という唯一の味方を失いたくはないのだ。

晁雅の予想からすれば、この森には一時的に魔獣が放されている。そういう危険から身を護る技術を磨くための訓練のはずだから、そうでなければおかしい。

また、『“学院”の入学資格を持ち、実際に入学してきた君たちだ。これくらい、出来て当然だろう？』とでも言いたげな、学院長の意図も感じ取っている。それなら、やってやるうではないか。

どのように動き、誰を助けようと学院側は文句を言わないだろう。それなら、なにがなんでも咲良を探し出し、護る。そのような心算であった。

そうして、晁雅は自身の転移させられた“印”からようやく動き始めるのだった。

………未だに焦っているせいか、走り出した彼を追跡している

影にも気付かずに。

迫る牙。振り下ろされる爪。酷く鋭利で残酷なそれは、容赦なく彼女を八つ裂きにせんと襲い掛かる。

彼女はその連撃をタンブリングして避け、意識を自身の“オド”へ集中し、展開、詠唱を始める。

「《冷氣、さんぜん燦然たる雪の…》きゃあー！」

が、しかし。彼女が始めた詠唱は、途切れてしまった。未だ彼女を囲う狼型の魔獣たちのうちの一匹が、再び爪を振り下ろしたのだ。なんとか避ける彼女だったが、元々魔術以外を磨いてはこなかったためか、既に体力は尽きかけている。……………限界に近かった。

「これじゃあ……………」

恐怖で金縛りにあつたかのように動かない身体。それなのに、小刻みに震える身体。諦めかける。飛びかかる魔獣。目を瞑る。目前に迫る爪の恐怖から逃げるため。そして……………。

咲良は俺の唯一の味方なんだ

晃雅っ！ 彼女、咲良は死の一步前、その瞬間、幼馴染を想う。そうすると、恐怖で固まった身体は……………恐怖に震える身体は、再び

自由を取り戻す。

自由を取り戻した身体は、自然と、咄嗟に、動き始めた。

「《迅衝。<sup>じんしょう</sup>吹き飛べっ！ 風音！》<sup>ふうおん</sup>」

ビュンっ！ 唐突に巻き起こる風。それは、咲良に襲い掛かって  
いた魔獣を一気に吹き飛ばした。

いける、まだいける！ 早く倒して、晁雅をサポートしにい  
かなきゃいけないんだ！ ……彼女の決意は固い。高度な魔術で一  
掃するのではなく、簡単に展開出来る初級魔術を連発し、冷静に少  
しずつ魔獣に攻撃していけば、どうにかなるはずなのだ。

そして咲良は、魔獣から距離を取りながら、初級魔術の展開を始  
めるのだった。

彼女がこのような思いをしている理由は、至極単純であった。つ  
まり、彼女が転移させられた先の“印”……………そこに、運悪く魔  
獣の群れが通りかかったのだ。その数およそ二十。それも、彼女が  
転移したその瞬間に通りかかった群れなのだった。

当然、魔獣たちは驚き、警戒し……………そして吼える。恐怖を煽り、  
その肉を貪るために。肉食獣である彼らは、今から狩りを始めると  
ころだったのだ。そのための移動の途中、か弱い人間の女性が唐突  
に姿を現したとなれば、転移した彼女が襲われるのは、もはや道理  
とでも言えるだろう。

だが。冷静になった彼女は有能であった。もちろん、転移を果た  
した瞬間から魔獣に囲まれていた彼女が、簡単に冷静になれるはず  
もない。当然のように、彼女は慌てふためき、魔獣を一掃するよう  
な魔術を放とうとして失敗した。

しかし。彼女は精神の平静を取り戻した。……晃雅を案じているから。魔術は使えなくても有能な晃雅。こんな課題、苦勞もせずに乗越えるに決まっている。それでも彼女は晃雅の元へ行きたい。彼女は、少しいいから晃雅の役に立ちたいと、そう思うのだ。

だからこそ彼女は晃雅を想った。おかげで彼女は平静を取り戻す。ここで死んだら、意味がないではないか。晃雅を悲しませるなんて、それこそ一番望まないことだ。

「《飛翔。鋭利なる刃。 クロス・ウィンド!》」

魔獣たちの方角へ飛翔する風の刃。それは彼女の周囲三方向へ分裂し、それぞれ彼女の右、左、前にいた魔獣の腕を斬り飛ばす。

息をつく間もなく、彼女は後ろを向く。魔獣の気配を本能的に察知した彼女は、すぐに次の行動を決めているのだ。

「《陣風。吹き抜ける一陣の風よ!》」

後ろに振り返る反動を利用して、遠心力に従うように動く手を、勢いよく振り切る。その振り切った軌跡から、風が生み出され、吹き抜ける。それは魔獣を吹き飛ばすほどに強力で、咲良の後ろから牙を突きたてようとしていた魔獣をさらに後方へ吹き飛ばし、生い茂る木々のうちの一つに衝突させた。

「まだっ! 《水流。それは轟々と。 アクア・スクリュー!》」

またも左右に迫っていた魔獣に気付き、彼女は両手をそれぞれ其方に突き出す。すると噴き出す水の柱。勢いよく噴出された渦を巻く水の流れは、それだけで敵を打ちつけ、淘汰した。



ふと見ると、彼女は周りの木々をバラバラに薙ぎ倒し、一人そこに佇んでいた。全て、彼女がやったことだ。魔獣とはいえ、そして殺すほどの威力を持つ魔術を發動していないとはいえ、この場に蹲すくまっている魔獣たちの苦悶の唸りに、彼女は激しい吐き気を覚えた。

……………だからだろう。周囲の木々を薙ぎ倒したとはいえ、彼女の周りが軽く開けたようになっただけ。三メートル先はすでに森だ。それ以上に高度な魔術は使っていない。…否、使えていない。つまり、彼女に死角は多く存在した。そこにきて、先ほどの吐き気。彼女は、近づいてくる他の魔獣に気付けなかった。

「グルル……………」

ハツと振り向く。そこにいるのは、熊のような大きな魔獣。先ほどの狼型の魔獣とは比べ物にならないほどに強大な魔獣だ。またも、彼女の表情は恐怖で彩られる。

「あ……………ああ……………や、めて……………」

乾いた声でなされる抗議も、この魔獣には効かない。……………この時、彼女は無力だった。

「グガアアアアっ!!」

その巨体には似つかわしくない初速、そして人間と比べても桁違いの加速度。彼女までの距離を詰めるのは、一瞬だった。

閃光。魔獣の爪が、木々の隙間から差す光を反射した光。閃き、彼女を八つ裂きにしようと襲い掛かる。そして、目の前にある“塊

”を、易々と……まるでバターでも裂いたかのように真っ二つに切り裂いた……。

「はっはっー！ 正義の味方というのはか弱い女の子を助けるもの  
なですよっー！！ つーわけで！ 海斗様とうじょー！！ あっ、  
崎ちゃんじゃなくて残念だった？ ごめんなー？ 魔力探知のツー

ル見ると、あいつは随分遠くへ飛ばされちまったみてえだからなあ」

赤に染まる髪を靡かせ、蒼い瞳を爛々と輝かせた少年は、今日もニシシつと楽しそうに笑う。正義の味方を自称した少年　海斗は、咲良と魔獣の間に立ちはだかつていた。

彼の持つ魔力を探知する自作のツールは、通常では人を識別することは出来ない。だが、晃雅の魔力は異常だ。その高い魔力量故に海斗は晃雅の居場所を掴み、彼が咲良を助けられないことを察した。晃雅の代わりを務めるべきは誰かと考え、自分しかいないだろうと判断した。つまり、とにかく他の高い魔力の元へ……咲良である可能性の高い魔力の元へ向かうことにしたのだ。彼女の魔力量もまた高いので、その判断は正しく、海斗と咲良との距離が近かったことも幸いし、こうして彼女の危機を救えた、というわけなのだ。

まあ、彼が咲良の元に向かった理由は、遠い場所に飛ばされた晃雅以外の課題攻略の協力者を求めるためでもあったのだが。いや、むしろ、それが一番の理由であったりする。

「ニシシつ！　おい、クマさんやーい！　なにを切り裂いてんのー？　それは土人形ですよー！！」

そして、魔獣が切り裂いた“塊”。それが海斗の行使した土属性の魔術の一つだ。……ゴーレム生成と呼ばれ、人型の土人形を創りだす魔術なのだ。

「おっし、今から時間稼ぎでもするから、咲良ちゃんはトドメの魔術を詠唱しといてくんない？　俺あ残念ながら魔術も体術も並でねー。決定打がねえんだ。つーわけでよろ　こっちも、クマさんのお相手に精一杯なのさっ！」

言いながら、彼はぶつぶつと詠唱し、土の槍を創造して握り、魔獣に向かつていく。ダイナミックに動き、魔獣の注意をひきつけているところを見ると、それなりに動けるようだが、やはり咲良の知る晁雅の動きとは、比べ物にならないほど稚拙なものであった。

先ほど、確かに魔獣を吹き飛ばして吐き気を覚えた。しかし、今度は躊躇えば自分だけの問題ではない。海斗も一緒にお陀仏だろう。咲良は覚悟を決め、目を閉じて集中しながら、その綺麗なソプラノで詠唱を始めた。

「《冷氣、燦然<sup>さんぜん</sup>たる雪の煌き。容赦なく凍てつく滅ぼしの風。その全てをいま此処へ》

カッと開かれる眼。鮮やかなブラウンの瞳に、光が灯る。

「吉井くんっ！」

「はいよー！」

咲良の呼びかけを理解し、海斗は真横へ飛び退いた。それを見届けた彼女は、間髪おかずに魔術を発動する。

「《吹雪<sup>ふぶ</sup>け、ダイヤモンドダスト！》

右手を前方に突き出し、その上腕部に左手を添える。そして……。

凍てつく吹雪のような風が、鋭く煌く氷の結晶を含んだ凶悪なそれが、魔獣を包み込む。氷に閉ざされていく魔獣。六角形や八角形様々な切り口を生み出す氷。まさにダイヤモンド。そうとでも言うべき、とても幻想的な氷のオブジェが作り出された。……魔獣を

内に秘めるといふ、その凶悪性に目を瞑れば、これほど綺麗なモノはないのでは、と思えるような壮麗さを魅せ、“ダイヤモンド”は絢爛に輝いていた。

「……………魔獣さん。ごめんなさい」

パチンっ！ 指が鳴らされる。それが魔獣にとっての鎮魂歌レクイエムとなる。

瞬間、壮麗なる氷のオブジェは、指の鳴らされる音を合図に……………魔獣を伴って粉々に碎け散った。

〈燦然たる雪の…〉（後書き）

次回投稿は五月三十一日（火）を予定しています。

## 降参するのは、お前だ

走る、走る、走る。

息も乱さず、一定のスピードを保ち、鬱蒼とした木々の隙間をひた走る。目の前に迫る木に衝突しそうになれば身を捻り、全くスピード落さずに走り続ける。時にはジャンプして木の枝に捕まり、勢いのままに前に進もうとする力を利用し、枝をグルンと半回転するように高く飛び上がってさらに上の枝に乗り移り、高い木の上から周囲を見下ろす。

彼の鋭い視線は、他の生徒たちを悉く見つける。すでに五人ほどの生徒を見かけた。……が、その視線の先に咲良はいなかった。

「ちつ……いないか」

正直、彼は焦っていた。咲良が有能なのは理解しているのだが、彼女は少し要領が悪いところがある。人と接するのもあまり得意な方ではないし、咄嗟の判断は苦手な部類だ。

故に。もしも、と仮定した場合の話だが、彼女が転移された直後に、偶然に魔獣の群れと出くわした場合。大きな魔術で一掃しようとし、失敗、危機に瀕するだろう。それを乗り越えたとしても、激しい戦闘音を聞きつけ、凶暴性を増して血に飢えた強力な魔獣が呼び寄せられてしまう可能性もある。そんな時、彼女は対応出来るだろうか？ ……いや、かなり難しい。それなら、助けなければならぬ。それ故の焦燥だった。

実際は晃雅の思っている通りの事態に陥り、それでも海斗の助けが入ったことよって危機は免れた。つまり、必要のない焦燥であったのだが、それを知る術は今、彼にはない。転移させられた直後



でなくとも、唐突に魔獣に襲われれば咲良が対応出来ない可能性は高く、やはり晁雅は焦燥を抑えられなかった。

それが災いした。気付けない。彼は、彼を追う存在に気付けない。そして、いつの間にやら生徒を見かけなくなったことに気付かない自分が、先ほどから同じ場所をぐるぐると回っていることにも、気付いてはいなかった。

……だが。それでも彼の危機察知能力は飛び抜けていた。

瞬間的に跳ね上がった人の気配。殺気を放出する人の気配を感じ、後ろへ身を投げる。片手をつけて半捻りで回転し、また同じ方向に身体を向けてそちらを注視する。

先ほどまで自分がいた場所には、小さなクレーターが出来ていた。先ほどの殺気の結果……つまり、知性を持った何者かが、晁雅を襲ったということだ。人並の知性を持つ魔獣は確かに存在するが、学生の……それも唐突に行われた実習程度のもので、それほどまでに強力な魔獣を用意するなどあり得ないだろう。知性の高い魔獣は、それだけ多くのマナを取り込んでいるせいか、非常に強大なのだ。そして、“知性の高い魔獣”である可能性がないということは……。

「……僕の魔術で、同じ所を回り続けていることにも気付かない君には絶望してたけど……今でもう少し考えを改めることにする」  
今、晁雅を襲ったのは人であるということだ。そして人であるということとは、生徒である可能性が非常に高いということなのだ。

「なんの用だ。邪魔するな。生徒同士がいがみあう必要はないだろう？ 受験前ならいざ知らず、今倒してもなんの意味もないぞ。どちらも合格している身だ、襲って挫き、自分の合格率を高める必要

なんてない」

晃雅は、目の前に立つ、自分を襲ってきた者をそう諭そうした。  
……… 受験前に他の受験生を襲えば、ライバルが減って多少の意義はある。が、今は関係ないのだ。いくら倒したところで、その利益は全くない。よって、晃雅の論は、正しいと言えるし、合理的であった。

こんなところで足止めされるのは、晃雅にとって非常に不本意だ。そんなことよりも、早く咲良の元へ行かなければならないのだ。

そんな焦燥が彼の苛立ちをさらに抑えられないものに変えてゆく。その苛立ちのせいか、いつも以上に顔をしかめ、金の瞳に映る“その人物”を睨む。そこに映る、自分と同じ制服を着用し、栗色の髪に同色の瞳をした少年は、睨む晃雅の方を見て不敵に笑っていた。

「君が全力疾走して何をしようとしているかは知らないけど、僕にとつてのメリットなら大いにある。僕は、君と戦いたい。その莫大な魔力！ 明らかにエリートの魔術師だ！ 自分の力を試したいんだよ！ 魔力量だけに物を言わせて力押ししてきた魔術師を、自分の技術で仕留める！ すごい快感じゃないかつ！ …… それに、生徒間では助け合おうが、敵対しようが、自由なハズだ」

ニヤリと。“その彼”は笑う。 …… 晃雅は、自分が咲良を助けてもお咎めはないと判断した。つまり、他の生徒に干渉することは可能だと、自分でそう結論付けたのだ。助けることが許されるのならば …… その逆もまた然りしか。栗色の髪の少年が言うように、いくら戦いを挑んでも、咎められることはないのだ。  
しかし、晃雅にとってはそれも迷惑極まりない。

「 …… 普通、魔術師はツールなしで人が内包するオドの量を計測することなんて、出来ないぞ」

「君、自分がどんな不審な作業してるか分かってないのか？ 常人じゃあり得ない莫大な魔力を放出して、しかもそれをもう一度自分に取り込んでる。魔力が君の周りを渦巻いてるんだ。それだけで魔獣は君から逃げている。魔獣にとって、多量過ぎる魔力は恐怖の対象だからな」

そう、晃雅は本当に焦燥していた。そのせいで自分が多量の魔力を放出していることにも気付いていなかったのだ。自身の中に魔力を内包している状態ならば、ツールなしで魔力を感じ取ることは出来ない。だが、放出しているとすれば話は別だ。この膨大な魔力を感じ取って、魔獣が逃げるのも当然。そして、感じ取った生徒が寄ってくることもまた、可能性としてはありうるものであったのだ。

指摘を受けた晃雅は盛大に顔をしかめ、相当に不機嫌な内心を隠そうともせず、深く深く眉間に縦皺を刻んだ。しかし、これ以上魔力を放出し、取り込むという作業をして自身を感じ取られるのは吉ではない。深呼吸をして気を落ち着け、冷静さを取り戻して魔力の放出を止めた。

そんな彼の様子をニヤニヤと笑いながら見やり、“栗色の髪の毛の少年”はさらに話を続ける。

「……………それに、放出した魔力をもう一度取り込むというものおかしな話だし、そもそもなんの現象も起こさずにただ魔力を放出するなんて、一般的には出来ないはずなんだけど？」

「確かに、な。だが、この原理は俺にもよく分かってない。ただ、俺は魔力を放出するともう一度自分に取り込んでしまう。まるで、魔力が俺の外に出ることを拒んでいるかのように」

これは、晃雅だけに起こる特別な現象であった。そして、それ故に魔術を行使する事が出来ない。魔力を放出して火を起こすなどの現象を生じさせる前に、彼は自身の放出した魔力を取り込んでしま

うのだから。

「なっ……………そしたら暴発して……………いや、常人ならとつくに暴発で死亡してるし……………君は、何者だ？」

驚くのも無理はない。“栗色の彼”は、晃雅が魔術を使えないことに思い至ることはなかったが、最大魔力上限を超えても“オド”を回復させ続けてしまうことよって起きる“暴発”を恐れたのだ。

「さあな。俺にだって分からない。俺がこんな存在である意味も、その生きる理由も。ただ、俺の今行うべきこと、実行したいと思うことは一つ。……………さっさとお前を倒して、幼馴染の所に行きたい。それだけだ！」

瞬間。晃雅は勢いよく地を蹴った。その反発力を利用し、“栗色の彼”との距離を一気に詰める。

「くっ……………不意打ちか！」

晃雅は相手の独り言を内心であざ笑い、顎の下から大きなモーシヨンでアッパーカットを仕掛ける。それを間一髪でかわすが、晃雅の攻撃は止まない。そのまま顔を殴ろうとし、“彼”はそれをかわすも、頬にかする。血が滲んだ。“栗色の彼”には、距離を取る暇すらない。必死に素早い拳を避け続け、ゆっくりと後退する。ぶつぶつと詠唱していたようだが、なにかが起るわけでもなく、魔術を使うことは出来ていないように見える。

そしてとうとう、晃雅の拳が腹に吸い込まれ……………。

「なっ！？」

いつの間にもやら“栗色の彼”の腹の前の空間に一つの歪みができ、そこに晃雅は拳を沈めていた。どうやら先ほどの詠唱による魔術、それは成功していたらしい。

その後の“彼”の動向を警戒し、晃雅は歪みに沈んだ拳を勢いよく引き抜き、バック転の要領で身を投げ、何度も連結させて大きく距離を取った。

「不意打ちとは、卑怯だな。僕は君と力比べがしたいだけなんだ。力比べの前に、名前くらい名乗るのは礼儀だろ？ 名乗る暇くらい与えてくれよ」

「……………勝手に名乗れ」

晃雅の対応は冷たい。冷静になったとはいえ、未だに晃雅の目的は咲良の元へ向かうことだ。その冷静さ故に、今さら焦って走り出し、すぐにでも助けようとしているわけではないが、それでも咲良の元へ向かうことが一番の目的である彼にとって、これほどまでに必要のない行事は、酷く鬱陶しいものにしか感じられないのだ。

また、咲良を助けに行くのは、自身の唯一の味方である“幼馴染”と共に在りたいからであり、その感情はさらに“栗色の彼”への苛立ちを募らせる結果となったのであった。

「随分不機嫌だな。……………でも、まあいい。僕の名前は“杉山 いつか”。どちらかが降参するまで、よろしく頼むよ」

「……………永崎 晃雅だ。力比べを所望するのはいいが、一つだけ言いたいことがある」

彼はここで言葉を切る。申し出を断つてもどうせ攻撃される。なら、俺は申し出を受け入れ、戦えばいい。……………そう判断し、さらに続ける。

基本、負けず嫌いの傾向にある彼だ。自身が降参して、咲良を助

けに行くという考えに思い至ることはなく、その言葉はひどく挑戦的なものである。

「降参するのは、お前だ」

ニヤリ。しかめていた表情を崩し、意地の悪い笑みを浮かべる。そして晁雅は身を低くして駆け出す。今度は、いつかの方も警戒を怠っていないかったため、その動きを注視し、距離を取りながら詠唱を始める。

すでに晁雅の考えは、早々にいつかを倒して咲良の元へ向かおうというモノに切り替わり、いつかは決闘とでも言うべきこの“力比べ”が執り行われることに歓喜していた。

こうして、彼らの戦いは始まるのだった。

降参するのは、お前だ（後書き）

明日から修学旅行ですので、次回投稿は早くて六月三日の金曜日となります。

金曜日は家に着くのが午後十時頃になりそうな予感ですので、最悪は土曜日となります、すみませんm（――）m

ようこそ、僕の支配する空間へ。（前書き）

修学旅行から帰ってきました。

いやあ、やはり長崎県は遠い！

そういえば、この小説の主人公の苗字は永崎ですねえ。  
読みが同じです。

……まあ、関係はないんですが。

と、いうわけで、一応完成したので、八話目をどうぞ！



ようこそ、僕の支配する空間へ。

「吉井くん！ そのツールで、晃雅の居場所が分かるんだよね？」

魔獣を《ダイヤモンドダスト》で粉々に粉碎し、しばらく森を進んで多少は安全であると思える場所に移動した咲良は、一緒に来た海斗にさっそくそう訊ねた。彼女の目的もまた、“幼馴染”との合流なのだ。どちらも、相手の能力を信じながらも、少しでも役に立とうと、護ろうと、サポートしようと思流を目指している。ある意味、互いに依存しているとも言えるし、こういう面においては似た者同士であった。

「ん？ あ、ああ、まあ一応な？ でもよ、あいつの居場所、めっちゃ遠いし……ものすごいスピードで動き回ってんだよな。たぶん、咲良ちゃんを探そうとしてんだろうけど、逆方向に走ってるし、あの速さには追いつけん。軌道が変わっても、捕捉はちよいと難しいわけよ。……それで合流は、きつくないか？」

「……うん。でも、晃雅が私を探してくれてるのは、嬉しいな」

少し表情を綻かおばせ、その柔らかなブラウンの髪や瞳に合う優しいげな微笑み見せる。だが、それでも合流できそうもないことに、かわりはない。その事實は、彼女を落胆させるには充分であった。そのせいか、微笑みにもやや陰りが見える。

そんな彼女を見た海斗は、深く考え込みながらツールを睨みつけ、見つめ続け、高速で移動し続ける晃雅の異変に気がつく。

「……ん?! 崎ちゃんの動きが変わった。これは……ずっと同じ

ところを回ってる…？ どういうことだ、あいつがそんな意味のないことをするはずが…」

「同じ、ところ…？ あっ、もしかして…誰か他の生徒に妨害を受けてるんじゃない…」

咲良は危惧した。そして思い至る。自分たちが先ほどの魔獣討伐の際に助け合ったことが示す通り、生徒間でなにをしようとはば自由なことに。そしてそれは、他の生徒を妨害することでさえも許されることを…意味する。

二人の表情は、一気に蒼白に変わる。晃雅は確かに有能だが、すでに敵の魔術によって混乱させられ、森の中をぐるぐると周回しているのだ。かなり危険な状態である可能性も高い。

「た、助けにいかないっ！」

「いや、待てっ！ 崎ちゃんを周回させてる魔術師の居場所さえも掴めねえんだ。危ねえ！」

「でも…！ 晃雅が危ないよ…！！！」

咲良は食い下がる。もはや冷静さの欠片も浮かんでおらず、彼女の頭には晃雅の元へ向かうことしかないようだ。こういう時は、行動を共にしている者が冷静になって注意を促すべきなのだが、残念ながら海斗にもそのような冷静さは存在していなかった。

その上、彼らにとつてさらに混乱するような事態が起きる。

「なっ！？ 崎ちゃんが……な、なんなんだよ、これえ？？！」

「ど、どうしたの？ 晃雅に……晃雅に何が…?!」

海斗は自身のツールを見て驚きの声を発し、咲良もそれに促されてさらに焦燥を増す。そして彼のツールを覗き込む。が、彼女には海斗謹製の魔力探知ツールの読み取り方は分からない。それが彼女

の焦りをさらに酷いものに変え、形の良い唇をわなわなと震わせる。

「よ、吉井くん……一体、昇雅になにが……？」

「崎ちゃんは……あいつは……」

海斗はそこで言葉を切り、乾ききった唇を少し湿らせてからもう一度口を開く。

「……さつき、いきなりツールに認知されなくなった……！」

まるで、この森からいなくなったみたいだ、あいつの反応が無くなったんだ……！ そう告げる海斗の表情は、<sup>かお</sup>どうしようもない不安と焦燥に染め抜かれていた……。

走り出す少年。少し長めの黒髪を風に靡かせ、身に纏う学院指定の黒いブレザーも相俟って、それはさながら黒影のようだ。

そのあまりにも素早い彼の動きは、目で追うことさえも難しい。左右に身を振り、視線を翻弄しながら近づき、攻撃すると見せかけて右に身を投げてフェイントし、素早く対象の後ろに回りこんで、その腰に掌底を叩き込む。

しかし、叩き込まれた方も行動しないわけではない。衝撃で宙を飛びながらも、彼は早口で詠唱を終え、身を捻って後ろを向き、浮かんだままに左手を突き出す。

「《我、支配せし空間を解放す》」

瞬間、掌底を叩き込んだ少年の右腕付近の空間が突然に爆ぜた。いや、そこを基点に、大量の空気が流れ出し、爆発的な、凄まじい勢いで周囲に広がった、と言った方が的確か。……どちらにせよ、そのような火を伴わない爆発であった。

そんな爆発だったが、それでも彼は慌てない。相手の詠唱を聞き取ることは出来なかったものの、詠唱をしていること自体には気付いていたために、なにかの魔術を使おうとしていたことは予想済みだったのだ。爆風に軽く当てられるも、危なげなく後ろに身を投げ、片手で地面に手をつき、ロンダートして向き直る。

しかし、華麗に避けたはずの少年は、どこか驚いたような表情で爆風に当てられたことによって出来た右腕の傷を抑えた。

「……………なんで魔術が効くんだ」

腕を負傷した少年、晃雅は驚きで目を見開いていた。……それも当然だろう。晃雅は基本的に、自身の保有する魔力量の膨大さのせいか、魔術への耐性が非常に高い。“魔術が掠る”程度で、負傷するわけがないのだ。それゆえに、彼は驚愕した。

だが、それは魔術を放った相手、“杉山 いつか”にとっては、魔術が効くことなど当然の事象であり、魔力量が高いからといって魔術の効果を薄めることが出来るなど、知るはずもない。だからか、晃雅の驚きに彼も驚きを示した。

「なにを言ってるんだ？ “風魔術”で傷つくのは当然じゃないか。……それより、僕は君がふざけていることの方が気になるね。どうして、魔術を使わないんだ？」

別に、晃雅はふざけているわけではない。完全に全力を出しているわけではないが、それなりに本気で戦っている。魔術を使わないのではなく、魔術を使えないのだから当然だ。

「それとも、“活性魔術”で筋力とかの基礎能力を上げているのか？ ……いや、それでもおかしい。君の“オド”が動いた気配はない」

いつかは、さらに疑問を膨らめます。晁雅もまた、警戒は怠らないものの、なぜ自分に魔術が効いたのか、と考え込んでいるようで、無防備ないつかに攻撃を仕掛けることはない。人間とは不可解なことには恐怖を抱くもので、そうでなくとも警戒はする。分かるように思考するのは当たり前のことだと言えた。

しかし、思考するだけでは纏まらないのだろう。いつかは、晁雅に問いかける。

「……………もう一度訊く。君は、何者だ？」

それは、晁雅が魔力をなんの現象も起こさずに放出し、さらに取り込んでいると知った時から抱いていた疑問だった。晁雅の行う全てが、“魔術師”としてありえないものなのだ。普通は出来ない“オド”の放出方法。さらにそれを自身に取り込む無意味な行動に対する疑問。そして、“魔術師”が戦闘において魔術を使わないことに対する、不信感。……そんな感情が、いつかの疑問をさらに深めるのだ。

だが、晁雅にとってはどうでもいいことのようにだ。今まで考えこんでいた『なぜ自分が魔術で傷ついたか』という問題については、いつかの魔術の特異性によるものだと考え、それを解明するまでは警戒するものの、これ以上戦闘を中断するのは無駄だと考えたのだろう。もしくは、戦闘を続けることさえも無駄だと判断したのかも。しれない。

「知らん。と、言ったただろ？ 俺だって分かってない。放出した魔

力がなぜまた取り込まれるのかも、なぜ俺が……魔術を使えないのか、ということもな」

「なっ……!?!」

いつかはさらに驚きを深める。その表情は、“度重なるありえない出来事”によって、驚愕に染まりきっていた。

「失望したか？ お前は、莫大な魔力を持つ魔術師としての俺に興味を示し、決闘を挑んできたみたいだからな。……もし、本当に失望したのなら、俺を解放してくれ。俺だっていつまでもお前と一緒にいるつもりはないんだ」

晃雅はもうほとんど警戒を解き、いつでも高速で動けるようにさり気なく力を込めていた両足の力を抜く。魔術を使えない者に対し、この“魔術師”が興味を抱くはずもない。……これまでもそうだった。自分が“魔術行使不可能者”であると知った時、大抵の者は価値の無い者として、見向きもしなかった。そして、家族などの“晃雅が無能だと困る者たち”……つまり家系に泥を塗られる事を恐れる者たちは、彼に憎しみの感情を抱いた。

それ以外の反応を示す者など、数えるほど（というか咲良と海斗だけ）しかない。彼はそんな経緯で『いつかが自分に興味を示さなくなる』と本気で考え、背を向けたのだ。

だが、そんな晃雅の推理は、良くも悪くも……いや、おそらく悪く外れた。いつかは逃げようとする晃雅に、先ほどの魔術で攻撃を仕掛けたのだ。

「?! いきなりなんだ？」

咄嗟に膨れ上がる魔力の気配によって、晃雅はかろうじて避けることに成功するも、不思議な驚きに囚われていた。いつもより幾分

か落ち着きのない様子で、急いでいつかの方へ向き直り、もう一度拳を構える。そして、念を押すように再び訊ねる。

「なんで俺に攻撃する、と訊いてるんだ。“魔術師”にとって、魔術の使えない俺は興味の対象外だろう？」

「なんで攻撃する、だって？ そんなの、君との戦闘に興味があるからに決まってるじゃないか。……いきなり“力比べ”を挑むような僕が言うことじゃないかもしれないけど、君は人の話を聞く気はないのか？ 僕が君に対する興味をなくすなんて、それこそあり得ないね！ 魔術を使えないのに、さっきまでの僕と渡り合えたんだ。それだけで今までの誰よりも興味の対象だ！ まったく、君はおもしろいつー!!」

いつかは、その栗色の瞳をまるで幼い子供のように輝かせ、本当に楽しそうに笑う。魔術以外で魔術に刃向かってくる晃雅に対する興味は、尽きることを知らないようだ。

「……………意味が分からない。いい加減、迷惑だぞ」

「……………それは悪かった。でも、僕はもう少し君と戦ってみたいね」

さすがに悪いと思ったのか、それなりに心の籠った侘びが入ったが、それでもいつかは懲りないようだ。

そして、晃雅にとっても自分に興味を持ってくれた魔術師との戦闘は、中々に魅力的なものだったらしい。咲良のことを気にしながらも、彼は控えめにしかめっ面を崩した。……とはいえ、それは控えめなだけで不敵な笑みには違いないのだが。

「……………続けよう。お前を降参させる、と宣言したばかりだしな」  
「ふふふっ、いいね、おもしろいよ。だから僕も、少し……………」

本気を出そうかな

そう告げ、いつかは懐から札のようなものを取り出し、ぶつぶつ呟きながら地面に投擲した。その札は、ちょうど地面についた瞬間に“白い霧”を生み出し始め、次の瞬間には膨大な体積に膨れ上がる。その“白”は、晃雅といつか自身までも包み込んだ。

白い世界。全てが白い世界。天には青い光がぼつと浮かんでおり、白亜の地はまるで水面であるかのように漣なみを立てている。そんな風景が晃雅の目の前に広がり、今までの森は跡形も無く消えていた。

「ようこそ、僕の支配する空間へ」

いつかは、先ほどの晃雅よりもさらに、不敵に笑う。それは、有利な状況に持つていくことの出来た現状からくる余裕なのか。それとも、今から再び晃雅と“力比べ”が出来ることへの喜びなのか。……どちらにせよ、彼は本当に楽しそうに笑っていたのだ。

同時に常時しかめている表情かおをさらにしかめた晃雅は、それでも溜め息をつきながらやれやれ、というように今度はいつかと同じような笑みで表情を染める。

「こんな密閉空間に連れ込むとは……後悔するぞ」



そう言いながら、彼は半身になって足を肩幅に開き、拳を構える。再び彼らが衝突する合図。魔術師と、無能の、本気の決闘が、始まるのだ。

期せずして、いつかがこの“白い空間”へ連れ込んだことにより、晁雅の魔力がツールに認知されなくなったというのは、余談である。

## 君のライバルとして

響く。晃雅の周囲三メートル以内で起こる、火を伴わない不可解な爆発音が響く。

襲う。アクロバティックな動きで避け続ける晃雅を、特異な爆発が襲う。

おかしい。晃雅の高い魔術耐性を突き破ってダメージを与えるこの爆発が、簡単な詠唱もなしに、無詠唱で、突発的に、起こり続ける現状は、おかしい。

走る。爆発をものともせず、晃雅は視線の先にいるいつか目掛けてひた走る。

殴る。身体を沈み込ませ、反動をつけてアッパーカットを顎に繰り出し、全力で殴る。

それでも、おかしい。繰り返された右拳はいつかの顎辺りに出来た歪みに吸い込まれ、ダメージを与えることなど叶わないのは、非常におかしい。

そんな意味の分からない状況に追い込まれ、危機を感じたのだろう。歪みに吸い込まれた右拳を引き抜きつつ、さらに攻撃を続ける。その攻撃は、相変わらずいつかにダメージを与えることはないが、

代わりに爆発も起こらない。それも当然だろう。素手で攻撃できるほど、晃雅は近くに居るのだ。そんなところで爆発を起こせば、自分まで傷つくのは目に見えている。

爆発のせいで近づけなかったが、今、晃雅はいつかに肉薄し、連撃を続け、魔術を使う暇も与えていない。よって、この不可解な現状についての考察が出来る。……そう考えたのがまずかったのだろう。なぜなら、いつかは魔術を使う暇も与えられていないにも関わらず、晃雅の殴りや蹴りを全て歪みに吸い込ませることを可能にしているのだ。それはつまり、魔術を使っているということ。晃雅は、現状の不可解さに気を取られ、この事実には気付くことが出来ないらしい。

「甘い、甘いよ。失望させないでくれ。《ストーム・カッター！》」

それなりに動き、晃雅の攻撃を軽くかわしながらも、いつかは右手を晃雅へ向けた。

唐突に巻き起こる風。鋭い風の刃を伴うそれは、晃雅を数メートル吹き飛ばすには十分な風量だった。

さらに、吹き飛ばされて身動きの取れない晃雅に、例の爆発が襲う。腹部で爆発を起こし、晃雅は激しい衝撃と共にさらに後方へ飛ばされた。

身を低くして両手を地につき、ズサアッと摩擦させて勢いを落としながら、晃雅はいつかの方を向く。その表情は、傷つけられたことに対する不満と焦燥で埋め尽くされて……いかなかった。むしろ逆。彼の表情は、不敵な笑みと自信に満ち溢れていた。

「なっ?! なんだ、その顔は??!」  
「気付いていないようだな」

晃雅はニヤリと笑い、指をパチンッと鳴らす。

「とりあえず、この気持ち悪い空間から抜け出そう」

瞬間。晃雅の身から大量の魔力が放出され、また取り込まれるという特異な作業が行われ始める。普通なら意味のないその作業。だが、現状ではとても意味のある作業だった。

晃雅の纏う魔力はどんどん勢力を広げ、白い靄だったこの空間を押しつけていく。それに伴って、晃雅の魔力は視認出来る光となり、いつかの目を焼く。思わず目を閉じた。そして。

いつかが目を開けると、そこは自分が空間を創り出す前となんら変わらない森の中だった。ありえない、魔力放出だけで空間を破壊したとも言うのか? いつかはそんな疑問と焦燥に襲われた。

「おかしい、か?」

不意に聞こえる晃雅の声。ここで、いつかはいつの間にか自分が思考の海に沈み、警戒など全くしていないことに気付く。

慌てて構えるが、そんな暇は無いようだ。次の瞬間には地にねじり伏せられ、後ろ手に捻られながらうつ伏せにさせられていた。

捻った腕に力を込め、いつかを脱出させないようにしながら、晃雅は問う。

「お前に一番適正のある魔術は、“空間魔術”だろうか?」

ハツとする。確かに、自身の支配する空間に連れ込みはしたが、それは直前に投げた札のせいだと考えさせるようにしたはずだ。それに、火を伴わない爆発魔術だって、空気を思い切りはじけさせる風魔術として認識させることが出来ていたはずだし、その他にも《ストーム・カッター》という明らかに風属性である魔術も使っている。

……いつかは、空間魔術に適正があることに気付かれるとは、思いもしなかった。

「お前は、自身の爆発魔術を、自ら“風魔術”だと言って、適性は風だと信じ込ませようとした。先ほどの空間に連れ込んだ時も、札を利用して魔術を行使し、“空間魔術”は札という補助がなければ行使出来ないと思うように仕向けた」

晃雅の言葉に、いつかの表情はどんどん蒼白なものに変わっていく。……全て凶星なのだろう。

あいにく、晃雅はその表情を確認することはなかったが、構わずに続ける。

「だが、本当は違う。お前は風魔術も使えるようだが、適正が一番あるのは“空間”だ。最初の爆発だって、“空間”によるものだろう？ 密閉空間を創り、それを極限まで圧縮し、瞬時に解放する。密閉空間の中で圧縮された空気は、もとの体積に戻ろうとして……四方八方に激しい風を撒き散らす。それが爆発みたいに見えるんだろう」

「な、んで、わかった？」

腕を捻られ、かなりの痛みを感じながら、いつかは先を促した。それほどに、自分の魔術と騙しに自信を持っていたのだろう。

「お前の《ストーム・カッター》だったか？　それのおかげで気付いたんだ」

「それはどういう……」

いつかの栗色の髪に隠れ、晃雅からは彼の表情を窺い見ることは叶わないが、それでも彼の表情が疑問で埋め尽くされているであろうことは、容易に推察出来た。

「あれは、純粹な風の魔術だった。今までの爆発魔術も、お前の言う通り風属性のものだと信じて疑わなかった。だが……あの空間の中で、いままで詠唱もなしに魔術を使っていたというのに、《ストーム・カッター》だけは魔術名を呼び、効果を発動させていた。おそらく、お前の使える魔術の中でも高位に値する魔術だったんだろうな。……にも関わらず、あの魔術で俺が受けたのは、風による衝撃のみ。同時に生じていた風の刃の効力は、ほぼゼロだったんだ。さらに言えば、その次にわざとあつた爆発は、《ストーム・カッター》なんか目じゃないほどに効いたことも、俺が気付くための決定的証拠になったよ」

最初に俺を惑わせた魔術も、空間魔術らしい効果を發揮していたしな、と晃雅は続けた。

晃雅の説明。それ自体は、他の誰が聞いても完全に理解することは難しいだろう。だが、晃雅の魔力耐性についてと、自身の魔術の特性について把握しているいつかには、ある程度理解することが出来た。

「つまりこういうことか。魔術によって引き起こされた現象である《ストーム・カッター》は、君の魔術耐性によって効力を弱められただけ、僕の引き起こす空間魔術による爆発は、魔術によって引き

起こされた空気の圧縮という現象が、自然法則に従って爆発を引き起こしたものだから、魔術耐性など関係なくダメージを与えた。そのせいで気付かれたと、そういうわけだな？」

いつかの確認は、概ね間違っていない。晃雅の魔術耐性は、魔術によつて直接引き起こされた魔術に対してしか、耐性を持っていないのだ。それ故に、空間魔術による爆発は効いたというワケだ。いつかは満足そうに頷き、今さらながらに晃雅に訊ねる。

「と、話し込んだけど……そろそろ離してくれないかな？ 僕の負けだよ。それを認めるから離してくれ。痛い」

そう、晃雅は未だにいつかをねじり伏せていたのだ。警戒は怠るべきではないし、離すべきではないのかもしれないが、晃雅はいつかがもう戦意を喪失していると判断し、彼を手放した。そもそも、“力比べ”が目的なはずなので、負けを認めたあとに攻撃する利益は皆無だろう。

「ふう、痛かった。……さて、君って急いでたよな？ いろいろ訊ねたいこともあるんだ。この課題、協力して臨まないか？ 君のやりたいことも手伝うから」

晃雅としても、協力者を手に入れることが出来るのは非常にありがたい。彼もいつかの案に同意した。

「頼む。幼馴染を探していてな。特徴は……」

咲良の特徴を告げた。ついでに、一緒にいるかもしれない海斗の特徴も教える。

「ん、了解したよ。……………それと、探す前に一つ質問したい。なんで、あの空間を破れたんだ？ あれは、空間を維持している魔術師の詠唱を簡易的なモノにする魔術なんだが……………そこまでボロいものではなかったはずだぞ？」

「ああ、あの空間な。ああいう魔術は、術行使者の魔力で構築された陣みたいなものだ。それなら、違う魔力をぶつければ構成は緩くなって、勝手に瓦解する。それだけだ」

つまり、晃雅が魔力を放出して空間を抜け出すことが出来たのは、そういう脆さによるということだ。

「さ、質問は終わり。探すぞ。俺はこっち、お前はあっち。見つけたら上空で空間を爆発させてくれ。俺は魔力を放出する。……………一時間経っても見つからない場合は、またここに戻ろう。そこまでいけば、俺たちの野営の準備をした方がいい」

「分かった。その時には他の質問もするからね。……………君の好敵手ライバルとして、君のことが知りたい」

いつのまにか、いつかの中では晃雅は好敵手認定されていた。ニヤリと笑い、ライバルとして、などと口走ったのだ。

晃雅はさらに顔をしかめ、溜め息をつく。

「また、手合わせを頼むよ」

「……………勘弁してくれ」

晃雅の嘆息が妙に切なく響いたのだった。



## 君のライバルとして（後書き）

次回投稿は、六月七日（火）を予定しています。

ジイイイザスっ！！！！

「あわわ、よ、吉井くん！ 晃雅はっ？！」

「お、落ち着けっ！ ツールの故障ってのも考えられなくもないと思っぞっ！！！」

「でもでも、他の人の反応はするんだよね？！ そしたらっ…！！！」

晃雅といつかの戦闘が佳境に差し掛かった頃。咲良、海斗の二人は、未だに慌てふためいていた。通常は察知しなければならぬ膨大な魔力、つまり晃雅の魔力を、海斗の持つツールが全く察知しなためだ。

会話からして、ツールの故障というわけでもない。実際、いつかの展開した詠唱を簡易化する空間の妨害によつて、察知が来ていなかっただけで、ツールは正常に起動していたのだが、今の二人にそんな事実を知る術はない。

「どうしようっ！ 晃雅が、晃雅が…！！！」

木々の間を行ったり来たりしながら、『晃雅が』を連呼する咲良を見て、海斗の動揺もまた、酷いものに変わってゆく。

「ちょ、もう！ どこ行っただよ崎ちゃんっ！！！」

頭を抱え、もうギブアップ！ とでも言っようにひとしきり喚く。しばらくして顔を上げて、彼のイライラは募るばかりだ。そして…。

「だああ！ もうっつ！！ こんなツール、知らんっ！！」

バキッ！ 鈍い金属音。そして、バチバチつと不吉な音が辺りに響く。

叩きつけたのだ。……ツールを。なんの躊躇いもなく。怒りに身を任せて。ただ只管本能的に。海斗は、その手に持っていた魔力探知ツールを、全力で地に投げ捨て、破壊してしまった。

「よ、吉井くん？ よかったの？ ま、まだ、壊れてはいなかったんだよね？ ……あのお、晁雅ならもしかしたら、自分で魔力を隠してるかもって、そんな可能性もなくもないなあ…なんて、今、思いついたんだけど……」

……沈黙。

痛々しいオーラに身を包み始め、海斗はずーんと沈んだ。いつもなら考えられないほどに暗いその雰囲気は、明らかに負のオーラだ。心なしか、彼の周りにはどんよりと黒いモノが渦巻いているように見える。腰も曲がって下を向き、この世の全てに絶望している、とでも言いそうな雰囲気となっていた。

そして、そのマイナス過ぎるオーラをさすがにまずいと思ったのか、咲良が海斗の背中を撫でて慰めようとした所で…。

「……………ジイイイザスっ！！！」

彼は唐突に顔を上げ、腹の底から出したような大声で叫んだ。木々の間を駆け抜ける大音声が、妙に虚しく響き渡る。

「やっちまった！ やっちまったよオオオ！！ こんなはずじゃ…  
……こんなはずじゃなかったんだ！ だってそうだろ？ あれ創る

のにどんだけ時間かかったと思ってんだっ！ 一年だぞ？ 一年っ！ この俺の最高傑作だったというのに！！ なんて！ 俺は！ そんなことも忘れて！ 自らぶっ壊しちまうんだよオオオオオオオオオオ！！！！！」

ガクっ……………そんな効果音がつきそうな動きで、海斗はその場を手をついた。

「燃え尽きたぜ……………真っ白にな……………」

どこかで聞いたような言葉を呟き、律儀にもその言葉通りに顔色は蒼白を通り越し、白一色……………のように見えなくもない。完全に自業自得だが、彼にとってはかなりの大事件だったらしい。

そして、もう手のつけようの無くなった海斗に、『あわわっ…！』と目を回してどうしようかと考えあぐねている咲良。二人の周りは、既に混乱の極みと化していた。

どうしようもない状況。燃え尽きて真っ白な少年と、可愛く慌てふためく美少女という、はたから見ればおかしいとしか言いようのない状況。

そんな状況を、偶然にも……………いや必然だったのか、見つけてしまっ者一人。

「……………永崎。君の探していた人たちはどうやら……………結構騒がしい人たちみたいだな」

“杉山 いつか”が晁雅と別れる際、その彼がした切ない嘆息。それは、いつかが再び手合わせを望んだことに対する否定の気持ちからくる感情だった。呆れ、と言い換えてもいい。……………その“呆れ

”を、いつかは咲良と海斗の混乱ぶりを見て、激しく感じていた。また、同情もする。

永崎、君は大変な幼馴染と友人を持ったね…。

実際、晃雅にとって厄介なのは“友人”の方である海斗だけだったりするが、そんな晃雅の心など知らないいつかは、二人もの問題児（？）を抱える晃雅に、大層同情したのであった。

「……と、言うことは、晃雅はもうすぐここに来られるってこと？」

首を傾げ、無垢な表情で咲良はいつかにそう訊ねた。

いつかはひとしきり嘆息を終えたのち、二人に近づいて咲良と海斗であることを確認。すぐに上空で空間を爆発させ、晃雅を呼び寄せた。

すぐに走ってくるだろうが、いくら晃雅の足が速いとはいえ、爆発させた次の瞬間、この地に到着しているなどと言う、高尚な芸当は出来ない。

よっていつかは、自分が勝手ながら晃雅と戦わせてもらったこと、途中で空間に連れ込んだこと、その空間のせいで魔力の反応が消えただろうこと、戦闘の過程で仲良くなった（と、いつかは思っている）こと、そして晃雅の幼馴染である咲良を探すことに協力していることを話したのだ。

「ああ、まあそうだな。僕が追いかけてる時から、彼の動きは尋常じゃなく速かったし、そろそろ来る頃かもしれん」

「そっか！ よかったあゝ。……あ、でも、今度から勝手に晁雅を攻撃しないでね？ 危ないでしょっ」

危ないことはしちやいけませんっ！ とでも言いそうな表情で説教（もどき）をする咲良。どことなく、お母さんの雰囲気を漂わせていた。

そんなほのぼのした説教の合間にも、嘆く少年一人。

「ああ……もつと早く、早く晁雅の反応が消えた理由を言ってくれば……。言ってくれば、俺のツールが壊れることはなかったのに……」

なんとも言えない奇声で泣き叫ぶ、吉井 海斗その人である。彼のアマリにも悲痛な叫び声は、やはり虚しく木々の間を通り抜けていき、すでに夜になるうとして空に儚く吸い込まれていった。

セリフだけ聞けばいつかを攻めているように見えるが、そうではないのだ。海斗だって、ツールを壊したことは自業自得だと理解している。だが、それでも、やるせないのだ。切ないのだ。今までの努力は、創る過程での苦労は、なんだったのかと。虚しい気分になるのだ。それ故の心の声が、悲痛な叫びとして現れているのである。

「ああああああ……！！ もういやああ！！ 俺のツーーーッルッ  
ー！！ 戻ってこーーい！！ ああああ、いやああああ、無理  
理iiiiiiiiだああっ??!!」

しかし、最後の叫びはただの“悲痛な叫び”とは一味違っていた。

と、言うよりは、ただ、痛覚を刺激されたことに対する反射的な叫びと言えるかもしれない。

「咲良……。無事でよかった」

晃雅だ。彼は、叫びをあげる海斗を無言ではたき、何事もなかったかのように咲良に声をかけたのだ。

「晃雅っ！ うん、大丈夫だったよ！ 晃雅も……。大きな怪我、してなくてよかった」

声をかけられた咲良も、何事もなかったかのように晃雅へ駆け寄り、心底ほっとしたような笑みを浮かべた。同じように、いつものしかめっ面を崩して優しく微笑む晃雅に、ギャラリー二名（愚かな自称親友と自称好敵手<sup>ライバル</sup>）は、奇遇にも二人して同じことを考えていた。

ああ、この二人はもう救いようのないところまできているんだな

と。二人は無言で通じ合った。

とはいえ、海斗がいじられキャラであることに違いはないのだ。そのことを海斗は、無意識のうちに理解しているし、理解しているのだから、当然そのように行動する。……。いや、してしまっ、と言った方が正しいのか。

「崎ちゃあああん?! なんで俺をガン無視ですかあ??! っつか、その視線はなんだ!! てめえなんてアウトオブ眼中だとも言いたげな目で見るんじゃないやねえええ!! 虚しくなってくるから、

やめてそれえ！！ ホント、謝る、ごめん、構って！！！」

最後にはただの謝罪だ。やはり、筋金入りのいじられキャラだったようで、その言葉は鮮やかに決まった。一度たりとも嘸むことなく、言い切ったのだ。

そして、そんな海斗の反応で、“和やか”　　そう形容できそうな雰囲気にも包まれ、軽やかな笑いが自然と生まれる。離れて見たいいつかも、この三人の関係を粗方つかんだのか、おだやかに笑っている。彼も含め、今日会ったばかりとは思えないほど、晃雅と咲良の雰囲気にも溶け込んでいた。それは、相性によるモノなのか、それとも人懐っこい海斗の潤滑油とでも言えるような役割によるモノなのか。どちらにせよ、今後も四人の関係は続いていきそうな空気があった。

「悪かったな、海斗。ちょいからかったただけだ。……さて、さつさと野営の準備をした方がよさそうだ。手伝えよな」

謝る時だけわざと“海斗”と名前呼びしてニヤリと笑い、悲痛な表情で地に手をつく“親友”の腕を掴み、強引に立たせる。そんな晃雅に驚きつつも、嬉しそうに人懐っこい笑みを浮かべる海斗。……確かにこの二人は今日知り合ったばかりのはずなのだが、この瞬間は本当に仲のいい“親友同士”だった。

とはいえ。

「じゃあまず。咲良は水魔法を使えるから、水源の方向を確認してくれるか？　杉山は風魔法でそこらの木々を軽く切り倒してくれ。吉井は……お前、何が出来る？」

こんな扱いになるのはしょうがないのかもしれない。



「扱いが酷いから?! 一応、土魔術とか得意だからね、俺え??」

「そうか。じゃあ、お前は咲良が見つけた水源の方まで走って、水汲んで来い。……ああ、咲良には手伝ってもらうことがあるから、方角だけ教えてここに残ってもらうぞ」

「それ土魔術関係ない仕事だからねえ?!?!」

本当にいじりがいのある少年、としか言いようのない海斗に、晁雅は思わずしかめつ面を崩し、笑みを浮かべてしまう。……もちろん、黒い笑みを。

「まあ、頑張れ」

「あ、吉井くん。あつちの方向に百メートル行けば、たぶん人工だけど、川みたいなのがあるよ。……それで晁雅、私はなにを手伝えればいいの?」

「咲良は、杉山の切った木で俺が回りに罾トラップを作るから、その手伝いを頼む。……杉山! 木は切れたか?」

「ああ、準備万端だよ」

と、話ほとんどん拍子に進んでいく中、海斗だけは沈黙して立ちすくんでいた。

「あれ、吉井くん。どうしたの? 川は、あつちだよ?」

「……………うわあああん!!」

もう俺には居場所なんてないんだあー! そう叫び、海斗は咲良の示す方向に走り去っていった。

「あれ? 私、なんか変なこと言ったかなあ?」

だが、純真無垢で無邪気な彼女には、海斗をさらに追い詰めてしまったことに気付かないようだ。

「……………あとで、謝っておこう」

「いつ謝るんだ？」

「……………三年後くらい」

「それ、意味ないと思うぞ」

「かもな」

咲良の後ろでは、そんな可哀想な会話がなされていたことも、常人以外には知られない。いろいろと、難儀な待遇の人物だ、吉井海斗というヤツは。

戻ってきた海斗に、それとなく晃雅が謝るのだが、余計にいじりたおしているようにしか見えないという奇妙な状況を経て、野営の準備はやつと終わった。

魔獣以外にも放されていた動物　この場合は鳩だが、それを捕まえ、焼いて食べるといふ豪快な食事を終え（一応、川で捕った魚も丸焼きで食卓に並んだ）、寝る準備を始めた。

一人、女性である咲良には、晃雅作の木製の囲いが用意され、ついでに晃雅の監視によつて、猛獣（この場合は海斗といつかを指す）からの攻撃に備えた。着替えはもともたないので、そのままの就寝である。中々、過酷なサバイバルだ。

罾は仕掛けて在るものの、魔獣がそれを抜けてこないとも限らない。それを警戒し、四人はそれぞれ交代で不寝番をすることにして、三人が眠りについた。

最初の不寝番は、晃雅だ。

「ふう……まあ、一日ぐらいは寝なくても大丈夫か」

みなが寝静まった頃、しかめっ面をふつと緩め、そんなことを呟きながら空を見上げる。どうやら彼は、不寝番を交代する気などないようだ。

「うん、いい夜だ」

煌く月と星は、近年の都会ではありえないほどに、晁雅たちを優しく照らしていたのだった。

口答えしないっ！

「晁雅っ！　なんで起こしてくれなかったの？！　全員交代で見張りするって言ったのに！！」

「いや、だからそれは……」

「だから、じゃありません！　私たちだって、見張りくらいは出来るんだから、信用してよ！！」

「信用してないわけじゃ……」

朝。結局、全員が起き出すまで空を眺めたり、体を動かしたりして時間を潰していた晁雅は、今までにないピンチを迎えていた。

「口答えしないっ！」

「………はい、すいませんでした」

常に泰然としていた“いつもの晁雅”の在り様ようを、真っ向から否定するような素直な謝罪であった。困ったように、軽く頭も下げている。

この説教もどきを実行している人物　咲良は、晁雅にとって幼馴染であり、親友であり、妹でもあり、恋人でもあり（やはり本人たちは認めないが）、そして母親のような存在でもあるのだ。だから、晁雅は、自身を心配してのこのような言葉にどうしても逆らえない。強いて言うなれば、咲良の“おかーさんモード”には逆らえない、といったところだろうか。

「うん、分かればよろしい　………無茶はしちゃ、ダメだからね？　心配なんだから……」

「ああ、ごめん。……悪かったな」

もう一つ、謝罪。いつかと戦った時のような自信に満ちた晃雅は、もうここにはいない。彼の弱点は、紛れも無く咲良であった。……とはいえ、彼を引き立てるのも、紛れも無く彼女であるのだが。

と、晃雅と咲良の……というより咲良の一方的なお説教が終わり、その光景を見ていたギャラリー二人は、ひそひそと言葉を交わす。

「おいおい、あの崎ちゃんが素直に謝ってるぞ？ さすが、“嫁パワー”はすげえな」

「嫁パワー？ あの二人、夫婦なのか？」

驚くいつか。確かに、高校生の年齢で夫婦などありえない。と、すれば、許婚か……考察するも、海斗のマシガントークがそれを許さない。

「そうそう！ 俺も昨日の朝に知り合っただばかりなんだけどな？ そりゃもう朝っぱらからいちゃいちゃらぶらぶら新婚さんしていたのだよ！！ 見ているこっちのことも考えてほしいだああっ！！？」

炸裂。もはや、説明は不要だろう。止まることを知らないマシンガントークに困惑気味だったいつかを助けたのは、話題にされていた黒髪の少年だ。

痛みを悶え苦しむ海斗を凍てつく瞳で一瞥し、晃雅はあくまで冷静に訂正する。

「幼馴染だと言ってるだろうが。勝手に関係を偽るんじゃないねえ」  
「でも、見た限りでは……」

ギロツ！ そんな効果音がつきそうな視線が、先ほどの言葉を言いかけたいつかに突き刺さる。もちろん、視線の送り主は晃雅だ。その威圧感に圧されたのか、いつかの額をツーツと冷や汗が伝う。

「……………いや、なんでもないよ」

いつかにかけられていた重圧が、その言葉を境にフツと和らぐ。

「分かればいいんだ」

先ほどの咲良の言葉『分かればよろしい』……………ニュアンスは違つうと言えど、言葉の意味はほぼ同じである。だが、彼はそこに戦慄する。

同じ言葉で、ここまで印象が変わるものなのか…！

黒い笑みをたたえた晃雅の言葉は、咲良の満足げに言い放たれた言葉とは性質も、本質も異なるモノであった。

かかっていた重圧は和らいだとはいえ、いつかの脳はいつにない危険信号を発している。もう、彼はすでに後悔し始めているのだ。とんでもない人物を好敵手ライバル認定してしまったのかもしれない、と。

とはいえ。晃雅は、基本は冷静で大人しい部類の人間だ。先ほどまでの黒い笑みも、本気で怒っていたわけでもなく、どちらかといえばくだらない冗談に近い。それを理解しているのか、咲良も何も言わずに微笑んでいた。

……………その微笑みが、いつかにどのような印象を抱かせたかは別として。

「…………ふ、二人して、ここっ、怖いよ、うん」

どうやら、いつかはへたれキャラを確立し始めているようだ。魔術的才能において、この四人の中で一番光るものがあるにも関わらず、だ。……海斗に続き、いつかも相当難儀な立場に追いやられてしまったものである。

「ほえ？　なにが怖いのか、杉山くん？」

「……………咲良ちゃんにその気がなくてもね、いつかには晁雅の笑みと重なって見えちまったんだろうな、しょうがねえ」

どこかの外れな咲良の質問に、海斗は全てを知ったような口調で返した。

おそらく彼は、晁雅が珍しいお茶目で黒い笑みを見せたことも見抜いているし、それを理解している咲良が『晁雅だったらまたふざけちゃって』という感じの微笑みを見せていることも察しているだろう。

……………いじられキャラ街道まっしぐらの彼にとって、この瞬間からいつかが同情の対象、もしくは仲間と認定されることとなる。

さて。海斗の言葉によって頭の上ではてなを浮かべて考え込んでいる咲良はさておき、そろそろ朝食を用意すべき時間である。海斗などは朝食を摂らない朝も多かったのだが、晁雅は違う。朝食を食べないと気が済まない性質なのだ。それは咲良も同じだ。

「さあ、くだらない冗談は置いて。さっさとメシにしよう」

今までおびえたり、同情したり、はてなを浮かべたりと、忙しかった面々だったが、この言葉で空腹であったことを自覚した。

「うんっ！ 用意しよっ」

「そうだな！ うわっ、考えたらすげえ腹減ってきた！！」

「確かにな。僕も、空腹だ」

やはり、空腹を満たすという行為は、幸福に直結するようだ。朝食を摂る、そう決まっただけで、皆の表情が<sup>かお</sup>あからさまな笑顔に変わった。

しかし、今はサバイバル。食事を作るための準備も許されておらず、狩りや採集以外で食料を得ることなど出来ない。今朝の飯は、昨日の残りを咲良の氷魔術で凍結させておいた肉を解凍したものにしかないようがない、という事実は、言わぬが華であろう。

そんなこんなで虚しい朝食を終えた四人。やはり、肉だけの食事は味気ないものだったらしい。それも前日の夕食からそうだ。せめて木の実でも……と周りを見ても、そのようなモノが生<sup>な</sup>っている様子はない。

端的に言えば、朝から肉だけはキツイ。そういうことなのだ。

「崎ちゃーん。なんか俺、スナック菓「うるさい」……………希望ぐらい言っただっていいじゃんかよー！！」

「思い浮かべると余計に虚しいっ！ とにかく黙れ」

このような会話がなされるほどには、朝食に対する不満は大きかった。

今は、この一泊二日のサバイバル演習が一刻も早く終了すること



を願うばかりである。その終了時刻が近づいているであろう、と予測を立てられるからこそ、木の実を探すという行為に手を出していないので、これはかなり切実な願いでもあった。

「でも、永崎はサバイバル知識が豊富なんじゃないか？　なんでも、昨日のうちに木の実やら果物やら、採集しようとしなかったんだ？」

もはや、八つ当たりと言っていいだろう。なぜなら、『そんな暇はなかった』のだから。前夜、彼らは日が沈んでから合流を果たした。そこから魔術を駆使してかなりの速さで肉や魚を確保したものの、遠くに生っているであろう木の実などを採集している暇などなかったのだ。夜行性の場合が多い魔獣トラップに備え、罠まで造っていたのだから、どうしようもないことだったと言えるだろう。

その旨を、晃雅は適当に説明し、うんざりといつものしかめっ面で溜め息をつく。

「はあ……」

そして、溜め息とは意外と伝染するモノでもある。晃雅の疲れたような溜め息に誘われ、皆の朝食への不満が溜め息となって吐き出される。

……………  
陰鬱。

「だああ！　んだよこの空気っ！！　もっとこう、ぱあっと明るくいこうぜ、なあー！」

そして弾けた。陰鬱な空気に耐え切れなくなった海斗の叫びが響き渡る。さらに、これを機に場の空気が一変する。

「さて。朝食も終えたことだし、なにか暇つぶしでも考えようか」「えーと？ 俺っちの言葉は無視ですか？」

海斗の苦言は、誰の耳にも入らなかったようだ。その証拠に、咲良も実に楽しそうな表情で晁雅に賛成する。

「そうだね！ いつまでも朝ごはんまで落ち込むなんて、時間がもったいないもん」

「僕も賛成だ。まあ、このままここでのんびり雑談しながら過ごすのも悪くないと思うけどな」

ついでに、いつかも追従し、海斗は黙るより他無かった。

「……………」  
「……………」  
「……………」

黙りこんだ海斗を、なにか期待するような目で見る三人。しかし、海斗はよく分からない、といった風で、首を傾げる。

「んだよ？ 俺の顔になんかついてんのかあ？」

「……………」いや、吉井？ さっき、お前はいじられたんだ。なんらかのリアクションを入れてくれないと、こっちも暇つぶしにならないだろうが」

今までの会話。それ自体が、晁雅たちにとってはただの暇つぶし

にすぎなかったようだ。

「……いやいやいや！ なにそれどういうこと?! え、どっからがいじりのための布石なわけ?! つーか俺いじりで暇つぶししようとするなよ!！」

「悪いな」

「気持ちが悪くないからああ???!」

鮮やかに海斗の悲痛なツツコミが決まり、彼を除く三人は吹き出した。声をあげる、とまではいかないものの、本当に楽しそうに笑う。そんな光景に、海斗もさらに喚くのがバカらしくなり、共に笑う。

和やかに、四人が笑い合い、朝食への不満による陰鬱な空気は、綺麗に払拭されたのだった。

『ごほんっ！ “学院一年生”の皆様。四月六日、午前十時となりましたので、これにて課題を終了とさせていただきます』

ちょうど、彼らが和んだところで、学院長の秘書“谷口 真樹”による放送が流れた。これで、長かったサバイバル課題は終了だ。この鬱蒼とした森のあちこちに学院の関係者らしき黒服の男たちが転移し、生徒たちを出口まで案内し始めた。

自称好敵手でへたれという厄介な“杉山 いつか”を加え、晁雅の“仲間”はまた一人増えた。はてさて、これから彼らは“学院”でなにを成し、なにを想うのか。

……それは、今の時点では誰にも分からない。

## 波長が合っただよ

長い、長い廊下。シャンデリアで装飾された天井。さらには壁を鮮やかな魔力の光が飾っている。灯された魔力の色は様々であるが、その色は決して喧嘩したりせず、互いの魅力をさらに高めあっていた。そして、その絢爛な壁面に等間隔で並ぶ扉の数々は、生徒たちの住まう寮部屋に繋がっているようだ。

そんな壮美で長い廊下。そこに並ぶ扉の数々。その扉の一つの前で、なにやら期待に満ちた表情で立ち尽くす、ほんのりと桃が差す艶やかな髪の少女が一人。

「いよいよ、だね。やっと、ここまで来たんだ。………うん、頑張るぞ。私だって、やれば出来るんだ。頑張れ、私。頑張って、私の魔術を認めさせるんだ」

抑えきれない期待感からなのか、少女は独り、呟いた。完全に誰もいないと思っっているらしく、その呟きは中々に大きい。

だからだろう。彼女自身は聞かれるなど全く思いもしていなかったのだが、その呟きを聞かれてしまうこととなった。

「ひとり言。結構大きいね」

「ひゃっっー!」

びくっ! 驚いて振り返るとそこには、柔らかいブラウンの髪を揺らし、軽く首を傾げる少女がいた。

呟いた彼女自身、ひとり言を聞かれるとは思っていなかったので、

その驚き様は滑稽とも言えるほどに大きかった。それはもう、薄桃のロングストリートヘアをダイナミックに振り乱し、バサッと音を立てながら振り向くほどのリアクションだ。

そして、後ろから話しかけた少女は、基本的に社交的なほうではなかったらしい。そのあまりに大きな驚き様に、彼女まで慌て出した。

「あわわ、ごめん！ 驚かせちゃった？！ う、後ろから話しかけちゃだめだよな？ あうう……」

ぽかーん。そんな擬音が似合うような表情で、パチパチとスミレ色の眼をまたたき、薄桃の小さな唇を半開きにしてしまう。後ろから声をかけてきた少女が慌てる様は、それほどに滑稽だった。

そしてその慌て様は、見ている彼女を逆に冷静にさせた。そのスミレ色の瞳から驚きの相は消え、ある程度落ち着いてきているように見える。

「えっと、大丈夫？ ……ひとり言を聞かれちゃったのはちよつと恥ずかしいし、びっくりもしたけど、そんなに慌てなくてもいいよ？」

落ち着いたついでに、慌てる少女を宥める。その彼女自身は、その程度で宥めることが出来るとは思えないほどの慌て様だったのだが、宥められた彼女は案外素直な性格らしい。都合がいい性格とも言えるかもしれないが、先ほどの言葉だけで落ち着きを取り戻す。

「そう？ よかったあ。……あつ！ 私、上原かみはら 咲良さくらです。よろしくね」

切り替えが早すぎる、と言うべきか。もうすでに先ほどまでの慌

てぶりはどこへやら。その柔らかなブラウンの髪と瞳に違わ<sup>たが</sup>ない、  
優しいな笑みを浮かべている。

咲良自身は社交的な方ではないが、確実に人を惹きつける笑みで  
あった。その辺り、人懐っこい笑みで人を惹きつける海斗に通じる  
面もあるのかもしれない。

「私は“高<sup>たか</sup>峰<sup>かみね</sup> ゆあ” 。よろしく、上原さん」

「咲良、でいいよ？」

「じゃあ咲良。私のこともゆあって呼んで。改めてよろしくね」

言いながら、手を差し出す。握手を求める手だ。

「うんっ！ よろしくっ。 この学院で、最初の女の子のお友達だ  
よ、ゆあはー！」

「私は、男女含めて最初かな。 ……あ、部屋どこ？ 近いといいね。  
ちなみに私は目の前の部屋ね」

そう言って、目の前にある扉を指差す。先ほどから、ずっと立ち  
つくしているこの廊下から見える扉の一つだ。

「ここ？ えーと、私は……………」

言いながら、掲示板に張り出されていた紙に書かれていた自分の  
部屋番号を確認する。自身の番号は違う紙にメモしていたので、確  
認は簡単だ。

「んーっ……………208号室だから……………あっ！ 私もここだよ！」  
「ホント？ やったね！ 相部屋っー！」

寮は基本的に二人部屋だ。一人部屋にするスペースは充分にある

のだが、相部屋にすることである程度コミュニティを作らせようという学院側の意向によつて、そうならしい。そして、基本的には魔術占い学に基づいて決められた、相性のいい者同士が相部屋になるように設定されているとか。

「ああ、よかつたあ。私ってちよつと人見知りするから、お友達作るの大変なんだあ。ゆあと一緒に、嬉しいっ」

満面の笑みを見せ、ブラウンの瞳を優しく細める。いかにも彼女らしい微笑みだが、これで人見知りする、という言葉は信じられない。

……晁雅は昔からの幼馴染であり、海斗やいつかとの対面には晁雅がついていた。そのため、馴染むのも早かつたのだが、ゆあは違う。本来の人見知りを発揮し、まともに喋れないはずだつたのだが、饒舌とも言えるほどに、咲良は安心して会話していた。

そこを疑問に思つたのだろう。ゆあは“社交的ではない”という彼女の言葉を否定する。

「結構、社交的だと思うけどなあ。今だつて咲良、初対面の私と普通に喋つてるよ？」

「あ、そういえばそうだね。なんでだろう？」

うーん。そんな雰囲気です首を傾げ、考え込むように眼を閉じる。その長い睫毛は綺麗に閉じられ、しばらくの沈黙が続くが、やがて彼女はひらめいたように顔を上げる。なにをどうやったのか、頭の上で豆電球がピカッと点くエフェクトも忘れない。おそらく魔術を発動したのだろうが、芸が細かいというか、必要ないというか。そんな技術だ。

「私とゆあは、波長が合うんだよ、きつとー」



そして、考えこんだ末に出てきた答えは、意外と……いや、彼女の場合必然的に、と言うべきか、シンプルなものであった。しかし、実際それは正しい答えかもしれない。それぞれ相部屋になる人物同士は、魔術占いの相性の良い者同士を選抜し、組んでいる。もちろん男女が相部屋になることはないのも、最も相性の良い者、とは一概には言えないのだが、気が合う、もとい、彼女の言い方を借りれば“波長が合う”という言葉は、かなりの的を射ているのだ。

そんな的を射てもどこか拍子抜けするような答えは、ゆあをフツと微笑ましい気持ちにさせる。こちらも嬉しそうに微笑み、言葉を返した。

「そう、だね。うん、きつとそうだ！　じゃあこれから私たちは、親友ってコトで！」

「うわあ、いいね！　なんか、晁雅と吉井くんみたいっ！」

彼らもまた、昨日会ったばかりであるにも関わらず、親友同士の関係だ。晁雅は一向に認めてはいないが、ある意味彼らも“波長が合う”者同士だ。案外、男子寮で相部屋になり、『うおほっ！、崎ちゃんと同じじゃん！　ラッキー！！』……アンラッキー『ひどいつ？！』『酷くない』……という会話を繰り返していたりするのかもしれない。

「咲良の友達？　今度、紹介してね」

「うん！　晁雅は幼馴染なんだ。優しいんだよ。それに、吉井くんはおもしろいんだ」

海斗は“おもしろい”認定で決定らしい。まだ、“いじりあいがあったていい”といわれただけ、マシだと思うべきなのだろう。

………彼女の“おもしろい”という言葉は明らかに褒め言葉で

あるにも関わらず、海斗に向けられると“いじり”に変わる気がするのは何故だろうか。

「ゴールデンウィークくらいまでには、みんなで会えると思うよ！」  
「へえ。興味出てきた。会ってみたいね。……まっ、廊下で話し込むのもなんだし、さっさと部屋に入ろうか。昨日からお風呂に入らせてもらってないから、シャワーも浴びたいしね。浴びてから、ゆっくり話そう」

サバイバル演習から帰り、学院の大食堂で昼食をとった後に、そのまま寮に向かってきたのだ。当然、身を清める暇はなかった。女性として、それは我慢ならなかったのだろう。思い出した途端に、二人は『早く洗わないと！』とでも言いたげな感じで苦笑し合い、これから共に生活する寮部屋の扉を開け、中に入るのであった。

男子寮の、これまた絢爛な長い廊下。その廊下に並ぶ扉の中、ある一つの扉の前に、黒い髪で長身の少年と、赤く染めた髪と耳に着いているピアスが特長の、一見不良の少年がいた。無論、晁雅と海斗だ。

「うおほっー、崎ちゃんと同じじゃん！ ラッキー！！」

「……アンラッキー」

「ひどいっ？！」

「酷くない」

……本当に、このような会話がなされていた、というのは、

あくまで余談に過ぎない。

「というか、俺が酷い目に遭ってる。こんなうるさいヤツと相部屋になってる時点で、俺の不幸は確定してるじゃないか」

「……ちえ、素直じゃねえなあ！ 崎ちゃんも素直に嬉しいって言えよな！ 親友じゃねえか。だいたい、崎ちゃんは「うるさい」……すんません」

「このような会話がなされていることも、やはり余談でしかないのだ。

「……もう少し静かにしてたら、親友というのも考えなくもないぞ」

「うお？！ ニシシ、やっぱそうか！ 崎ちゃんも俺のコト親友って認めてくれたんだなあ！」

「考えなくもない、と言っただけだ。勘違いすんなよ」

少し昇雅がデレたことも、今回の話ではただのおまけ、ということの一つ。

「そーかそーか！ あの崎ちゃんが！ よっしゃ、親友っ！ さっさと部屋入」何してる。早く入ってこい「……いつのまに入った？！」

こうして、この“波長が合う”親友同士は、咲良たちと同じように楽しげに、しかしやかましく（海斗の一方的なやかましさだが）、部屋に入るのだった。



……永崎です

「で、あるからして、この魔術理論は成り立つわけよ。分かったかてめーら！」

昼食前の四時限目。教壇に立つ紅い髪の女性は、バンッと黒板を叩き、もはや怒号とでも言うべき確認を行った。彼女としては普通に“話した”だけなのだが、どうしても“怒鳴った”としか言いようのない迫力。

ここまで言えば、ある程度察することの出来る者もいることだろう。“学院1 - A組”担任、“関本 千種”。薄い化粧を施した、妙齢の女性教師である。

これは、学院の授業が始まって四日目。つまり、サバイバル演習が終わって四日後のことである。と、言うのも、サバイバル演習が終わった日は、昼から各自自由時間となったためだ。

授業開始後二日間は、どの教科もオリエンテーションのようなものが大半だったので、魔術に関する授業については今日が最初の“まともな”授業だ。

とはいえ、今はまだ実践授業は行われないので、魔術の理論や発動方法、個々人で違いの出る詠唱の原理についてなどを説明する授業となっている。

そんな座学授業。あの“学院”の教師である千種の教え方は、相当に分かりやすいはず……かと言えば、そうでもないのかもしれない。

「先生、その説明では些か分かりづらいと思いますが」

その証拠に、珍しく敬語を使った晃雅から非難、とでも言うべき声があがった。

「おいおい、まーた川崎かあ?! アタシのことは千種先生か千種ちゃんって呼べつつってんだろ?」

とは言うものの、彼女は晃雅の名前自体を間違えている。晃雅の苗字として登録されているのは“川崎”などではなく、“永崎”だ。その間違えがわざとなのかそうでないのか、晃雅には判断がつかなかったが、間違えたことにかわりはない。彼の表情は、余計しかめられる。

「お言葉ですが、俺の苗字は“永崎”ですよ、先生」  
「知ってるって岩崎。それと千種ちゃんって呼べって」

やはりわざとなのか、彼女はもう一度間違える。それも、自分の名前の訂正は忘れずに。さらに言えば、選択肢から“千種先生”というものまで消し去っている。どうやら、彼女としては“千種ちゃん”と呼ばれる方が嬉しいらしい。

「……永崎です。それに、この話題は堂々巡りですね。授業を続けてください。先生」  
「ちっ、アンタも強情なヤツだなあ。他の生徒たちはみーんな千種ちゃんって呼んでくれるぜ?」

不満そうに頬を膨らませる教師。……いくら彼女が整った顔を有しているとはいえ、教師が授業中にとる態度とは到底思えない。と言うよりも、もはや教師失格ではないのだろうか? 晃雅の質問が

発端とはいえ、授業中断の時間もそろそろ長すぎるとも言える。

それを感じ取ったのか、晃雅は話を区切るように、言葉を紡ぐ。

「教師に対して、馴れ馴れしい態度をとる気になれませんので」

やはり珍しい敬語だが、それはそれで板についていた。

だがそれでも、冷静で落ち着いている晃雅と言えども、次にある三度目の間違いは、彼を非常に苛立たせることとなる。

「もつとフレンドリーでいいつてのに。まーいいや、とりあえず崎本、なんか質問あったんだろ？ さっさとしな」

ブチっ！ 晃雅には、そんな何かが引きちぎれる音が確かに聞こえた。いや、いくらか晃雅の近くの席であつた海斗にもその音が聞こえたので、本当にそのような音が発せられたのだろう。

「だから、俺は永崎だ。ながさき！ ついでに言えば、あんな説明でよく授業なんて言えるな？ この学院はあれか、学院長と同じく物臭の溜まり場か？ もつとその魔術理論が成立する証明を細かく、さらにその魔術に対する対処方までキチンと、説明しな」

声を荒げることはないまでも、敬語を崩し、それなりに理不尽な要求。なまじ、晃雅には授業の内容を簡単に理解出来てしまったので、その先を深く知りたくなつたのだ。

だが、そこまで理解出来る生徒は少ない。そのため、彼女も“晃雅ほど深く理解出来ない生徒”……つまり、一般の生徒と同レベルの授業を展開しなければならない。

彼女から見て、晃雅が不満なのは充分に理解できるのだが、先ほどの理論をこれ以上深く追求するわけにはいかないのだ。

よって、晃雅の要求は理不尽と言え、やはり彼も未だ十六歳の子

供だということだろう。

そんな晃雅の状況まで汲み取った千種の反応は、やはり大人、そして“学院”の教師として、荒々しいにしても相応しいものであった。

「おう、そら悪かった。ならこれからアンタは晃雅と呼ばう。苗字より、名前の方が呼びやすいんだ。……んで、もつと細かく授業しろって？ それもいいが、ちゃんと周りを見てやれよ？」

怒るでもなく、諭すでもなく、晃雅自身に間違いに気付かせるよう促したのだ。言われた通りに周囲を見渡すと、千種と晃雅の会話など歯牙にもかけず、未だ理解出来ないかのようにノートにペンを走らせている生徒が多数見受けられた。彼らにとっては、高度な内容だったのだろう。

「……分かったか？ これが、学院一年生の“普通”だ。一番上位の“学院”でこれなんだから、それ以上横着すんなよ？」

晃雅は魔術を使えないとはいえ、魔術に対抗するために魔術については多くを学んできた。それは読書であったりインターネットであつたり様々だが、その知識量は半端ではない。そこからさらに先の知識を学ぶために“学院”の入学を希望したのだから、その研究心はかなりのものだ。

晃雅はここでやっと、自分の知識は周りよりも進み過ぎていることに気がついた。

「……はあ。分かりました。授業を中断させてしまい、申し訳ありません。続けてください」

「分かればよろしいっ！ んじゃ、先に進むぞー！ 次は火の属性



についてだが……」

彼女の講義は、再び荒々しく始まった。

火や水、風や土などの“属性魔術”について。その“属性魔術”を組み合わせ、派生させる“派生魔術”の行使者の希少性について。さらには、杉山 いつかの“空間魔術”のような、“派生魔術”よりもさらに希少な“特殊魔術”の数々についてなど、淡々と、しかし荒々しく説明されていく。

今度は誰かから質問があがることはなく、授業の終了時間はあつというまに訪れた。あえてチャイムを作らない“学院”であり、授業時間が休憩にはみ出ること多々あるのだが、今回の授業ではそんなことにはならず、定時に授業は終了した。

「さて、これで終わりつと。ああ、終わりの挨拶はいいから、各自復習しておくように！ それと晃雅、あれより先の授業は二学期になつたらやるから、楽しみにしてなあ！！」

そう言い残し、千種は去って行った。

そこからが晃雅の災難であった。

「晃雅くん、さっきの理論分かったの？！」

「すごい！ 私なんて全然理解出来なかったのにい！」

「ねえねえ、今度教えてよっ！！」

「ああ、ずるい！ 私も教えて欲しいですっ！！」

「そうだっ！ お昼ごはんは大食堂で、一緒にみんな食べてません

「？」  
「……あ、それいいー！！」

女子から群がられ、それを見た男子に激しい憎しみの視線を向けられるという、晁雅にとって全く以って嬉しくない展開に追い込まれてしまったのだ。

通常なら、男子からの視線を思考から省けばこれ以上嬉しい立場はない、と思うかもしれないが、晁雅は違う。 どうせこいつらも、魔術を使えないと知れば離れていく。そんな確信が、晁雅を不快にさせ、困らせてもいた。いくらこの先拒絶されるとはいえ、自分から拒絶しようとは思えなかったのだ。

拒絶するのにも勇気はある。拒絶されるのに慣れている彼は、拒絶される痛みも拒絶する痛みも知っているがために、やはり困り果てるしかなかった。

「ほいほい、崎ちゃんが困ってるじゃないか！ ほーら、咲良ちゃんとべたべたしたいって言うてんだから、大人しく離れてあげなさいだあああ？？」

困り果てるしかなかった晁雅に助けの手を差し伸べたのは、自称・親友の彼、吉井 海斗である。人ごみが苦手な咲良を後ろに控え、晁雅救出を試みたのだ。……少しばかり余計な事を口走り、制裁を加えられたのはご愛嬌だ。

彼の介入で女子勢が混乱している隙に、晁雅は咲良の隣まで逃げることに成功した。

「咲良、ちょっと出よう。俺らの寮部屋なら、昼休みもゆっくり出来るだろう」

「うん、そつだね！……私も止められたらよかつたんだけど、ごめんね？」

「いいんだ。それより、行こう」

二人で会話を交わし、晃雅の鉄拳制裁で潰れている海斗と、残念そうな女子を残し、彼らは去っていった。

「いやいやいや！ 助けた俺はどうなった?!」

海斗の叫びは、虚しく教室にこだまする。もはや、興味の対象がいなくなった女子たちにも無視され、海斗は余計に惨めになった。そんな惨めな彼にも、救いの光が。

「吉井くんもついでに、行こう！」

教室の廊下側の窓から、なにか思い出したようにひよっこり顔を出し、にっこり微笑む咲良の姿が。その表情は、慈愛に満ちたまさに天使だった。

だが…。

「ついでに?! って、この扱い、ちょっと前にもあった気がするぞ?!?!」

「気のせいだよ吉井くん。ほら、早くしないと置いてかれちゃうよ? 晃雅って、歩くの速いんだから」

そう言って彼女は、先に行く晃雅に追いつがるように走っていった。

今日、海斗が学んだコト。

咲良ちゃんは、残酷な天使さんです。

今日も一つ悟り、海斗は一人、それでも明るく呟く。

「つつても、行く場所は俺と崎ちゃんの寮部屋だから、置いてかれ  
ても問題ナツシング」

うし、行くか！ そう気合を入れて廊下を目指すと、廊下への  
扉には何故か晁雅が立っていた。

「何やってんだ吉井。さつさとしないと本当に置いてくぞ？」

「って、行ったんじゃないのかよ?!」

驚きの声をあげる海斗に、わざわざ彼の元まで戻ってきた晁雅は、  
なんだか決まりの悪い表情で頬をポリポリと掻き、明後日の方を向  
きながら呟くように言葉を一つ。

「つつさい。……………あと、さつきは助かった、海斗」

「あ？ 最後なんて？」

「二度も言わん。ほら、早くしろ」

素直でないところも、相変わらずの晁雅……………なのかもしれない。

なんでお前がここにいる

扉を開けると広がるのは、やはり豪華な装飾が施された部屋。晁雅が今まで住んでいたアパートの五倍ほどの広さを誇り、奥には小浴場へと繋がる扉と、台所へ繋がる扉もある。

ここに住む二人のため、それぞれの机が窓際に置いてあり、晁雅の机は見事に整頓されてたぐさんの本が棚に並べられ、ノートパソコンが閉じたまま置いて在る。また、海斗の方は机の上も横も下も物が散乱していて、二人の性格の違いが如実に示されている。その上には階段で繋がったロフトとでも言うべきスペースがあり、二つのベッドが置かれている。それぞれが寝るためのスペースのようだ。

そして、その広い部屋のと真ん中には折りたたみ式の簡易テーブルが広げられ、すでに四人分の昼食が用意されていた。

「……………なんでお前がここにいる」

誰も用意していないはずの料理が広げられている、この状況。それを作り出した人物であろう栗色の髪を持つ少年に向け、どこか非難するような棘を含む言葉が向けられた。

その言葉を発した晁雅は、不機嫌そうに顔をしかめ、昼食の準備をした栗色の少年を軽く睨む。

「やっとここを見つけたんでね。乗り込んできた」

あ、そう。……………そう言って済ませられる問題ではないようだ。

「鍵はどうした」

「魔術で開けた」

「プライバシ」そんなのないよ」……………」

随分勝手な言い分であった。その栗色の少年　杉山　いつかは、悪戯が成功した子供のようになり、自身の作ったであろう昼食の方に皆の注意を向けさせた。

「ちょうど良かったよ。今、昼食が出来たんだ。……………ああ、材料

はこの冷蔵庫に入ってたものを使ったけど、構わないよな？」

「あ、まあ、うん」

……………沈黙。

どう反応すればいいのか、晁雅たちは図りかねているらしい。それも当然だろう。すでに昼食が用意されている事実は、晁雅たちにとって非常に嬉しいことであるうえ、いつかを部屋に招くことに異論を持つ者などいない。それでも不法侵入だ。その事実にかわりはないし、ひどく動揺を誘う。そういう意味で、この沈黙は妥当なものと言えた。

しかし、いつまでも沈黙を貫いているわけにもいかない。そんな使命感にかられ、沈黙を破ったのはTHE　お調子者（自称）である海斗のほかにはいないだろう。

「ま、まー、用意なしで昼メシ食べるんだし、さっさと食おうぜ！  
な！　ほら、崎ちゃんも咲良ちゃんも座って！」

言いながら、空いている席に二人を押しして座らせ、自分も席についた。そしていつかにも注意の言葉を。

「杉山も、これからは不法侵入じゃなくて俺らにことわってから入

るうな？ OK？ ……うし、それなら大丈夫！ メシ食うか、腹減ったぜ！」

いただきますーす 全員が座ったことを確認し、間髪置かずに海斗は手をあわせ、すぐに昼食に箸をのばした。どうやら、空腹だったのは本当らしい。凄まじい勢いで食べ進めていく。

そして、そんな速さで食べ進める者の末路は決まっている。

「うぐう？！ み、みず…！！」

喉に詰まらせる。それしかないだろう。苦しそうに胸をポンポンと叩きながら、海斗は奥のキッチンへ水を取りに走っていった。

そんな光景に苦笑し、晃雅たちのちよつとした困惑も、跡形も無く消える。どちらにせよ、すでにいつかは三人に馴染んでいるのだ。今さら昼食を共にすることになっても嫌悪感などないし、そもそも、クラスが違ういつかや、咲良と相部屋のゆあも誘おうか、という話も出ていたのだ。三人の間に抵抗はない。

「さ、俺らも食べよう。見た目は美味うまいそうだしな」

「そうだね。私も、お昼ご飯作るのめんどくさかったし…杉山くん、ありがとうね」

晃雅はとりあえず見た目だけを褒め、咲良は素直に微笑んでお礼を一つ。そんな反応に、いつかも上機嫌で『どういたしまして』と微笑む。そして三人で手を合わせた。

「いただきます」「」

先に食べ始めた海斗が持ってきた水を飲んで落ち着いてきたところを見計らい、今度こそ一緒に食べ始める。どうやら主菜は野菜炒

めのようだが、バランス良く彩りを加えたその見た目は晁雅が褒めたようにかなりのものだ。里芋と玉ねぎを具に使った味噌汁がついて、持参したのか漬物まで用意されている。

量は少なめのような気もするが、中々に整った和食であった。

「むう………美味うまいいな。出汁がいい」

「ホントに！ 杉山くんって、お料理上手なんだね！」

どうやら、いつかの作った料理は、その見た目にそぐわない出来栄えだったらしい。二人して味噌汁に口をつけた晁雅と咲良は、満足そうな表情で素直な感想をもらった。

そんな二人に、今度こそ喉を詰まらせないようにゆっくり咀嚼していた海斗も追隨する。

「確かにうめえよな！！ 杉山、どこでこんなん習ったんだ？」

「ふふつ、僕の親が料理人でね。それも、魔術を全く使わない旧時代の料理が得意なんだ。子供の頃に、いろいろ教え込まれたよ」

そのせいで子供の頃は大変だったけどね、と続ける。彼が言うには、子供の頃から魔術師としてのエリート教育を受ける傍ら、料理人としてもしごかれていたとか。

言う通りならば、かなり多忙な子供時代を送ったことだろう。その断言出来るほどには、魔術も料理も高いレベルを持っている。

「まあ、そのほとんど強制的な努力のおかげで、今じゃ魔術も料理もそれなりにこなせるから、助かってるんだけどな」

そう言って笑う。彼にとって、魔術面でも料理面でも、両親にしごかれていた過去は、すでにもう良い思い出のようだ。



その後も、四人で雑談しながら、たわいも無い話題で盛り上がり、昼食を食べ進めていく。食事中の会話はマナー違反である、という文化もあるが、やはり食事は和気藹々と和やかな時間である方が好ましいのかもしれない。そう言えるほどに、四人は楽しげであった。そんな楽しい食事も終盤に差し掛かった頃。咲良が何かを思い出したように『あっ！』と声をあげ、意見する前の合図のつもりか、可愛らしく手を上げた。

「はいはいっ！」

そんな咲良の調子に合わせるように、海斗がどこか古臭い教師のように、ゴホンと重々しく咳払いし、訊ねる。

「なにかね咲良くん」

「えーっと、あのね。杉山くんも一緒に食べることになったんだし、ゆあも呼びたいなあ、なんて！ ダメかな？」

そう提案した。彼女と相部屋である“高峰 ゆあ”も、一緒に食事を摂るのはどうか、という提案だ。無論、そういう話題も今までになかったわけではないので、特に反対意見は出ないだろう。咲良はそう判断した。

「おうおう、女子が増えるのは好ましいっ！ 明日からでも……いや、夕食からでも呼んでやろうっ！」

「いやいや、朝食と夕食は全校生徒が大食堂に集められて一緒に食べるじゃないか。……ま、昼食を共にするのは、僕も賛成だけどね」

やはり、咲良の判断は正しいようで、海斗といつかは快く了承した。

しかし、了承していない最後の一人となった晃雅は、何かを考えこむように腕を組み、中々答えない。その上、どこか顔が青白いようにも見える。

咲良は、まさか晃雅が反対するはずもないだろう、と思っていたので、些か不安げに彼を促す。

「あの……晃雅？ 嫌、だったかな……？」

その不安そうな声音に、晃雅は思考の海から浮上して、どこか慌てたように否定する。

「ん？ あ、ああ、いや、大丈夫だ」

「そう？ よかったあ！ でも、少し顔色悪いよ？ 本当に大丈夫？」

今度は心配そうに晃雅の顔を覗き込む咲良に、晃雅は精一杯微笑む。

「大丈夫だよ、咲良。心配してくれて、ありがとうな」

「おつとお！？ またノロケかあ？？！ もはや他所でやってくれとしか言いようのない状況でありますいいっだああああ！！？」

咲良をこれ以上心配させたくなかった晃雅にとって、絶妙のタイミングで通常ならば“余計な言葉”と言うほか無い言葉をはく海斗に便乗し、お馴染みとなっている鉄拳制裁を一つ。

「何故に実況口調なんだ？ 似あわんぞ」

「いいじゃーん、別にさ！ 気分だよ、きぶん！ それと、最近ツッコミの威力が高まってきてる！ もうちょい手加減し「嫌だ」…ひどい?!」

やはりいつもと同じような流れ。優れなかった晃雅の顔色も、ほとんどのいつもと変わらない状態まで戻っていた。それにほっとした咲良も含めて、屈託無く笑い合う。

そのまま明るい雰囲気を保てたのか、笑いが一段落ついたその先に続く言葉も、空気を変えることはなかった。

「さつき、すぐに返事しなかった理由だけだな？　ただ、俺が魔術を使えないことは教えておくべきだと思ったんだ。それで、返事が遅れた」

魔術を使えないと知った途端、離れていった人々は大勢いる。魔術を使えないその事実を知らないままで、友達になることは出来なと思ったのだろう。

「そっか。でも大丈夫だよ。私からも、事前に話しておくね」

「ああ、分かった。ありがとう」

それでも、咲良が親友と呼ぶ人物だ。海斗やいつかと同じように、魔術を使えないことを気にしないでいてくれるかもしれない。そんな希望を、晃雅は持てるようになった。その希望は、晃雅の心に優しい暖かさを運んでくるのであった。

しかし、それでも晃雅の顔色はどこか優れないように見える。それは小さな違いで、咲良でさえも“ちよつと雰囲気が違う”程度にしか捉えられない違いでしかない。それでも、どこか“違う”のだ。それは、何が理由なのか。やっと持つに至った希望を、それでも信じられないのか。それとも、なにか他の理由なのか。現時点では、

まだ誰にも分からない。

晁雅自身ですら、分からないのかもしれない。

俺は、魔術が使えない

「さあて！　とうとうだぞ、とうとう！！　てめえらに魔術行使の授業がやってきた！！」

1-Aのメンバーが全員揃った特別教室に、二十六歳女教師（独身）の大声が響き渡る。普通に話しているにも関わらず、“怒声”と言うに相応しい大声で話す彼女、もちろんA組の担任である関本千種である。

広く、頑強な造りになっているこの特別教室のど真ん中、目の前に生徒たちを立たせ、彼女は紅い髪を振り乱して今日も今日とて荒々しく教鞭を振るう。担任とはいえ、今日は一日、彼女が教える科目が多すぎるようだが、そのような日もあるだろう。

現在、昼休みが終わり、午後の授業の時間。今までの四日間、一度も実際に魔術を使う、所謂“実習”と呼べる授業はなかったのだが、それも今日までである。“まとも”と言える魔術理論の授業が始まった今日、とうとう実際に魔術を使う授業が始まったのである。学院では数学や物理、世界史や現文などの一般科目も必修なのだが、毎週金曜日は一日中魔術に関する授業だけを執り行っている。今日がその金曜日、午前の魔術理論の授業を受け、実習は始まる。

だが、もちろん不安はある。晁雅のことだ。本人は至って真面目な表情で席に着き、全く慌てた様子はないにせよ、彼が魔術を使えないことを知っている咲良や海斗にとっては気が気でない。幸い立つ場所は指定されておらず、彼らは晁雅の両隣に立っている。小声

でならば担任の千種には見つからないと考え、二人を代表するかのようには海斗が小さく話しかける。

「なあ、大丈夫かよ？」

だが、晃雅の答えはあくまで冷静で、魔術を使えないことに焦る様子はまるでない。いや、むしろ常よりも冷静。その上、年中しかめられていたはずの表情が幾分か和らいでいるようにも見える。ただ、どこか冷たい印象を受けるが。

「……………問題ない。大丈夫だ」

「いや、大丈夫って……………。使えないんだろ？」

「そうだよ……………また、みんなにバレちゃったら……………」

咲良も不安そうに追従するが、晃雅の表情は変わらない。いつものしかめられた顔ではなく、和らいだ表情。何かを気負うでもなく、諦めているようにも見えない。

「まあ、バレるだろうな」

かと言って、何か秘策があるわけでもないようだ。些か膨大に過ぎる魔力保有量による魔術耐性で“魔術を無効化する魔術の行使者”と偽れば、一つだけ魔術を使えることには出来る。が、大抵の魔術師が使える“属性魔術”の初歩すら出来ないとなれば、やはり差別の対象だ。晃雅に打てる手はない。

それでも、晃雅の表情は先程から変わる様子がない。……………いや、そうではないのかもしれない。だんだんとその冷たさを増し、他の感情は抜け落ちてようにも見えたのだ。

まるで能面のように。感情を全く映さないその表情は、やはり一貫して冷たかった。

興味がないのだ。諦める、云々の話ではない。興味がない。魔術でしか判断出来ない者に、なにを期待する必要がある？ いや、期待など、出来るのであろうか？ ……否。出来ない。ならば、魔術を使えないことが露見し、差別されようと、晃雅にとって何のダメージもない。よって、興味を示すこと、それ自体が出来ないのだ。さらに言えば、これは“逃げ”なのかもしれない。魔術が使えないことへの逃げ。認められようとするところからの逃げ。差別される事実からの逃げ。…安定した精神を保つための“逃げ”なのだ。

「だって晃雅…！ バレたらまた…！！！」

「そうだぞおい！ どうすんだよ！！！」

晃雅の“逃げ” それは、仕方の無いこと。だが、咲良と海斗にとって納得のいくものではなかったらしい。…それが更なる不幸を呼んだ。

「なーんだ、授業中に！！ くつちゃべってねえでアタシの授業を受けやがれ！！ って、うわ、また晃雅たちかよ！ ……うし、分かった。てめえらちよつと前来い！ 実演してもらっつ！」

それは、実演という形で。晃雅が魔術を使えないその事実を、簡単に、至極あっさりとして、露見させる手助けとなってしまった。

もともと、授業でかなりの知識を見せてきた晃雅だ。生徒たちの期待も高まる。辞退が出来そうもない雰囲気を作られ始めている。

「永崎くんの魔術が見れるの？！」

「見たいっ！ 私も見たいです！！！」

「きつと、綺麗な魔術を顔色一つ変えずにやっっちゃうんだらうなあ」

女子組は、どこか夢見るように瞳を輝かせ、期待の視線を。その類のざわめきは、消えることはない。期待は高まる一方だ。

「あの永崎が実演だつてよ！」

「くやしーけど、かなり理論を理解してたからなあ！」

「すっげえよ、絶対！！」

その期待は、なにも女子だけではない。晃雅はその整った容姿ゆえに女性を惹き付け、それが理由で男子組には多少、近寄り難いものがあつた。どこか違う場所にいるような感覚と、ほとんどの女性の興味をとられてしまう事実のせいで、憎しみに近いような感情を抱くこともあつた。

だが、それも彼の魔術への期待には勝つことはなかつたようだ。授業で、晃雅の知識量の多さは知られているのだ。その期待にも領ける。……魔術の知識を披露してしまったことは、晃雅の大きな失敗と言えるだろう。

「ほーら早くしなつー！ クラス中が期待してるぜ？ 入学テストでも、珍しい魔術使つたつて言うじゃないか。咲良も風と水をあわせた“氷魔術”の使い手だろ？ ……まー、海斗は並らしいけどなあー！」

「並なら別にとりあげなくていいから？！」

クラスを盛り上げるように海斗をいじり、千種は嬉しそうにその焦げ茶の瞳を細めて笑いながら、まるで子供のように手招きをする。三人を助手として呼び、生徒代表で実演させ、そして残りの生徒はそれ見て練習させる。そのような流れを予定しているようだ。千種の中では、最初に一般生徒である海斗にやらせて失敗し、基本的な間違えやすい点を指摘、その上で咲良によって成功させ、成功例を見せる……そして晃雅に発展系を実演させ、大きな手本とする、と



いう流れが出来ていたのだ。

入学テストでは“魔術耐性”を使ったので、晃雅が魔術を使えないという事実を学院側は認識していない。この流れは仕方のないことなのかもしれない。が、かなり残酷な流れとなった。前で実演させなければ、隠し通すことが出来た可能性はゼロでなかったというのに。

「さ、崎ちゃん!!」

「……晃雅あ……!」

動揺は捨てきれない。咲良と、海斗、その二人の不安、焦燥それは、晃雅への心配そのものを全て混ぜ合わせ、さらなる動揺、焦りを呼ぶ。その焦りのせい、軽く滲んでくる汗、不安に彩られた表情。二人は、確実に混乱していた。

それでも晃雅は“逃げ”の姿勢を崩さない。あがこうともせず、認められる努力はしない。ただ悠然と歩きだし、その期待を一身に受け……堂々とその期待を破る。そんな余裕さえ見せる晃雅に、二人はついてゆくしかなかった。

「うし、来たかつ! じゃー、まずは属性魔術からな。海斗っ、ア  
ンタに一番適正のある魔術は?」

そしてとうとう、三人は千種のもとに辿り着いてしまった。

咲良と海斗の悲壮など感じ取ることもなく、随分軽い調子で千種は訊ねてくる。非常に好感の持てる担任だったのだが、今の二人にはその軽さが恨めしい。

「あ、一応“土魔術”が得意だけどな、でもっ……!」

「うるさいうるさい。アンタならミスってもギャグにしかならねえから。安心して爆発させて来いっ!」

海斗の抗議も虚しく、笑いへと変えられてしまう。咲良は先程から声にならない動揺を示しながら、慌てている。それをクラスメイトたちは前に出たことによる緊張のせいだと思い込み、どこかほのぼのとした雰囲気眺めている。全く変わらないのは晁雅だけだ。

「さっ、とりあえずゴーレムを創ってみな！」

「……………お、おう。わぁーった」

もう反論など出来ない。晁雅がアクションを起こさず、抗議をしない以上、彼にはどうしようもないのだ。半ばやけくそで、詠唱を始める。

「へはろお！ マイ・スイート・ゴーレム カトリーナちゃん、カモン（はあと） クリエイト・ゴーレム！」

どこか引き締まった空気をぶち壊しにする詠唱ではあったもの、ただやけくそを起こしたせいでこれほど突拍子もない詠唱になったわけではない。これが彼の常だ。魔術の詠唱は個々人で自由なので、このような詠唱があっても、駄目というわけではないのだ。

その証拠に、以前に咲良を助けた時と同じようなゴーレムが生まれ出された。どうやら女性型のゴーレムのようで、そのグラマラスなシルエツトから、海斗の趣味が窺える。女子組は、若干引き気味だ。

「ほう、中々の出来栄じゃないか！ まあ、精巧さに欠けるし、脆そうだけだな！」

そう言って、千種はバツと手を振り、一言『散れ』と宣言する。そのアクションが終わるか終わらないか、それほどの間に、ゴーレムは崩れ去る。そんな光景をまるで子供のよう、あくどい笑みを

浮かべながら見守る千種は印象的であり、そんな表情が彼女を魅力的にしていた。

「ハイ次っ！」「え、俺あれだけ?!」……あれだけ。「ひどくね?」「ひどくない。さて、次は咲良な」

不安を拭うようにいつも通りにいじられ、ツッコミを果たしたわけだが、やはり海斗には晃雅が心配でならなかった。咲良もそれは同じで、本当に魔術が成功するかも疑問だった。

「あわわっ！ は、はい！ えと、なんの魔術ですか?! ダイヤモンド・ダストですか?!?!?」

かなりの動揺を示し、とても危険な提案をする咲良。いくらこの特別教室が頑丈な造りと言っても、あそこまで強力な魔術を放たれるのは困るだろう。第一、実演で強力な攻撃魔術を使ってみせるのはどうなのか。

今にもその危険な魔術を発動しそうな咲良を、止める人物が一人。

「……咲良。慌てなくていいぞ。俺のことは心配ない」

晃雅だ。動揺もせず、逆に咲良を落ち着かせるため、優しい声で言葉をかける。

「だから、ダイヤモンド・ダストは止めとけ。あれはマズイ。……そうだな、氷のオブジェなんて削ってみたらどうだ?」

「そ、そうだね、うん。ありがと……って、晃雅はどうするの?!」

「大丈夫だよ。今は目の前のことに集中しな」

そう言つて優しく背中を押し、咲良の実演がみなに見えやすいところに移動させた。

魔術を使えない晁雅を支えようと思つていた咲良だが、なんだか逆に元気付けられ、幾分か落ち着いて詠唱を始めた。

「《造形、永劫に溶けぬ氷塊。　　氷熊！》」

氷属性と風属性をあわせた“派生魔術”である氷属性の使い手はある程度希少な存在である。その希少な魔術、氷の造形魔術で、てのひらサイズの小さな氷のクマを作り出した。愛嬌のある姿にデフォルメされ、これもまた咲良らしい。

「くまさんです。えと、一応は溶けないようになってます」

恥ずかしげに告げ、ささつと晁雅の横まで戻つてゆく。顔が真っ赤だ。どうやら、晁雅への心配だけでなく、少なからず緊張でも動揺していたらしい。

「さっきのよりすごいじゃないか。さすが天城寺の側近家系、上原だな。アタシは火の魔術は得意じゃないし、溶かせそうもないね。詠唱も海斗のふざけたヤツとは大違いだ。みんな、咲良を真似しような！　よし、咲良、ご苦労っ！！」

真っ赤になつて頭から湯気でも出ていそうな咲良の肩をポンッと叩き、千種は満足そうに一つ頷いた。

そしてとつとつ。。。

「さあつ、本命の晁雅だ！　どーんな魔術を見せてくれるんだ？　あ、魔術の無効化が出来ることは分かつてるし、それはなしな！」

これで、晁雅に対策する術は完全になくなった。彼が魔術を使えないこと、それはすぐにも露見するだろう。

「なんでもどうぞ」

「おつ、強気だなあ！ なんでも出来るってか？ でも、アンタには基本をやってもらって、基本でも一般人とは違うトコを見せてやっただけいい！ 火の魔術なんてどうだ？」

どの魔術でも行使出来ないがゆえの『なんでもどうぞ』だったのだが、千種はそのままの意味で受け取り、さらに期待を寄せる。晁雅の言いようから、仕方のない事とは言えたが。

「分かりました。昔見た炎の魔術書の詠唱文を、そのまま引用することになります。……ただ、魔力の流れをキチンと見てみてください」  
「だってよ！ 晁雅は魔力の流れが普通とは違うらしい！」

千種はさらなる勘違いを繰り返し、生徒たちの期待を煽る。咲良と海斗の不安はピークに達した。逆に、晁雅からはさらに表情が消え、冷たい印象だけがより深くなった。

「いきます。……《我が奥底に眠りし紅蓮。音もなく、ただ侵食する煌きよ。全ての禍根を断ち、焼き尽くす紅の華よ。大輪のその花弁を、巻き起こす滅びと共に我に見せよ》

彼が詠唱しながら右手を前に出すと、生徒たちの悲鳴が上がる。明らかな攻撃魔術が、自分たちに発射されると思ったのだろう。

「《 咲き誇れ、火炎・紅姫！ 》」

そして、生徒たちがそう考え付いた次の瞬間。クラス中の全員が身をすくめるような膨大な“オド”の放出を感じ取る。晁雅の魔術はここまで凄まじいのか。いや、それよりもこんな小さな教室でここまでの魔術を行使して、自分たちは無事で済むのか。

そんな心配は、結局のところ杞憂でしかない。咲良と海斗の心配  
魔術行使の不可、それこそが現実だ。

反射的に目を閉じた生徒たちが、何も起こらないことを不審に思  
って目を開ける。

そこには、なんの感慨もなく立ち尽くし、全てのことに興味をなく  
したような、冷めた瞳で手を下げる晁雅がいた。

自分自身にあきれ果てたような溜め息を一つ吐き、今までに誰も  
聞いたことがないような底冷えした声で、ひとり言のように呟く。

「俺は、魔術が使えない」

彼の放出した“オド”は、彼だけの法則により、再び彼の中へと  
吸い込まれていった…。

## おいら泣いちゃうぞ

晁雅が魔術を使えない事実は、土・日曜日間に爆発的に広まった。魔術を使えないと判明してしまったのは金曜日なので、噂が伝わるための時間は充分にあったようだ。噂とは得てして広まりやすいもので、今回もそのご多分に漏れることはなかったらしい。

人の噂も七十五日、とは言うが、おそらく今回の噂は根強く残るだろう。その噂が事実であることもそうだが、“魔術”というものが人間に根付いているということも、やはり“魔術を使えないという異分子”を排他する傾向を作りだしてしまうからだ。

そんな噂を囁かれ続ける“魔術を使えない晁雅”は、特に何かを気にするわけでもなく、広まっていく噂に歯止めをかけようとするでもなく、ただ悠然と残りの授業を過ごし、上品に夕食をとり、寮部屋に戻っても慌てる海斗をよそに一人読書に勤しんだ。

そして夜になれば、湯浴みをして夜着に着替え、そのまま就寝し、やはりなにこともなかったかのように次の日の朝を迎える。

土日の間にはバイトに出勤するなど、噂を歯牙にもかけない様子で二日間を過ごし、とうとう月曜日の朝。霽がかかったような眠たげな目をこすり、どこかめんどくさそうにベッドに手をつけて起き上がる。時間は早朝。太陽は、今まさに昇り始めようとしているところだ。基本的に日課となっている早朝トレーニングを済ませるための早起きである。

軽く寝癖のついた後頭部をガシガシと掻き、黒いジャージに着替えて窓から飛び出した。寮は一階にあるとはいえ、彼が飛び出したのはロフト部分の窓である。その実質二階という結構な高さから落ちる衝撃を、膝をたわめることで難なく緩和した晁雅は、そんなと

んでもない行動をとったことが嘘かのように、トレーニングのために走り去っていった。

トレーニングから戻り、汗を流すために頭から水をかぶって湿った髪を乾かす晁雅は、未だ眠りこけている海斗を起こすことなく学院指定のブレザーに着替える。買いだめしていた食パンをほおばり、牛乳を流し込む。朝食は基本的に大食堂で集まって食べるものだが、晁雅はトレーニングに打ち込みすぎ、その規定時間に遅れてしまったらしい。少し物足りない朝食を済ませた。

そしてそのまま時間を確認し、些か慌てた様子で寮部屋から出て行く。どうやら遅刻の可能性を感じているようで、いつもに増して早足だ。だが、遅刻しそうであるにもかかわらず、爆睡中の海斗を起こす気はないらしい。すたすたと一人、教室へ向かっていった。

十分もせずに教室へ辿り着く。急いでおかげか、存外早く着いた。いつもと変わらぬ余裕を持った時間……いや、それ以上に余裕があるかもしれない。

今日は噂が広まり、最初のクラスメイトとの対面である。実際に晁雅が魔術を使えなかったその事実を見た彼らのことだ、どんな反応をするかは分かりきっていた。

「おいおい、無能さんのお通りだぜ！」

「魔術使えないのに授業でむだ知識を披露してた、例のヤツか!!!」  
「かわいいそーに！ 魔術使えないのに“上位魔術学院”なんかに来



ちやつてさー!!」

心無い言葉、それに伴う笑い声。嘲り。海斗のような不良らしい外見を持つ三人の男子生徒が、晁雅を見つけた途端に笑い出したのだ。その反応に、他の生徒たちもざわざわ、くすくすと笑いをもらす。つい昨日までは憧憬の視線を送っていた女子たちでさえも、失望したような冷めた目で晁雅を一瞥し、すぐに目を逸らした。

明らかにいじめとも言えるその光景。すでに来ていた咲良は、豹変してしまったクラスメイトたちの反応に悲しみを抱き、寂しそうに自身の席で俯いている。

だが、そのいじめを受ける側、晁雅は何も気にする雰囲気もなく、暗い雰囲気を纏っているわけでもない。いつも通りに堂々とした態度で胸を張って歩き、自身を代表してバカにした不良の三人を一瞥し、逆にバカにするような冷たい笑いを見せ、席についた。

当然、そのようにバカにされれば簡単に逆上するのが、この年代の素行の悪い少年というモノである。

「てめえ……………ふざけんのかゴラァ!」

先ほども一番に声をあげた、腕輪をジャラジャラとつけた不良が声を張る。

「魔術使えないくせによお……………生意気なんだよ!」

それを受け、どこかキザな雰囲気纏う金髪の不良が怒鳴る。

「……………てめえみたいなヤツが、学院にいただけで腹が立つんだよ……………」

最後に、この不良グループが一番まともそうな外見をしている不良が、ドスの利いた低い声で凄む。まともな外見をしている彼だが、その鋭く光る黒い眼光が“まともさ”を否定する。彼の持つ迫力から考えるに、どうやら彼がリーダーのようだ。

だが、それでも晃雅が慌てることはない。彼からして見れば、この不良グループは“その他大勢”に過ぎないのだ。当然、咲良ほどの才能もないと判断しているし、いつかほどの実力もないことは明確だった。おそらく三人がかりでもいつかに勝てず、それは当然晃雅にも勝てないことを意味していた。

「そんなに俺の近くが嫌か？ なら、俺に近づかない方がいいぞ。ほら、離れたらどうだ？ 嫌なんだろ？」

どこか彼らで遊ぶかのような晃雅の一言。余裕に満ち、海斗をいじる時のようなあくどい笑みでニヤリと笑みをこぼす。先ほどの冷たい表情が嘘のように、子供っぽい笑みであった。

「ちっ！ てめえ……」

「なんだ？ まだ用事か？ 俺を嫌ってるわりには、よく絡んでくるんだな？ いい加減鬱陶しいぞ？」

もはや、晃雅は完全に遊んでいた。いじめを実行する側だったはずの彼らに逆上し、当り散らすという行為ではなく、ただ只管に彼らを使って楽しんでいる。いじめられる側であったはずなのに、見上げた図太さ、図々しさである。

「調子のんなよ！！ 魔術を使えない無能がつ！！」

だが、少々遊びすぎたらしい。その余裕綽々の表情や、しかめら

れていたはずの顔を崩してあくどい笑みを浮かべる晃雅に、いじめる側だった不良たちの怒りが、抑えようのないものとなってしまった。

「無能なくせに粹がつてんじゃねえよ！ 俺らがわざわざ構ってやつてるだけって気付かねえのか?!」

「だいたいよお！ 無能が上原さんと仲が良いのもうぜえんだよ！ どんな手使って誑かしやがった！ 幼馴染ってなんなんだよ！！ 天城寺家の子供でもあるまいし、上原家と幼馴染なんておかしつ……………?!」

不自然なところで止められる言葉。それ以上は、晃雅にとってまじく。自分が“天城寺”であることが露見すること……………それは、絶対に避けるべきことだ。自身の嫌う天城寺と一緒にされたくなどないし、天城寺であるにも関わらず魔術を使えないという劣等感呼び寄せてしまうから。

そんな危惧が、晃雅の今までの“仮面”を剥ぎ取った。……………それはそうだろう。魔術を使えることが当たり前の世界で、自分だけが使えない劣等感。それを、盛大に刺激されているのだ。ああでもして、自身の心すらも偽らなければやってられない。

子供のような笑みを浮かべていた表情かおから表情が抜け落ち、代わりに冷たい能面が顔を出す。怒っている風でもなく、激情に駆られるでもなく、ただただ冷然と立ち上がる。そして、吹き出す大量の“オド”。それが放つ異様な威圧感に、不良たちどころか生徒たちですらも身動き一つとることは出来なかった。

晃雅はそんな身のすくんだような不良たちのうち、リーダーと思われる者の喉元へ向けて手を伸ばしながら口を開き……………。

「やめてっ……!!」

口を開き、おそらく不良を脅すような言葉を発する瞬間のことだった。ガタンつと小さな音と共に立ち上がり、決して小さくない悲痛な声をあげる一人の少女が。 上原 咲良。 晃雅の幼馴染だ。

「ひひっ！ ほらあ、上原さんも俺たちの味かて「違う！」……へっ？」

勘違いした不良たちの間をすり抜け、一直線に晃雅のもと歩み寄る。その悲しそうな表情に、晃雅はなんだかバツの悪い気持ちになり、いかにも困ったと言いたげな苦笑をもらす。そして、どこか毒気の抜かれたような表情で、頬を一搔き。

「咲良……。悪い、調子のつた」

そして謝罪。どうやら、晃雅は咲良が言いたいことに気付いたようで、彼女に先んじて謝りを入れた。あまりにも素直な、そして、あれだけ冷酷に不良たちをあしらっていたとは思えない人間味のある表情。不良三人を含め、クラス全体が呆気に取られていた。

「そつだよ、晃雅……。こんなところで暴力沙汰なんて、シャレにならないんだから……」

咲良の制止の理由は、やはり完全に晃雅のためのものであった。しかし、所謂“おかしさんモード”へ突入するようで、片手を腰に置き、少し前傾姿勢になりながら、その白魚のような人差し指をピントとのばして晃雅の方へむけ、お説教。

だが、それが新たな不幸を生む。

「晃雅はもつと、先のことを考えて行動してっ！！」

「……………ごめん」

「確かに、さっきの人たちは最っ低で最っ悪だったけど！　そんな人たちのせいで、晁雅が退学なんてしたらどうするの！！」

感情的になり過ぎていたのは案外、咲良の方だったのかもしれない。晁雅へのお説教のつもりが、不良への罵倒になっていた。

もうHRの時間も間近に迫る中、不良の怒りは再び、しかし急速にMAXまで駆け上る。今までクラスで一番人気だったはずの彼女は、この時から、完全に不良から目の敵にされることとなる。

「……んだとおい！　てめえも出来損ないに味方すんのかよ！！」

「調子乗んのもいい加減にしろよ！！」

「派生魔術を持つてめえだってなあ、俺らにかかりやあ怖かねえんだよっ！！」

まさに一触即発。血管が千切れてもおおかしくないほどに怒り狂い、今にも咲良に掴みかからんとしている不良三人。相手は女性であるにも関わらず、希少な“派生魔術”の一種である氷属性の魔術を使う咲良に、三人がかりで相手取ろうとしている。なんとも呆れた不良である。そんな不良から、咲良をかばうように前へ出る晁雅は、威圧感の籠った金の瞳で彼らを見据え、激情に駆られる彼らに対し、一歩も引く様子はない。

場の空気は、やはり緊迫していた。……一つの例外を除けば、だが。

「あわわっ！　ご、ごめんなさいっ！　そんなつもりじゃなかったんです！　えと、あの、だから、す、すみませんっ！！　あうう……」

一人、危機感の足りない慌て様を見せる少女。咲良だ。先ほどまでの毅然とした態度や、“おかーさんモード”のおせっかいさほど

こへやら。目をグルグルと回し、無意味に手をバタバタさせる。実に緊張感のない光景である。

それでも。彼女の声が途切れると、場の空気は再び底冷えしたような沈黙に包まれる。何をしたいやら手持ち無沙汰な様子の彼女を尻目に、睨みを利かす不良たち。負けじと鋭い視線を返す晁雅の威圧。そして……。

「くそっ！ むかつくんだよっ！！ 《風、風、風、風、風っ！！ 吹き荒れる！ 切り刻め！ 血を求めて刃となれ！！》」

ついに緊張の糸はプツンと音を立てて千切れた。

オドの動く気配。不良たちのリーダーがあげる右腕から、微かな風が巻き起こる。彼の右拳に封じ込められた風が渦巻き、それに伴って起こる風圧だ。やがてそれは解き放たれ、無数の刃を生むのだから。

「《 カッター・ウィンド「ちょい待ちっ！！」……………んああ???!」

まさに魔術が解き放たれ、詠唱の通りに風の刃が晁雅たちに向けて突き進もうとしたその瞬間。どこか気の抜けたような、しかし底抜けに明るい制止の音が響き渡る。

染めた赤髪。耳できらりと光る派手なピアス。“親友”の登場である。先ほどまで晁雅が相対していた不良よりも“不良”だが、その心は遥かに温かい。

「こーんなどこで魔術ぶっ放そうとしてんじゃねえよボケエ！ そんなことで崎ちゃんとか良ちゃんが傷ついたら、おいら泣いちゃうぞ……………おえ、自分で言っただけで気持ち悪くなってきた。今のナシ

な！！ つーか崎ちゃん！！ なんで起こしてくれなかったんだよ！ 遅刻しかけただろっ！ 朝メシも食えなかったじゃないか、どうしてくれる！！ なあ、答える！！ いや、それよりも今日の崎ちゃんは咲良ちゃんとの距離感が近すぎるぞ！！ まーた公然とイチヤらぶですか??！ いい加減みんなの邪魔だぞ！！ ちゃんと自覚しなさいっだっあああ??!!」

いつものように勝手マシンガントークを繰り広げ、自分勝手に言いたい放題で話題をすり替え、最後にはちょうどHRの時間になって教室に入室した千種による鉄拳制裁をくらう。なんというか、完全にその場の空気を“ぶっ壊し”とでも言うべき状況である。

「邪魔なのはお前だ！ 扉の前で大声出してんじゃないよっ！！ ほら、HR始まる！ 席つけ！ 他のヤツらも席つけよ！ 晃雅と咲良も、その他大勢も！ さっさと席つけえ！！」

やはり荒々しく、怒鳴る。晃雅が魔術を使えないと知っても、彼女の態度は変わらない。その変わらない態度が、晃雅にはありがたかった。そして、“親友”にも心の中で感謝の言葉を。彼の中では海斗がわざといつも通りにマシンガントークを繰り広げ、千種の餌食になることで場の空気を換えてくれたという認識になっている。そして、それはあながち間違いではない。

しかし……。

「千種ちゃん……叩く力、前よりもだいぶ強いよ……。俺の努力は一体……」

海斗が虚しくいじられ役に徹するという事実も、やはり変わらな  
いことのようにであった。そんな海斗に、晃雅は思う。

海斗。どんまい…。

報われない海斗よ、貴方にかけてる言葉はやはり一つしかないだろ  
う。どんまい、と。



もつとつとでもなれえ…

朝の騒ぎ立てに起因してのことなのか、HRや一時限目が終わっても、不良三人を代表するクラスメイトが晃雅たち突つかかるところとはなかった。代わりに、咲良と海斗を除くクラスの全員が晃雅をいないように扱い、咲良と海斗には冷たい視線が向けられたが、これくらいならばかわいいものだ。晃雅たちにとっては、概ね平和といえた。

しかし。なにか嫌な予感がする。背中がぞわつとするような、底知れぬ気配。もやもやしたモノが、このクラス目掛けて走ってくるような。そんな寒気すらもする。そして、それを晃雅、咲良、海斗の全員が感じている。その言い知れぬ不安に、三人仲良く薄ら寒い表情で顔を見合わせた。

その直後。バタバタと響く足音。おそらく、三人が感じた悪寒の正体だろう。走りながら言葉として意味をなさない声を絞り出しているようで、酷い騒音だ。さらに言えば、何度も何度も苦しげに途切れるその声から、相当に息をきらしていることを予測出来た。

バンっ！

スライド式の扉が勢いよく開かれる。

「永崎っ！　なんでバレてるんだ?!」

開け放たれた扉から覗く、栗色の髪。学院指定の、黒いブレザーを身に纏っていることから、その人物が少年であることが分かる。少年にしては高い声、線の細い体つきだが、その顔つきは正しく少

年であった。

そして、この少年が晃雅たちの悪寒の正体である。その名を、杉山 いつかという。自称・晃雅の好敵手な、一応晃雅たちの仲間とも言える人物だ。

「しかも朝から不良に絡まれたっていうじゃないか！　なんでやり返さない?!　君なら楽勝だろ!!」

そんな“仲間”であるいつかが怒鳴る。せつかく暴力沙汰になりそうなところを回避した晃雅たちであったが、いつかによる朝の騒動を蒸し返すような行為に、嘆息したくなる衝動に駆られることになる。いや、晃雅は実際に呆れたような溜め息をついているし、咲良はなんとも言えない表情で困ったようにいつかと晃雅の間で視線を泳がせている。海斗などは、いかにも『あちゃー』とでも言いたげな表情で額に手をつき、

「空気をぶっ壊した時の俺の苦労を返せ…」

と、悲しげに呟いている。今朝に引き続き、どんまい、である。そんな海斗に心内で同情しながら、晃雅は仕方なくいつかへ言葉を返す。それも、『余計なことを…』という感情を存分に込めた、不機嫌な声音で。

「殴つて退学なんて御免だからな。と、言うよりなんでここに来た?　とりあえず今は帰れ。昼に話聞いてやるから、な?　だからとりあえず帰れ」

言葉を紡ぎながらつかつかと栗色の少年へ向けて歩み寄り、有無を言わさずくるりと背を向けさせる。

「うわ、えっ、ちよっ、なに?!」

「いいからっ! これ以上やれば海斗がいじけるぞ? だから帰れっ! いや、俺の精神衛生のために帰れっ!」

慌てるいつかの背を押し、追い立てるように言葉を撃いでゆく。いつかの抗議など、全く耳に入っていないかのような態度だ。

「でも…!」

「でももすともないっ! 昼まで待て、いいな?」

気迫。そんなモノすら感じられる、笑みを浮かべる晃雅。

「ほら、杉山くん。帰って、ね?」

それと共に浮かべられる、咲良の天使の微笑み。エンジェリック・スマイル …… 晃雅の恐怖の笑みも相まって、いつかには彼女の微笑みが悪魔の笑みにすり見えた。どこか既視感のようなものを覚えるが、気のせいだろう。

「……よ、よし、分かった。帰ることとするよ。あは、あははは…」

乾いた笑みを浮かべ、へたれた声を出しながら去っていった。どうやら、一度ついた“へたれキャラ”というものは、中々抜けることではないらしい。

それは、二日前の土曜日のこと。

『え？ 咲良が前言ったた……晃雅、だっけ？ その人つてもしかして、今魔術が使えないって噂になってる人のことなの？！』

どこか驚いたように、そして何か苦い過去でも思い出したかのようになり、しかめられた表情で問い詰めようとする薄桃の少女。少々低身長気味の彼女は、名を高峰 ゆあという。つい先日、咲良の親友となった薄桃の髪とスミレ色の瞳を有する可憐な少女である。

『そっだよ？ 言っただけ？』

険しい表情のゆあに対し、咲良の表情は至って普通である。あえて言うならば、柔らかい表情、とでも言うべきか。彼女に良く似合う優しい雰囲気ではあるが、先ほどのゆあとは対極の表情であった。

『言っただけ？ じゃなくて！ 魔術を使えないなんて……』

…黙っておけないっ！ 無理矢理にでも使えるようにしてやる！！』

『え、あの、えええ？！ ど、どうということっ！！』

『魔術を使えなくて、そのままにいるなんて信じられない！ 努力させるっ！！』

既に晃雅は努力し、結果が伴うことはなかったのだが、そんなことを彼女が知る由もない。そして、晃雅が“魔術を使わずに魔術師に勝つ”ということを目標に、新たな努力を積んでいることだつて、知るはずもないのだった。

しかし。『晃雅を更正させて、魔術を使えるようにする！』と息巻いているゆあに対し、咲良はなにも言えなかった。その澄んだスミレ色の瞳は、純粹に晃雅のことを思つての行動だと告げているのだから。言動からも、晃雅に敵意があるわけでもなく、むしろ受け入れているという事実を汲み取ることが出来る。その受け入れ方が、非常に間違っているだけなのだ。

まあ、敵意がないならいい……かな？

咲良はそう断定したのだった。

そして今日。時間は現在まで戻り、月曜日の正午である。

なんとかかいつかを追い返し、午前の残りの授業を比較的平穩に過ごした咲良は、晁雅たちへ先に寮部屋に向かうように告げ、ある場所へ向かう。金曜日に計画していた、あることを実行するためだ。

「えーと、あ、ここだ。………コホンっ！ ゆ、ゆあ〜！ 迎えにきたよ〜」

1年C組の教室、そこにいるゆあが目当てである。そして、現在は昼休み。………そこから推測可能だろうが、ゆあを寮部屋に招き、昼食を共にしようという計画を実行するということである。人見知りに影響したのか少しもりながら、室内にいるであろうゆあに声をかける。

咲良の声に反応し、ゆあはどこかやる気に満ちた表情で咲良の方へ手を振り、嬉しそうに駆け寄ってきた。二日前の会話内容からも明らかだが、“魔術を使えない晁雅”を矯正し、魔術を使えるように努力させようという気概に満ち溢れているのだ。

「咲良！ いよいよだっ！ 私に任せて！ 絶対に永崎くんが魔術を使えるようにしてみせるからっ！！」

言葉からも明らか。それも、かなり自信満々の様子。まるで、過去にも“魔術を使えない者”を所謂“魔術師”に変えた経験がある

かのような自信の持ち様であった。

だが、それでも晃雅の魔術方面での努力が報われる可能性はゼロに等しい。放出された“オド”が再び体内に戻るといふ症状に、前例はないのだからそれも仕方のないことなのだ。それでも努力を積んだ経験があるので、やはり“晃雅は魔術を使えない”というのが、晃雅自身の見解、あるいは天城寺家の見解でもある。

それゆえに、咲良は困ってしまう。要らぬ自信を見せ付ける親友に、どう反応すればいいのか分からないのだろう。なんとか、その試みが失敗する事実を告げようと努めるのだが、発せられる言葉は意味を成さない。

「えと、あの、うん、でもね…？」

「さっ、行こうっ！！」

それでも。なんとか伝えようとする。晃雅が魔術を行使可能にするという、その努力ですらも無駄であると。そもそも、晃雅は魔術以外のことに全力で取り組み、魔術師を凌駕するために必死である。だが、咲良の意味を成さない必死の抵抗が報われることは叶わず。やる気充分、自信満々な彼女に引つ張られていくような形で、晃雅の寮部屋を目指すことになってしまったのだった。

半ば引き摺られながら、咲良は諦めのような心の声を叫ぶ。

うう、もうどうとでもなれえ…。

それはもちろん、心の中で。

ゆあと、晃雅たちの邂逅。それはどうなってしまうのだろうか？  
咲良は先のことを考えて憂鬱になるのだった。

「あ、でも意外と大丈夫かもっ！」

「なにが？」

「うっん、なんでもない！ 早くいこっ！」

……しかし、彼女は極端にポジティブシンキングでもあるのだった。その彼女の読みが、当たるか外れるか、それは全く以って定かではないのだが。

## 魔術が絶対

「あゝ ああゝ、ひいゝまあゝだあゝ」

「そうだな。でも黙れ」

「いいゝやあゝだあゝ。崎ちゃんなんか暇潰し考え「嫌だ」……そんなこと言わずにさあゝ」

とある寮部屋にて、だらだらと『ひまゝ』を連呼する少年と、それを軽くあしらって読書を進める少年がいた。海斗と晃雅である。それぞれの机の前にある椅子に座ってくつろぎ、昼休みを過ごしている。

ゆあを迎えに行った咲良と別れ、二人はいち早く寮部屋まで帰ってきていたのだが、することがない。実は二人、料理は全く出来ないので、料理の出来る咲良や、親が料理人で腕もあるいつかを待っているのだが、どちらも現れることはなく、ひたすら待つしかないのだ。

咲良は迎えにいつているので仕方がないが、あれほど晃雅を問いただしたがっていたいつかが遅いとはどういう見か。二人はそんな不満で顔をしかめながら、だらだらしたり読書したりしているのだが…。

「やっぱり暇ああああ!!!」

だらだらしているだけの海斗は、相手にしてくれない晃雅へも不満が募ったようだ。『暇ああ』と叫びながら椅子から立ち上がり、晃雅にちょっかいをかけるように肩を揺さぶる。



「なあ、暇だつてえ！」  
「知らん」

だが、晃雅は相手にせず、揺らされる動きに合わせて右手に持つ本の位置を変え、読み続けている。

それがさらに不満を募らせ、海斗のちよつかいも段々とエスカレートしてゆく。

「ひつまっ！ ひまひまひまひまああー！！」  
「うるさい」

さすがにイラツときたのか、こめかみをぴくぴくさせ、不機嫌そうに眉間に刻まれた縦皺がさらに深いものになる。これが漫画ならば、所謂怒りマークとでも言うべきものが無数に浮かんでいることだろう。

そしてついに。

「ひつまああああああー！！」  
「うるさいっつってんだろっが吉井バカイトおおおおー！！」

肩を揺さぶる海斗の腕を掴み、容赦なく引き剥がす。そのまま両手で彼の右腕を固定し、立ち上がる。晃雅が何をしだすのか、決して少なくない恐怖に震える海斗を一瞥し、彼は何の躊躇いもなく海斗を扉の方へ勢いよく……………投げた。

そう、投げたのだ。放物線を描く、などといった生易しい表現は適さないほどに素晴らしいスピードで、海斗は真っ直ぐ扉へ向けて飛んでゆく。

「んぎゃああああー！！ お助けええええい！！！！」

さらに、悪いことは重なるものである。海斗が扉に衝突するその瞬間、扉は開かれた。

「ごめんっ！ 遅れたよ！ 僕のクラス、四時限目の先生がかなり授業を延長してね………って、なんで飛んでんのおおお！！？」

ゴツチーン！

そんな音が響き渡る。遅れてきたであろう杉山 いつかと、晃雅によって飛ばされた吉井 海斗の衝突の音は、激しく残酷でありながらも、存外に可愛い響きであった。

海斗は頭頂部、いつかは額に、まるで焼印を押し付けられたかのような焼けつく、それでいて鈍い痛みを感じ、地に伏せる。

「うごおおお、いだいいい………！」

「血っ！ これ、絶対血が出てるよおお………」

そんな二人の方へ晃雅はつかつかと歩み寄り、にんまりと………そう、にんまりと笑う。

「大丈夫だ。血は出てない。………それにしても偶然だな杉山。ちょうど吉井に制裁を加えたところでお前が顔を出すとは思わなかったぞ？ 実に運が悪いヤツだ」

「なんで“偶然”のところに力を入れてるんだ？！ わざとだろ！ 僕がすぐそこまで来てたことに気付いてたたるおお！！！」

「ああ、悪い。気付かなかったよ」

そう言いながらも、晃雅の表情は実に楽しげだ。………これは、明らかに気付いていた。そんな表情であった。

「なんでわざわざ僕に当てるんだ！？ 犠牲は吉井だけで充分だろ

っ！！」

いつかの抗議が部屋中に響く。些か、海斗がかわいそうになる言葉であったが。だいたい、自身も今朝、不良を煽って再び晃雅と対立させてしまう可能性のある言葉を吐いているので、先ほどの痛みは妥当だ。

やはり、海斗は報われない。それでも、報われずとも悲痛なツツコミを入れてしまうのが海斗の哀しいサガである。

「俺を犠牲にするのもどうかと思うけど、そこんどこどうよ???!」

「いや、お前が犠牲なのは当たり前だ」

「はあ!? なぜに被害者の杉山まで八もってるわけ?! おかし  
いっ、ぜったいにおかしいですぜ兄貴い!!」

もはや通例と化した海斗いじりだが、それでも中々に有意義な(?)暇つぶしとなったらしい。いつの間にもやら、騒ぎ立てる海斗を驚いた表情で見ているギャラリーが二人ほど増えていた。

「……あれ、吉井くん。また騒いでるの?」

「ああ、おもしろくてうるさいって噂の! ふむふむ、正しく不良だね。でも、いじられキャラなんだ? おもしろい!」

咲良とゆあである。一人は呆れたように、もう一人は興味津々で、蹲るすまように地に伏せる海斗を覗き込む。………ゆあなどは、頬をツンツンと突ついたり髪の毛を軽く引っ張ったりして遊んでいる。海斗も抗議するのだが、ゆあはまるで気にせず悪戯を続けている。そんな二人に軽く苦笑ながら、晃雅は幼馴染に声をかける。

「おう、来たか。咲良、さっそくだが杉山と昼食を用意してくれないか? 腹が減った」

「どうやら、彼の空腹もかなり危ういところまでできていたらしい。」

「うん、わかった！ 杉山くん、いこつ？」

そんな晃雅の空腹状況を察してか、ニコツと微笑んでいつかに声をかける。

「……………だが、いつかが返事をするのではない。どこかポーっとしたような表情で、未だに海斗を突ついて遊んでいるゆあを見つめている。心なしか、顔が赤いように見える。……………明らかに、アレである。そう、一目惚れだ。」

「杉山くん？」

「へ？ うわああ？！」

「どうしたの？ そう言いたげな表情で覗き込む咲良に気付き、やつこのことではいつかは正気に戻る。」

「変なの。……………さっきの、聞こえてたかな？ 晃雅が、お昼ご飯作ってほしいんだって。行こつ？」

「あ、ああ、分かった」

顔は赤く、慌てたままで料理などして大丈夫なのだろうか。依頼した晃雅も、いじられながらも見ていた海斗も、少なくない不安に駆られるのだった。

ただ、いつかの顔を赤くさせた張本人であろうゆあだけは、気付かず未だ海斗をいじっていたが。晃雅が魔術を使えるようにすると息巻いていた彼女だが、この時点ではそれすらも忘れていたようだった。

料理が並んでゆく。今日は洋食のようで、ハヤシライスにサラダとスープがついてくる昼食であった。いつかの状態は芳しくないように見えたが、料理が酷いものになることはなかったようだ。

それでも、再びゆあを見たいつかが固まっている事實は、見てみぬふりをするのが一番だろう。それに、この状況ならば、いつかが晃雅に魔術が使えないことについて聞いただすことはない。あまり詮索されたくない晃雅からすれば、好都合だ。

「さて！ 本題だよ！」

一方、いつかに熱い（？）視線を送られている側のゆあは、そんな視線には全く気付かず、晃雅の問題について話し始める。

「私、永崎くんが魔術を使えないって聞いたから、手伝いたいんだ。魔術を使えないままにしとくなんてナンセンスだよ！ 一緒に頑張ってみない？ 絶対に使えるようにしてみせるからっ！」

自信満々の表情で手を差し出し、フワリと柔らかく微笑む。当然、その手が握り返され、共に魔術の修練を積むことになる。そして疑われない笑みであった。……その笑みにやられ、再び呆然としているいつかに関しては、しばらく放っておく方向で話を進めることとする。

手を差し出された晃雅であったが、彼が動き出すことはない。中々動き出さない晃雅に、ゆあの自信に満ちた表情が歪み始める。

「だ、ダメかな？ やっぱり、初対面の私じゃ信じられない？」

不安そうに訊ねるも、晁雅はどこか困ったような表情で頬をぱりぱりと掻くだけで言葉を発することは無い。どうやら、彼自身もどう答えようか困っているようだ。咲良も困っていたのだし、同じ反応である。

それでも、やっとのことで意見をまとめ、努力は積んできたがダメだったこと、魔術以外にも魔術師を凌駕する術はあるはずだという意見を持っていることを話そうとする。魔術を当たり前に使えないで、説得は些か難しいかもしれないが。

「俺は、魔術は使えないんだ。それはしょうがない。その代わりに、違う努力をしている。これで納得してくれないか？ 魔術の訓練を積む気は、俺にないんだ」

「なんで?! まだやれることはあるはずだよ!!」

案の定、ゆあが納得することはなく、食い下がる。中々強情であった。これは、かなり説得が難しいな。晁雅は困ったようにそう嘆息する。

そんな光景に見かねたのか、海斗がゆあを宥めるように口を挟む。

「まーまー、崎ちゃんだってさ、今まで頑張ってきてんだよ。その証拠に、空間魔術師の杉山にだって勝つたらしいしな。崎ちゃんは魔術を使うことは諦めた代わりに、魔術以外で魔術師を越えようとしてんのさ。な、だから分かってくれ」

本人よりも、第三者の方が心の内を語りやすいということもあるのかもしれない。海斗は、晁雅が思っているであろうことをほぼ完璧に察していたのだ。これが晁雅自身であれば、どこか恥じらいのようなものを感じてここまで分かりやすく説明できていなかったはずだ。案外、海斗は咲良ほどではないにせよ、晁雅の理解者であっ

た。

「で、でもっ……！！ 昔、魔術使えない子を魔術師にしたことだつてあるしっ！！」

それでもゆあは食い下がる。魔術を使えないままにいることに、恐怖でも抱いているかのように必死であった。

「ゆ、ゆあ？ あのね、晁雅も悪気があって断ってるわけじゃないんだよ？ 晁雅が魔術を使えないのは、本当にしょうがないんだ。昔、充分いろいろとやってたもん……」

「だけど魔術を使えないままなんてダメだよ！ 魔術が絶対なんだっ……！」

叫ぶ。悲痛な声で。咲良の言葉さえも耳に入らないように、ゆあは両腕を抱き、小さく震えながら叫んでいた。つい先ほどまで見とれていたいつかでさえも、その光景に身をすくめるほどの叫びだ。

「魔術は！ 使えないとみんなにいじめられる！ 親にも見捨てられるんだ！ だから努力した！ 使えないままなんて嫌だったから！ それで私は使えるようになったんだよ？ だから、諦めちゃダメなのっ……！」

魔術を使えない過去。それを彼女は持っていた。“魔術を使えない者”を“魔術師”に変えたのではなく、“魔術を使えない者”から“魔術師”に成長できたのが彼女だったのだ。

とはいえ、そんな前例は他にもあったが、晁雅のようなケースとは似ても似つかないものばかり。彼女が指導したとしても、晁雅が“魔術師”になることなど不可能だろう。

「君と俺は違う。確かに、いじめの対象にはなるだろうし、親からは迫害されるだろう。俺は、姓まで取られた。ほぼ勘当状態だな。十三歳の頃から金だけ渡されて一人暮らしだ。それでも、俺は魔術を使えなくなつて生きてきている。それに、俺には咲良イバルがいる。好敵手を名乗る杉山がいる。ついでに吉井もな」

「俺はついでか?!」

「ついでだ」

的確にツツコミを入れてくる海斗を、苦笑しながら軽くあしらう。実際は親友と、晃雅自身も思っているので、“ついで”発言は単なる照れ隠しだろう。

ここで、話がずれてきたことに気付き、軽く咳払いして先を続ける。

「……まあ、とにかく。魔術が使えなくても、困ることなんてほとんどないんだ。だから、残念だが君に師事することはない。ごめんな?」

晃雅は少しバツが悪そうに、ゆあの様子を窺う。が、しかし…。

「だけど……魔術を使えないままなんて、認められないよ…!辛いんだよ! もう、お父さんにもお母さんにも私がいけないように扱われるのは嫌なんだ! それと同じ境遇の人がいるのも嫌なんだ! なんて努力しないの!? 魔術を使えるように努力してよ…!」

晃雅には、何も答えられない。悲痛な叫びを上げる彼女が、過去に虐げられていたことがよく分かるから。それと同じ仕打ちを受けてきている自分には、彼女の苦しみがよく分かるから。何も答えられなかった。



やがて。ゆあは背を向け、立ち上がる。

「……………ごめん、言い過ぎた。努力はしたんだよね。……………だけど、気持ちの整理がつかないんだ。しばらく、一人にして……………」

そう言って、彼女は去って行ってしまふのだった。

## 魔術が絶対（後書き）

最初のふざけたテンションから一転、唐突なシリアスという不思議。

……明らかな力量不足っ

## 今度のゴールデンウィーク

四月も下旬、その中でも後半になり、段々と肌寒さも抜けてきた。それどころか、長袖の上着を脱ぎ、半袖で過ごすのに相應しい気温を観測する時分だ。あの壮絶な入学式も良い思い出と化し、新入生たちも学院に慣れてきた頃である。

晃雅が魔術を使えないと知られ、二週間ほどが経ったが、皆の対応は変わらない。大抵は彼をいないものとして扱い、彼と共にいる者はどこかおかしなものを見るような目を向けられることもしばしばあった。ごくたまにはあるが、クラスの不良三人のように突っかかってくる者もいたが、それも少数だ、晃雅たちコミュニティー内だけで限定すれば、概ね平和と言えた。

しかし。例外もある。……高峰 ゆあに関する問題だ。彼女が初めて昼食に招かれてからしばらくは経ったが、どうも晃雅だけでなく海斗やいつかともぎくしゃくした関係が続いているらしく、学院の広い廊下で彼女とすれ違うたび、場の空気が張り詰めたものになるようだ。いや、むしろ気にしているのは彼女の方で、晃雅たちが近づくとギクツとして逃げていく、と言った方が適切かもしれない。唯一、咲良のみは今まで通りに接することが出来ていたようだが、時たまこの関係の悪さについて相談することもあったとか。そこで、咲良は考えた。

今度のゴールデンウィーク、みんなでどこかにでかけよう！――

その提案に、ゆあは頬を染めて逡巡しながらも、受け入れた。こう決まれば、あとは話が早かった。晁雅たちにしても、ゆあとの関係がぎくしゃくしたままでは心苦しい。あちら側から和解を申し出ているのならば、断る手はなかったのだ。

晁雅は生活のため、アルバイトに精を出しているの、あいにくゴールデンウィーク最終日しか予定を合わせることは叶わなかったが、これでとうとう関係性を少しでも改善することが出来そうだと。

幸い、明日からゴールデンウィーク、つまり休みである。五月も間近だ。関係の改善は、もうすぐそこだろう。

晁雅にとってバイトで忙しいゴールデンウィークはつつがなく消化され、いつの間にやら予定日の前日となっていた。

時というものは、なにか待ち遠しい予定が先にある場合、遅く流れるように感じるものである。そのわりに、いざその予定の日になれば、体感の時間の流れは急速に速まり、あっという間に終わってしまう。そんな、短い時間での楽しみだ。当然のように、細かく予定をたて、最善のルートで遊びまわりたい、と言い始める者が現れた。

……………女の子大好き、海斗である。

やっこのことで前日を迎えたゴールデンウィークの予定。つまり明日が最終日というわけだが、憂鬱な雰囲気は微塵もない。むしろ大興奮である。今までに、女性と出かける機会はなかったのだろう

か？ そう考えてしまつほどに、海斗の騒ぎようは異常であつた。

「いやつはぁー ついに！ ついにっ！！ 予定日がやってきましたよー！！ どうせ付き合えることなんて絶対ないけど、女の子と遊べるだけで癒しだぞ、おい！！ どーするよ崎ちゃん！ 明日、どこ行くんだよー！ 決めちゃいましょうよ、さあさあー！！」  
「……………うるさい」

当然、海斗のそんな異常なハイテンションについていけないはずもなく、晃雅は興味なさげに顔をしかめ、本に視線を落している。

「やだあ、ツレナイんだからあ 崎ちゃんもちゃんと考えなさい  
だつぁああ？！」

「キモイ言葉を使うな」

「ひ、ひどい…崎ちゃんがいぢめるよあ」

とはいえ、海斗を完全に無視せず、ツッコミを入れるのを忘れないのは晃雅の抱く友情のおかげか。あるいはただ単に、彼のSな部分サディスティックが積極的に海斗をいじることを欲しているのか。どちらとも分らないが、痛すぎる晃雅のツッコミにもさして気にした風もなくふざけた様子の海斗を見れば、二人の友情が概ね良好であることを察することが出来た。

だが、今回は海斗にも不満なこともあるらしい。晃雅の盛り上がり盛り上がりが少なすぎるのだ。彼のような状態が普通なのだとは言えたが、海斗にはどうにも物足りない。計画をたてるその過程でさえも、もっと盛り上がる方が楽しい、と考えているのだ。

「なあなあ崎ちゃん！ もっと盛り上がるうぜー！ 明日、ゆあち  
ちゃんと和解しなきゃだろ？ そのためには楽しませてやらねえとっ  
！！」

「とは言っても、こちらで勝手に予定を決めるのはどうなんだ？  
と、いうよりも、なんでもっと前もって計画しなかった？ 俺がバ  
イトに行ってる間、いくらでも計画できただろうが」

……………沈黙。

あー、確かにそうすればよかったかも。そんな気持ちも透けて見  
える間抜けな表情で明後日の方を向く海斗。その彼は、かなり慌て  
た様子で言葉を返す。

「そ、それはアレだよ。あーっと、うん、その、あ、そう！ 晁雅  
がないのに勝手に決めんのは悪いと思ってさ！ ホントだからな  
？！ マジ、ガチ！ 本当なんだからその拳下ろしてお願いまだ死  
にたくないお願いしますお願いしますっ！！！」

最終的には、冗談で拳を構える晁雅に対し、土下座で許しを請う  
姿で落ち着いた。

そしてタイミング悪く、ちょうど海斗が許しを懇願しながら土下  
座し始めている時に、寮部屋の扉は開かれた。そこから覗く栗色の  
髪。嬉しそうに頬を上気させ、髪と同色の瞳をキラキラと輝かせて  
いる少年がいた。言わずと知れた、杉山 いつかである。

通常ならば土下座に徹する海斗を疑問に思うだろうが、何故か寝  
袋を持ってこの場に立ついつかはなんの疑問も持たず、もちろんツ  
ッコミもせず、ただひたすら嬉しそうに告げた。

「明日の予定を立てようじゃないかっ！！」

……………どうやら、ここにも海斗と同じような人物がいたようだ。

「と、いうわけで、相性がいいはずの相部屋のヤツとケンカしてね？ どうせ明日の予定もあるわけだし、泊めてもらおうかと思ったんだ。まだ、予定はほとんど決まってるじゃないんだろ？ 一緒に決めようっ！！」

やたら予定を立てたがるいつか。おそらくこちらは、一目惚れしたであろうゆあどと過ごせる時間を極力良いものにしようと思いつてのことなのだろうが、やはりそのテンションは異常であった。唯一、平常心を保っている晃雅からすれば、『やってられない』とでも言いたくなるようなテンションだ。

ちなみに、いつかがルームメイトとケンカした要因は、冷蔵庫に入っていたジュースを飲み干したのは誰か、という至極どうでもいい内容だったとか。果てしなく不必要な情報ではあるが、一応これを補足とする。

それはさておき  
閑話休題。

翌日の予定を立てておいて、損はないのは事実である。話し合うべきなのだろう。晃雅もそれを察してか、自身のノートパソコンを起動する。

「調べものなら、インターネットが最適だろう。この付近で五人全員が楽しめるようなところでも探そうか」

「おお！ ノリ気じゃねえと思ったけど、意外と考えるじゃねえかつ！！」

「ナイスだ！ これで高峰さんとも和解できるぞ！！」

予定を立てると言って、結局はなにも思いつかないであろう人物

がこの二人である。　ああ、予定を立てるのはおそらく全部俺なんだろうな。晃雅は、そう嘆息せざるを得なかった。

「で、まず行く場所だが。五人で行くんだ、それなりに広く、はぐれないような場所がいい」

「確かにつ！」

「そうだなっ！」

晃雅の言葉に、肯定の意だけを示す海斗といつかのいじられ&へたれペア。明らかに晃雅任せである。最初からこのつもりで、晃雅が時間を取れる今を待っていて、予定を決めていなかったのではないか、と疑ってしまうほどに、二人は晃雅任せなのであった。

それを察しながらも、結局はしっかりと計画を立ててしまつのが晃雅であつたりもする。

「そして思いついたんだが、カラオケなんてどうだろう？　大人数用の部屋なら五人でも充分広いうえに、密閉空間の中で一体感も演出できる。今から調べるが、カラオケだったらこの近辺にもたくさんあるだろう。ただ一つ、相手が音痴だと軽く気まずいが、まあそれでも盛り上がることは可能だろう。拒否されれば、シヨッピングモールでもなんでも、適当なところに行けばいいしな」

ノートパソコンで検索を急ぎながら言葉をつなげ、カラオケでのメリットとデメリットを告げる晃雅。海斗といつかもかなり肯定的な表情で、晃雅が調べている検索画面を覗き込んでいる。

「……………よし。ここなんてどうだ？　天風市の中心にあるんだが、幸い近くにはシヨッピングモールもある。まあ、二十分足らずで辿りつけるだろう。料金は、ドリンクバー付きフリータイムで2000円だ。一人400円で午前十一時から最大で八時間歌えるぞ。難



点として、カラオケボックスの昼食は少し高いが、そこは特に気にすることでもないだろう。……………で、どうだ？」

一番乗り気ではなかった晃雅だが、その計画の早さは中々のものだった。カラオケを拒否された場合の次善策として、シヨッピングモールが近いということも、かなり好条件だろう。

当然、最初から晃雅に任せるつもりだったであろう海斗といつかに不満はない。彼らは示し合わすようにサムズアップし、非常に嬉しそくにハモる。

「「ばつちぐー!!」「」

「……………随分適当だな」

晃雅の言う通り、本当に適当な返しであったが、反論はないようなので良しとする。

それでも軽く溜め息を吐きたくなる衝動を抑え切れなかったのか、二人にも分かるようにあからさまに嘆息し、ついでに自身のケータイを取り出す。

「じゃ、咲良にカラオケでいいか連絡とってみる」

そう言ってアドレス帳から咲良の電話番号を呼び出し、電話をかける。少しの呼び出し音のち、少し嬉しそうな咲良の声が聞こえてきた。

『はい。晃雅？ 珍しいね、電話かけてくれるなんて!』

「そうか？ まあ、たまにはな。で、明日なんだが……………」

ここで、先ほどの計画を告げる。そして、カラオケが嫌ならシヨッピングモールでもいいと補足し、説明を終えた。

時に相槌を打ちながら聞いていた咲良だが、晃雅の計画を聞いていくと、さらに機嫌がよくなってくる。どうやら、あたりだったようだ。

『あのね、実は私たちも明日はカラオケでどうかって考えてたんだ！ 偶然っ！ しかもね、私たちが考えてたところよりも安いの！ 近いし！ さすが晃雅っ！ もちろんOKだよ、いっぱい歌おうね』  
「そうだな。うん、よかったよ。………じゃあ、十時に学院の入り口に集合でいいか？」

ここまで決まれば完璧である。………前日まで計画が決まらないのもどうかと思うのだが。

『うん！ 分かった。明日、楽しみにしてるね！ おやすみ』  
「ああ、俺も楽しみだよ。…おやすみな」

そう言って、電話を切る。バイト三昧で中々幼馴染と喋る機会がなかったせいも、久しぶりの会話であったので、心なしか彼の表情は緩んでいるように見えた。その口調からも随分嬉しそうであったことが分かったので、当然にして海斗が動き出す。懲りないものだ。

「ふっふっーん やっぱ、嫁と話すのは楽しいかいだああ？！」

鉄拳制裁。

先ほどから、ゆあに会える嬉しさで頬を上気させて喜んでいたいつかも、この時ばかりは呆れた表情で海斗を見ていた。それくらい見慣れた光景で、それくらい呆れるべき光景なのだ。

……………本当に、懲りないヤツであった。



嫌わないうでいてくれるか？

午前九時三十分。予定集合時刻の三十分前である。そんな集まるにはだいぶ早い時間に、集合場所である学院の入り口に佇む少女が一人。落ち着きなく辺りを見渡し、そわそわした様子で俯く。よく観察すれば女性の平均からしてもかなり低い背丈であることを見てとれる彼女は、その可憐でほっそりとした腕の先にある、白魚のように美しい指先同士を当ててもじもじして、何かを待っているようだった。

薄桃の髪と、澄んだスミレ色の瞳が特徴のこの少女、名を高峰ゆあという。

彼女が、このような早すぎる時間帯に集合場所にいることには、理由がある。先日、晁雅たちといざこざを起こした彼女だが、それなりに反省しているのだ。それを咲良に相談したところ、次のように言われた。

集合前の時間に謝ればいいんだよっ！！

彼女が言うには、晁雅は集合時間にかかなりの余裕を持って出てくるらしい。彼の性格を考えれば、海斗やいつかを連れずに一人で来るだろう。それならば、予定時刻より早く集合しておけば、晁雅と一対一で話し合う時間も出来るはずだ。咲良はそう考え、かなり早めにゆあを集合場所に向かわせたのだ。そういう経緯で彼女は予定時刻三十分前、集合場所でもじもじしているのであった。

ちなみに。これは補足だが、ゆあを送り出した咲良、部屋で待っていると思ったら大間違いである。しっかりと学院の門の影に隠れ、様子を窺っている。彼女もやはり、親友が幼馴染と和解出来るか気

になるのだろう。

まあ、それは置いておくとして。

あれから十五分ほど待った彼女たちだが、不意に近づいてくる足音に気がついた。その、おそらく晁雅であろう足音はやたらと緩慢に聞こえ、二人の緊張を大いに煽る。

そして…。

「随分、来るのが早いんだな。まだ十五分前だぞ？」

とうとう晁雅は、ゆあの前に立った。話しかけられた彼女からすれば、十五分前に来ている晁雅も充分過ぎるほど来るのが早いのだが、今、それは関係ないだろう。

謝らなければならぬのだ。緊張の瞬間である。

「あ、あの…！」

しかし、言葉を発しようとしても、中々うまくいかない。自分が悪いのは分かっているのだが、相手も充分悪いのではないか。そもそも、魔術を使えないと諦めてしまうのは、やはり我慢出来ないっ！……そのような感情ばかりが渦巻き、声が出ないのだ。

どうやら晁雅もかなり気まずいようで、かなり困ったような表情で、明後日の方を向いている。

そんな状況の二人を見て、ハラハラしていた咲良も、いい加減動きがないことに不安を感じ始めていた。見ていられないっ。自分が出れば、少しは円滑に話を進められるかもしれないのに。そう思い、咲良は彼らの前に出ることを決意し……決意したその瞬間、二人の間に動きがあった。

「あー、悪かった」「えと、ごめんっ」

同時の謝罪。動こうとしていた咲良は、咄嗟に動きを止める。

「あの、なんで私も謝られてるのかな？」

「いや、俺も説明をもう少ししておけば、あんな事態にはならないだろうと思っただけ。悪かった」

そう言って、頭を下げる。どうやら彼は、うまく説明出来なかったことを悔いているようだ。確かにそのせいで晃雅の努力や苦悩を理解出来なかったのも、その謝罪は彼からすれば当然のものであった。

しかし、ゆあにとっては違う。先ほどは『努力をしない晃雅が悪い』という思考に陥っていたが、彼女の冷静な部分は確実に自分が悪いと告げていた。それゆえか、なんだかバツの悪い気持ちになり、もう一つ、謝罪の言葉がもれる。

「そっか、うん、ホントごめん。勝手に逆上して、慌てて、努力してるはずの永崎くんを責めたのはこっちなのに。………律儀なんだね」

「そっでもないさ」

晃雅は簡単に返し、『そんなことよりも』と言葉を続ける。彼にとって、この時点での最重要事項である。

「一つ聞きたいんだが。………もう俺を、嫌わなくていいくれるか？」

へ？ そんな間抜けな声が、ゆあの小さな口からもれ出る。それだけ意表を突かれたのだろう。彼女としては、廊下ですれ違っても逃げるのは嫌っていたからではなく、あれだけ啖呵を切った挙句、結局は『気持ちの整理がつかない』と言い訳をつけて部屋を去って

しまったことで、彼らと話すことを気まずく感じるようになってしまったからなのだ。

もちろん、そこに晃雅への嫌悪感など微塵もない。それなのに、晃雅はなにかを心配するようにゆあへ『嫌わなくてくれるか』と訊ねる。ゆあにとってはかなりの違和感を覚える対象となった。

ただ、好感を持つところもあつた。この彼は、どんなに嫌われても咲良や海斗、いつかがいればそれでいい、というようなことを言い、事実その通りに見える行動をしてきていた。全く気にしていない、と言つた風に、突っかかられればむしろ楽しむかのようにあしらつているところを、一度だけ見かけたこともある。

その時は、彼にとっては誰にどう思われようと関係ないのだ、とそんなことを考えていた。が、違う。彼にはちゃんと人間らしい部分があつて、人に嫌われることを充分過ぎるほどに恐れている。ただ、その様子を健気にひたすら隠しているだけで。そう思うと、途端に目の前の伶俐な美貌の少年が可愛いものに見えてきたのだ。

その見え方の違いに、どこか可笑しさを感じながらも、彼女はしっかりと答える。

「当たり前だよ。元から、私は永崎くんを嫌つてなんかない。……だから、その、お友達になつてくれないかな？ 咲良の幼馴染つてヤツが、いい人だつても分かつたことだし、仲良くしたいんだ」

そう言つて微笑む。小柄で『可愛らしい』という言葉が似合う彼女であつたが、その微笑みからは“大人の女性の魅力”というものが滲み出ているように見えた。

その微笑みに晃雅は安心し、幾分か柔らかい表情で手を差し出す。

「喜んで。俺なんかでよかつたら、な」

「うん。よろしくね。ただ、魔術を使わせることは諦めないからね。私、どんなに難しいことでも挑戦はし続けるべきだと思うんだ。その努力だって、きつと無駄にはならないよ」

差し出された手を握り、握手して今度は不敵に微笑む。先ほどまでなら、この言葉はさらに関係をぎくしゃくさせただろうが、今はどこか温かい雰囲気に入れ、晃雅も『頼むな、高峰先生』と苦笑しながら返していた。完全に和解したようだ。これに伴い、海斗といつかも、ゆあと普通に接することが出来るようになるだろう。

今日の最大イベントであるカラオケも、十二分に楽しむことが出来るそうだ。

「ああ、そうだ。咲良、もう隠れてなくてもいいぞ？」

だが、集合時刻二分前である現在、門の影に隠れる幼馴染に声をかけることも忘れない。

「ふええ?! バレてたの?!」

驚いたように門の影から飛び出す彼女は、そのあまりの勢いに転倒しかけ、ぎりぎりですみ笑っている晃雅に受け止められる。

「当たり前だ。そのせいでちょっと、話しづらかったんだからな」

「う、ごめん……」

晃雅の腕の中、少しばかり見上げて謝罪。

「まあでも、心強くもあつたよ。お前がいると思っただら、ちゃんと謝らなきゃって、そう思えた」



未だ腕に抱いたまま、感謝の言葉を告げる。その状態になんの疑問も抱かず、応えようとする咲良だが、ここで邪魔が入ることとなる。

「うわーお　こんなところでいちやいちゃしだすとはっ！！　もうここまでくれば末期だな！　救いようがねえな！！　全く、どこの新婚さんですかア！！！」

この場にいる最後の一人であったはずのゆあとは、似ても似つかない粗雑な声音。荒い言葉遣い。しかし、どこか人懐っこさを匂わせるその声は、誰がどう聞いても海斗の声であった。集合時刻ジャスト、ぴったりの時間に現れた海斗と、ゆあを見てボウツとして頬を上気させているいつかが現れたのだ。

「転びそうだったから支えただけだ。と、どうか俺が高峰と話している時からずっとこっちを窺ってただろうが。こうなった経緯は分かるだろ？」

「うおーう、バレてました？！　いやあ、杉山とこっち来たらさあ、崎ちゃんゆあちゃんが二人で話してんじゃん？　それで隠れて見守ってたわけだけどー、結局は崎ちゃんは咲良ちゃん一筋ってことが分かってよかった、さすが夫婦だんいったあああっああ？！！」

お馴染み展開。ここは、その説明だけで事足りた。

「ただの幼馴染だ。………で、それはともかく早く行くぞ。今日の目的は、カラオケなんだからな」

紆余曲折あったが、今日の目的はやはりカラオケである。このまま学院の前ならだら話し続けるなど、論外だ。

ちなみに、登場時から一言も発していないいつかは、その間ずっ

と顔を赤くしていたとか。意外と、ピュア純粹な惚れ方と一途さを見せる  
いつかであった。

ふっ…今日も調子がいいな

五人は地下鉄を利用し、天風市の中心地に来ていた。国内最大と言える品揃えを誇るショッピングモールを始めとして、たくさんの飲食店が充実し、子供から大人まで楽しめる施設で溢れている。もちろん、全国にチェーン店を拡大しているカラオケ店も存在する。五人の目指す所は、そこである。

「なあ、よく考えたらさあ……俺、めっちゃ音痴だったわ」

そのカラオケ店を目指す途中。あと五分もすれば辿り着けるといふ頃。そこでの、突然の報告であった。

「そうか、じゃあ歌うな。耳が腐る」

「はっ、そんなこと言うんなら歌いまくってやるし！　いくらでも耳腐らせてやるよオ！！」

晁雅の辛辣な冗談もなんのその。海斗はそんなことは気にしない。そして、ああは言ったが、晁雅だって音痴を気にすることなどないのだ。それを分かっているからこそ、海斗も冗談で返せるのだろう。晁雅は否定するだろうが、やはり彼らは絶妙なバランスと相性の良さを持った親友同士であった。

だからか、海斗のふざけた返答に、晁雅もしっかり悪ノリする。

「上等だ。俺の耳を腐らせてみせる。壊死させて耳を削ぎ落とさななくてはならなくなったらお前の勝ち、それ以外は俺の勝ちな。負けの方は一週間分の宿題を肩代わりだ」

「いやいやいやいや、その条件だと確実に俺が負けるからね!？  
何その圧倒的不利な条件!! みんなもそう思うよな? なっ!？」

確実に自分に味方してくれる。そう考えての言動であった。

しかし。海斗は読み違えていた。自分がいかに“いじられキャラ”として定着しているのか。それを理解していなかったのだ。よって当然、海斗が得られるのは同意などではなく…。

「吉井くん、頑張つてね」

「私も応援しとくよ。……勝ち目ナシだけど」

「高峰さんの言う通りだが、僕も応援しておこう。あ、君が負けたらついでに僕の宿題も頼む」

海斗に返ってくる言葉は当然、彼の意見への同意などではなかった。むしろ、確実に負ける賭けの代償が、さらに惨いものになってしまうという、どうにも可哀想な結果となった。

と、そうこうしている間に、目当てのカラオケに辿り着いた。どうやら、海斗がこの賭けを無効にすることは叶わない結果となりそうだ。

「いやああ、宿題三人分も出来ない!!」

カラオケ店の目の前、人通りもそれなりに多いこの場所で、海斗の悲痛な叫び声が響き渡った。

「さあ、歌おう。誰から歌う？」

フリータイムで申し込み、ついにカラオケの一部屋に通された一行。これから長く歌い続けることになる。フリータイムの場合は最大で八時間も時間をとることが出来るので、時間はたっぷりある、が『最初に歌う栄誉は誰にも譲らん』とでも言うように、昇雅の問いに応える者がいた。

「はいはいっ！！　ここは俺に任せな」

海斗だ。やはり、見た目どおりに目立ちたがりなのだろう。……自分から音痴であると告げただけでありなのに、中々に根性のある目立ちたがりである。

しかし…。

「却下」

「あ、じゃあ私が歌ってもいいかな」

「分かった。じゃあ高峰から右周りに順番で。……海斗は最後だな。どんまい」

このような流れによって、海斗が一番に歌うことを許されることはなかった。まあ、最初くらいは音痴以外の歌で盛り上がっておきたい、という気持ちにも頷けるが、些か海斗は可哀想であった。……それも、こんなことは今に始まったことでないから余計に憐れだ。

とはいえ。当の本人はそんなこと気にしていないようだ。

「おっ！　ゆあちゃんの美声が聞けちゃうわけね！！　もう俺あ大歓迎よオ！！！」

切り替えが早いのは、海斗の大きな長所の一つであった。

海斗のお調子者の言い回しに軽く笑いながら、ゆあは特に時間もかけずに選曲を終える。流れ始める前奏は、朝から歌うには中々ハードに聞こえたが、大丈夫なのだろうか？

そんな危惧は、杞憂に終わった。朝であるにも関わらず、よく通る声。高い音域から低い音域まで、ほとんど間違えた風もなく歌うソプラノ。時に小鳥が囀るように、時に優しいな声音で、しかし時に激しく、それでも綺麗な声で歌う。

……この場にいる全ての者の正直な感想として、ゆあはとても歌が上手かった。

「た、高峰さん……素敵過ぎる……」

いつかなどは、このように呆然して眩き、歌うゆあを熱心に見つめている。これが、彼の恋心をさらに高まらせる結果となることは、言うまでもないだろう。

その次の咲良の番では、ちょっととした事件が起きた。ゆあほどではないにせよ、綺麗な歌声で、可愛らしく歌っていたのだが、マイクを落としてしまったのだ。あぁっという動揺の声をもらし……ここからはもう、ぐだぐだであった。

「あわわっ！ えと、えと、あああ！ メロディがあ……」

しかし、海斗の言を借りるのであれば『可愛いからよし』であった。それについては、晁雅も同じ意見だったのかもしれない。なぜ

なら、いつもしかめられている表情を幾分か和らげ、それどころかほのぼのとした笑みを浮かべていたのだから。

と、そんな事件を越えて、次はいつかである。彼曰く、

「僕は、歌には自信がある」

とのこと。ゆあに向けて言った言葉のようで、なんだか誇らしげだ。彼女との共通点が少しでも出来たことを喜んでいるのだろうか。ゆあにしても『へえ、じゃあ今度一緒に歌おうか』と返し、いつかの歌に軽く期待している風であった。

しかし、彼女のそんな淡い期待は、すぐさま裏切られることとなる。

『 μ 』

この世のものとは思えない地獄の歌声。低音が利き過ぎているかと思えば、次の瞬間には男性としては考えられないほどに高い裏声に変わる。選ばれた曲は全て流してやっと三分半と、それなりに短い曲であったが、その三分半は地獄の瞬間であった。いつも柔らかかで優しいな笑みを崩さない咲良をして、顔をしかめて耳を塞いでいるほどであった。

そのうえ、彼は非常に高く掠れた声で最後の音を発音し終えると、満足そうな素晴らしい笑みで一つ頷き、信じられない一言を言い放つ。

「ふっ… 今日も調子がいいな」

キリッ！ そんな擬音が似合う表情で、口の端を吊り上げるような、しかし爽やかな笑みを浮かべる。これで本当に歌が上手ければ、大層輝いて見えたのだろう。しかし、彼の歌声は酷い。随分滑稽で、その仕草だけで笑いを誘うには充分であった。

とはいえ、かなり気持ちよく歌っていたであろう彼の前で大爆笑をするのはさすがに気が引け、一同は何も出来ない状況に追いやられる。やはり、紛うことなき地獄であった。

そんな地獄の沙汰にも、一条の光が。

「さ、さあ、次は俺が歌うかな」

次に歌うことになっていた晁雅の一声である。その彼特有の低くてよく通る声に、凍り付いていた空気が一気に常温状態を取り戻す。幼馴染である咲良などは、この声に多大な安心感を覚えたほどだった。

「まあ、俺は高峰ほど上手くないし、杉山ほど自信は持てないが、精一杯歌わせてもらうことにするよ」

そう言っつて、元の雰囲気に戻ったことに安心したような表情をしかめっ面の中に浮かべながら、選曲を終える。そして曲が始まり歌い始めるのだが……。

どうにも、微妙だった。違和感がたつぷりあるにも関わらず、流れる音楽とはあっているようにも聞こえなくもない。いつかのような聞いていられない歌声ではないものの、激しい違和感を覚える。一生懸命歌っているようではあるのだが、どうにも苦い表情であった。

そして一番を歌い終え、間奏中にマイク越しに頼みごとを一つ。



『咲良。悪い、頼むな』

「はぁい。やっぱり、一緒に歌わないとだね」

咲良も心得たように頷き、マイクを取る。

少し長めの間奏が終わり、二人は息をぴったり合わせてマイクを口元へ持っていく、二番へ。咲良が加わったところで、どうせ晃雅の歌声は違和感にまみれているのだろくな、と、誰しもがそう思った。

……………が、しかし。

紡ぎ出されるのは、とても精錬された歌声。可愛らしい声でメロディを歌う咲良と、腹部に響く低音を発する晃雅の絶妙なハーモニー。咲良の歌うメロディとは違う音色の、しかし彼女の歌声をさらに引き立てる響き。そう、それは“ハモリ”だった。

二人のハーモニーは心地よく続き、咲良もマイクを落とすことなく、最後まで歌いきるのだった。

「俺は昔から、なぜか“ハモリ”の音しかうまく認識できなくてな。メロディそのままを歌おうとはしているんだが、いつの間にかハモってる。……まあ、一回目は挑戦したけど、今度から知ってる曲の時だけハモリで参加することにする。ハモリは、任せろ」

歌い終わった晃雅は、そう言って一巡目で最後の順番である海斗にマイクを手渡す。

「次、頼むぞ、自称・音痴くん」

「おう！任せなっ」

二カつと笑って受け取り、選んだ曲が流れ始める。今流行りの口ツクバンドの曲で、その中でもかなりメジャーな、CMでも何度も聴いたことがあるう無難で盛り上がりやすいチヨイスであった。自称・音痴の海斗は、それでも何の特徴もなく歌いきり…。

「音痴ではないが……別に上手くもないな」

「えーと、下手じゃないのはいいことだと思うよっ」

「僕としては、下手だけだな」（それはこの少年にだけは言われたくない言葉ではあるのだが）

「でも、まあ……うん、普通で無難って感じだね」

結局、ゆあの一言で意見は纏まった。

そのままみんなで盛り上がり、ゴールデンウィーク最終日は充実し、かけがえのない思い出として、体感スピードとしてはとてつもない早さで駆け抜けるように終わった。ゆあと晁雅たちの間にあったわだかまりも消え、翌日からもいい関係を築いていくことが出来そうである。

ちなみに。

海斗が“耳を腐らせること”が出来なかった代償の宿題一週間分肩代わりという処罰は、晁雅の『ただの冗談だ。だいたい、お前にやらせたら出来が悪くなる』という鶴の（悪魔の）一声で免除されることとなったそうだ。

・今日のカラオケで学んだこと。

ゆあ > 咲良 > 晃雅（ハモリ限定） > （一般人） 海斗  
> 晃雅（通常）

歌の上手さは、この順で並んでいるらしい。補足だが、いつかがこの順に入らない理由は、『あれは歌とは呼べない。むしろそう呼べるヤツ、出てこい。あれなら、本当に耳を腐らせることだって可能かもしれないぞ』……だ、そうだ。

どんだけエ……

思い出を作ったゴールデンウィークも、今は昔。時は過ぎ去り駆け抜け、地獄の中間テストも越えて、すでに梅雨の時期に入っている。この時期特有のじめじめとした嫌な空気と、どこか溜め息を誘うように長く続く雨。時にしとしと、時にザーザーと降り注ぐ雨は、人の心までも濡らし、憂鬱な気分させるようであった。

そんなことなく暗い雰囲気にも包まれた学院で、特にどんよりしている者が一人。いつもはニシシッと人懐っこい笑みを浮かべているはずのその少年は、声量の大きすぎるマシンガントークの代わりに低く咳くような独り言を、何かの呪詛のように紡ぎ続け、時たまひひつと不気味な笑い声をあげる。ただ、赤く染めた髪の下から覗く、派手なピアスだけが、常の彼の心情を表すようにキラリと輝いていた。

この見ているだけで人を憂鬱な気分させる少年、名を吉井 海斗という。そして少し前の中間テストで、赤点という不名誉を学院最多で被った猛者である。その驚異の赤点率、なんと十一教科中八教科、およそ73%を記録する。つまり、七割以上が赤点というわけだ。普通だったら有り得ない。進級が危ういどころの話では済まないだろう。

では、海斗がこの驚異の赤点率のせいで落ち込み、見る人を憂鬱にさせているのか、と問われれば、実はそうではない。むしろ、赤点を取った当初は『崎ちゃん見て見て！俺の赤点コレクションだっ！』などと騒ぎ立て、いつにも増して騒々しいほどであった。それならば何故、彼がこれほどまでに落ち込み、沈みきっているか

と言つと…。

「赤点取つたら課題出るとか、どんだけエ……」

そう、赤点を取つたせいで課された、課題の膨大さ……それに海斗はやられていたのだ。しかし、それも仕方がない。八教科それぞれから、消化するのに四時間はかかるような課題を課されているのだから。その消化にかかる予想所要時間、総勢三十二時間。一日中課題消化に勤しんだとしても、未だ八時間分の課題が残るという残酷さと凶悪さ……これは、いつも元気に満ち溢れている海斗を墮とすには十二分の働きを見せた。

とはいえ。この状況になつたのは完全に彼の自業自得。可哀想な状況にあるとはいえ、晁雅の対応が決して海斗にとって都合の良いものとは言えないのは、当然の結果であつた。

「先に言っておくが、俺は手伝わんぞ」

「うえええ?! そりゃ酷いぜ崎ちゃん!! 親友じゃないか、手伝ってくれよお…!」

手伝わない。そう言つた晁雅に、海斗は悲壮さを全力で演出し、土下座してまで頼み込むが、そんなものが晁雅に効くはずもなく。現実がそこまで甘くないことを再確認させられる結果となる。

「……そうか、じゃあ俺は“親友”にバカのままできてほしくないからな。本当は手伝つてやりたいんだが、自力で問題を解けるようにするために、泣く泣く手伝うのを諦めてやろう。ホント、残念でならないよ」

わざとらしく首を振り、悲しげに瞳を揺らす。本当に手伝えないことを残念に思っているかと錯覚するような迫真の演技ではあつた

が、わずかに吊り上る口元が彼の本心を明確に示していた。軽く嗜虐趣味でも持ち合わせているのだろうか。……………もしかすると、“軽く”ではないのかもしれないが。

しかし、そんな彼でも、海斗に告げづらいこともあった。現在は大食堂に集められての夕食が終わり、自由時間として海斗の課題を消化するにはもってこいの時間だ。そのはずだった。しかし、今朝のHRで千種教師は次のように告げたのだ。

今日の夕食後。みなを集めて重大な発表をするそうさ！

午後九時、大食堂へ集合しろっ！！

だ、そうさ。発表ならば、いつも全員を大食堂に集める夕食時にすればいいような気がするが、これは完全に学院長の意向で決められた事項で、自分が重大発表とやらをしたくないから、という理由で後に集合させることとなったらしい。と、言うのも、学院長である東條 齊（しひ）は、夕食時は生徒たちと共に大食堂で過ごすのだが、その後は自宅に戻るのだ。何故なら、彼が御尊（おんみこと）四家の一角、東條家の当主であるためだ。昼間は天城寺家から派遣された優秀な人員で回しているのだが、東條家の当主である彼がいないと進まない仕事も存在する。それを消化するために、彼は自宅に戻るのだ。自宅に戻るということはつまり、“重大発表”を他人に任せることが出来るようになるということである。

そんな完全に大人の都合……………というよりも学院長の適当で愚図な性格のせいで、夕食後に生徒たちは集められることになったのだそうさ。

晃雅は今、この重大発表がある事実を、眠っていたせいで聞き逃した海斗に告げようとしている。海斗自身は、この時間に少しでも

課題を消化しようと言っていたので、晃雅からすれば告げづらいところの上ない。

それでも、告げなければならぬことである。……重大発表というからには、本当に重大なモノであるはずなのだ。召集を蹴って休ませるわけにはいかない。

決心する。やっと課題に取り組もうとノートを開いて机に向かう海斗に、告げよう。

「吉井……」

「ん？ 課題手伝ってくれんの？」

振り返り、調子のいい笑みにも関わらず、どこかやつれたような印象を受ける表情で訊ねる海斗に、晃雅は彼に同情するような表情をして口を開いた。

「いや、そうじゃない。かなり言いづらいんだが……今日は、今から大食堂に召集されてる」

「へえ。じゃ、俺は課題の続きを……って、ええええええ！！？」

海斗の悲壮な叫び声が、二人のいる寮部屋に悲しく響き渡った。

可哀想ではあるが、彼が課題を消化できるのはもう少しあとになるだろう。それに伴って、彼のテンションはさらに下がっていくのだろう。そのような予測が簡単につくほど、悲しみを帯びた叫びであった。

しかし、この召集が意外な方向で彼のテンションを再び引き上げることとなることを、今はまだ誰も知らない。

午後八時。豪華な装飾の施された大食堂に、学院の生徒が一堂に会した。学院側が言うには、今日ここで、とある重大発表があるらしい。

とはいえ。一年生はどこか緊張の面持ちで発表を待っている者が多いのだが、二年生以上の生徒はそうでもないように見える。とすると、もしかすると毎年恒例の行事なのかもしれない。……そんな毎年恒例行事の発表のためだけに、課題に取り組む時間を削られ塞ぎこむように落ち込む海斗には、やはり哀れとしか言いようがなかった。

それは晃雅も思ったことのように、壇上に代表の教師が立つのを待ちながら、横目で隣に座る海斗の方を一瞥し、嘆息する。いつもつるさいヤツがここまで黙ると、逆に不安になってくるから不思議だ。

「なあ、海斗。元気出しな。どうせ、三十分もかからないさ」  
「……………だよな。うん、いくら課題が暴力的でも、落ち込むなんてらしくねえか！」

やっと、彼は本当の意味で笑った。これで、少しは喧騒も戻ってきそうである。平穏で静かな生活を望み、騒々しい海斗をいつも静めていた晃雅だが、海斗が再びつるさくなりそうなのこの瞬間に、それでも大層安心した。

やはり、海斗はこうでなくては。

そして、さらに海斗のテンションを引き上げる要因が生まれる。それは、意外にも……………いや、当然にして、なのかもしれないが、この召集の目的である“重大発表”によるものであった。



やつとのことで壇上にかかる学院長秘書の谷口 真樹。今日も、艶やかな黒髪と対照的な白磁の肌が映える。キラリと煌くメガネも印象的だ。

『さて、では私から学院長代理として、重大な発表をさせていただきます。とはいえ、二年生以上の生徒は既に知っているかとは思いますが。……………ええ、とうとうあの時期がやってきたのです』

あの時期？ 一年生のほとんどはそう首を傾げる。が、残りの生徒……………つまり二年生以上の生徒は、まるで幼子おみなしこのように瞳を期待で染め上げ、心なしか興奮した様子で次の言葉を待っている。

『そう。 全校生徒出場制魔術戦闘大会の始まりです！』

うおおおおおおおおおおおおおつっ！！！ そんな歓声が、広い大食堂に響き渡る。

全校生徒出場制魔術戦闘大会。大抵の生徒からは“全魔戦”と呼ばれて親しまれ、学院としても、外部には知られないとはいえ名物行事となっている。

だが、全校生徒がトーナメント制で戦い合うこの大会が盛り上がる理由は、まだ戦ったことのない相手と戦えるから、などという戦バトル闘狂的なモノでは決してない。

この大会が盛り上がる理由。それは……………。

『もちろん、今までと同じように全てを勝ち抜いた生徒にはある特典があります。それは……………』

この先一年分の課題を、全て免除することです！！

当然のように、赤点による課題も全て免除である。

もう一度大きな歓声が起こる。………今度は、晃雅の隣の席から最も大きな叫び声とも呼べる歓声が響き渡ったとかさそうでないとか。そんな捕捉をするのは、やはり野暮なのであろう。

## インストラクターだ！（前書き）

注：最初の説明文が長いです。

言いたいことは、コロシアムの強度が高いこと。

晁雅が全魔戦に乗り気ではないこと。

それは、魔術なしで勝ちあがれば御尊四家に目をつけられると思っただから。

と、言いたいのほとんどそれだけです。

読み飛ばしてくださっても構いません。

まあ、読みにくいとはいえ、読んでいただければ嬉しいんですが…。

## インストラクターだ！

全生徒出場制魔術戦闘大会。通称、全魔戦と呼ばれるこの大会は、広い学院の敷地の片隅に備え付けられているコロシウムで執り行われる。普段は魔術の実習にも使われるこのコロシウムの強度は非常に高く、魔術を孕んだ貴重な鉱石をふんだんに使ったうえ、その鉱石の原子同士を結合をより強固なものにすることにより、現在では魔術学的に不可能とされている伝説級の魔術でも破壊出来ないと言われている。その真偽は定かではないが、歴代の天城寺家系の者が力試しに全力で放った魔術でさえも破壊不可だったことで、その驚異的なまでの耐久力を示している。

そんなコロシウムで行われる全魔戦だが、実はすでに一週間前に迫っている。あの重大発表が言い渡された昨日まで、全魔戦が行われる事実さえ知らなかった一年生には些か不利に見えるかもしれないが、魔術は才能に依る所も大きい。同じく一年生である生徒の中でも、御尊四家おんみことのよんけの一角、それも学院長の子息である東條 仁は、有力な優勝候補として知られていることから、魔術は才能に左右される事実を如実に表している。

補足だが、他の優勝候補は、御尊四家の者で現在在学中の七年生・西藤 明菜、二年生・南原 有流人あるし、三年生・北川 雪音ゆきねなどが名を連ねているとか。つまり、御尊四家という血筋は、それだけで期待され、それに応える実力を備えているのだ。

そして、天城寺家の者は、それらすら圧倒的に凌駕する才能に溢れ、通常では認められていない飛び級を悉く成功させている規格外の家系である。

しかし、悲しい例外も存在する。現在の天城寺家三男、永崎 晃雅である。魔術の才能がない彼は、優秀でも認められることはない。魔術師を越えるため、全魔戦でたくさんの方と戦いたいとも思っていないのだが、魔術を使えない彼が全魔戦で目立つことは好ましくないのだ。最悪、御尊四家に目をつけられ、今まで以上に居心地の悪い学院生活を送らなければならなくなってしまう。

そのせいだろうか。晃雅は、課題をなくすために全力で修行を始めている海斗と共に学院の広場の一つ、その中でも人通りが最も少ないところまできているのだが、全くやる気を見せない。他にもついてきた咲良やゆあの方にも目もくれず、一人木陰で読書に勤しんでいる。いつか以外の全てのメンバーが全員集合しているが、晃雅には関係ないのだ。

「なあ崎ちゃんよオ、一緒に修行しようぜ？ 優勝すりゃ、課題免除だぞ！？ 夢のようだ！！」

「そうだよ。課題は関係ないにしても、今回こそ魔術を使えるようにするチャンスじゃん。ちょっと、頑張ってみようよ」

という海斗やゆあへの申し出も片手を振って断り、本から目を離すことはなかった。晃雅としては、いつかも『一緒に修行しよう』という誘いには乗らなかつたのだから、自分はここに来ているだけマシなのではないか、と思っっているのだが、彼らにはそんなことは関係ないようだ。

いるのなら一緒に修行しよう、それが彼らの言い分だった。……もちろん、渋る晃雅をここまで引っ張ってきたのも、彼らであったのだが。

当然だが、いくら晃雅であろうとも、御尊四家に目を付けられるのは好ましくない。よって、この全魔戦で本気を出すつもりは毛頭ないし、彼らの修行に付き合う気もない。

それでも。実は晃雅には大きな弱点があった。それは、強みにもなりうるもののだが、今回は弱みとして働くらしい。

「晃雅っ　　いつしよに修行、しよっ？」

一見、常に泰然として余裕に構えているはずの晃雅にとって、最大の弱点にして最大の支え、上原　咲良である。

いつの間にか晃雅の座り込む木陰に移動した彼女は、いつも通りにポニーテイルにしているブラウンの髪を揺らし、柔らかな微笑みを浮かべて、晃雅を覗き込む。何が嬉しいのか、喜びに繋がる感情全てを顔に浮かべたかのような、喜色満面の笑みであった。真白の頬にほんのりと差す朱が、どうにも魅力的だ。

立ち上がる。誰が、とは言うまでもないだろう。幼馴染のその声にやられたのか、めんどくさそうなかめっ面こそ崩さないものの、文句も言わずに立ち上がった彼は、口を開いて一言呟く。

「……………しよっがない。三十分だけ加わろう」

この時、彼は想像もしていなかった。全魔戦が始まるまでの一週間、ずっと彼らと一緒に修行することになる、などは。

だが、それも当然かもしれない。修行を誘う側には、対晃雅で最高の威力を誇る最終兵器リーサルウェポンを持っているのだから。

その最終兵器は、晃雅が修行に参加することを純粹に喜び、軽く跳ねて喜びを表現する。

「ホント？　やった！！　一緒に頑張ろうねっ」

「三十分だけな」

晃雅は確認するようにそう言い、海斗とゆあが待つ広場へ咲良と共に歩いていくのだった。

「遅いつ！ 違うだろ、そこはゴーレムで……」

「ひえっ?! 崎ちゃんが怖いっ?!」

「なにを言ってるんだ!! 修行だぞ、シヤンとしろっ!!」

「はい!!」

先ほどから怒鳴り、相当に乗り気で修行に参加している黒髪金瞳の少年こそ、つい一時間前は木陰で修行に参加するのを渋っていた彼である。名を、永崎 晃雅という。

職業は、インストラクターだ。………失礼、魔術学院生だ。

「お前、ホントにさっきまで渋ってた崎ちゃんかよ?! 修行になると怖えよっ!!」

「違う、俺はインストラクターだ!」

「いやいや、おかしいから?!」

軽口を叩き合いながら、二人は円を描くように動く。互いに互いを警戒し、今にも飛びかからんとする勢いだ。もちろん、これは模擬戦であり、互いにただのお遊びのような気持ちではあるが、周りに伝わる緊張感は決してかわいいものではなかった。

それは、咲良やゆあからしても同じのようで、多少驚いた表情をしている。

「すごい……魔術を使ってないのに、魔術師と対等以上に戦えるな

んて…」

「私は、晃雅が強いのは知ってたけど、吉井くんが結構ちゃんとしてるのが意外かなあ」

驚きの対象は違うようであったが。これで、二人の認識も少しは改まったことだろう。特にゆあの『魔術が絶対』という思想は未だ抜けきっていない。是非とも、“魔術師”以外の実力を認められるようになって欲しいものである。

「さあ、咲良！ 私たちも乱入しようか！」

「あ、それいいね！ よーし、じゃあ最初はダイヤモンド・ダスト  
「いやいや、それは危なすぎるよ?!」……ほえ？ そうかなあ？」

さり気なく危険な会話をしていたことを、晃雅たちは知る由もない。

「晃雅っ！ 私たちも混ぜて!!！」

「違う、俺はインストラクターだ！」

「もうそのネタはいいから?!！」

天風市内のとあるビルの地下。夜もだいぶ更けて来た今、そこに十人ほどの人間が集まっている。怪しげな男女が多いこのメンバー



の中、一人だけ場違いな少年がいた。彼は、なにやら苦しげな表情を浮かべてはいるが、別段なにかをされているようには見えない。ただ、冷たく、少年らしさの欠片もない彼は、どこか異様に映った。普段はとても少年らしく輝いているであろう瞳も、人を惹きつける笑みを浮かべるはずの表情も、今はただ只管に苦しげなだけだ。

その彼は苦しげな男女を目の前に、何かのメモのようなモノに目を向けながら口を開く。

「ターゲットに接触してから、一ヶ月ほどが経ちましたが、現在は比較的良好な状態にあると言えます。この流れを保てるならば、ターゲットの意表を突くことは容易になることでしょう」

苦しげな表情とは裏腹に、どこまでも感情の抜け落ちた、機械的とまで言える声音。ただ静かに、淡々と告げられる「ターゲット」に関しての現状報告は、なんの感情も込められずに続く。

「彼の魔力量は予想外に高く、その実力はそれよりさらに予想外の高さを誇っていました。その問題はどうとでもなるでしょう。実力を視認する機会に恵まれ、私の実力では到底敵わないと知った今でも、彼を手中に収める手立てはありません。要はタイミングです」

これで報告は終わり、と言わんばかりにメモをポケットにしまった少年に、怪しいメンバーのうち、一人の男が訊ねる。

「ターゲットの魔力は、この先もまだ伸びる見込みはあるのか？」

報告を終え、早々に帰ろうとしていた少年は、引き止められたことに若干顔をしかめながらも答える。

「はい。正直言って、彼の最大魔力上限は底なしです。暴発する恐れも今のところありませんし、最高のタイミングが来るのもまだ相先のはずですから、さらに魔力が溜まる頃合いを待つべきでしょう。……では、私の報告は以上です。帰ってもよろしいでしょうか？」

「うむ、そうだな。あまりこちらにいて、向こうで怪しまれても困る。戻れ」

「はっ」

息を吐き出すように返事をし、後ろを向いて歩き出す。

「これで膨大な魔力が、我ら“機関”のものとなる時期は近いっ！」

響き渡る哄笑。男性も女性も、何かにとり憑かれたかのように狂気を孕んだ笑い声を上げる。不気味だった。

少年は、その不気味な哄笑を背に浴び、盛大に顔をしかめながらその場を去っていくのだった。

「ああ…コイツらは、狂ってる」

そんなに不安かね？

なんで俺、こんなとこに立ってるんだろっな。

晃雅は嘆息していた。目の前で、尊大な表情をした茶髪の少年が、両腕を組んでナニカを見下すような視線を向けているのを見て、心底、嫌気が差す。その“ナニカ”が自分なのだから、不快な思いを抱くのは、些か仕方のないことなのかもしれないが。

しかし。晃雅がうんざりしているのは、なにもこの少年のせいだけではない。このコロシアムの会場に立っていること、それだけが彼を嘆息させるのだ。

だいたい、御尊四家に目えつけられないために辞退するって決めてたじゃないか。それなのに、なんで俺はここに立ってるんだよ、本当に。

そんな考えが頭を巡り、やはり晃雅は嘆息を禁じえなかった。

彼がこのような事態に陥った経緯を語るならば、少し時を巻き戻さなければならぬ。そのために過去の話を一つ、お付き合い願おう。

.....  
.....  
.....

『咲良。ちよつといいか?』

その日、晃雅は連れてこられたいつもの訓練場で、するつもりもなかったのに、全力で訓練に取り組んでしまったあと、咲良を自分のもとへと呼び寄せた。全魔戦を辞退する旨を伝えるためだ。彼女は、晃雅が全魔戦に出て、皆を見返すことを非常に楽しみにしていたよなので、辞退するならば声をかけておくべきだろうと判断したのだ。

幸い、彼女は物分りがいい。少しは残念がるだろうが、ちゃんと説明すれば納得してくれるはずであった。

『はあい。どうしたの、晃雅?』

晃雅の呼びかけに、彼女は嬉しそうに応える。いつも通り、柔らかい印象を与える綺麗な微笑みだ。同じくふんわりとしたブラウンのポニーテールに、非常によく似合っている。

『あんな。一つ、言いたいことがあるんだ。今度の全魔戦のことでな』

『ああ、全魔戦! 楽しみだよな! 私は勝てるかどうかかわかんないけど、晃雅ならっ!』

咲良のテンションは上がる。全魔戦を辞退しようと思っていた晃雅にとって、この流れは非常にまずいものであるのだが、彼女の勢いは止まらない。

『だから、晃雅! 全魔戦、絶対勝ってよね。私、頑張って応援してるからっ!』

『お、おっ』

それが決め手だった。満面の笑みを浮かべての『応援してるからっ！』の言葉を否定して、辞退することなど彼には出来なかった。それどころか、条件反射で肯定の返事をしてしまうほどであった。答えてしまったからには、引くわけにはいかない。今さら『やっぱ出ない』などと言うことは、彼のプライドが許さなかった。故に彼はしかめっ面を崩し、自信すら浮かべた笑みを咲良に向け、彼女の髪をそつと掻き撫でながら答えてしまう。

『任せる。咲良の期待には、応えてみせるさ』

とりあえず、数減らしの勝ち残り戦だけは生き残って、ト  
ーナメントまでは進もう。

見栄を張ってしまう彼は、どうしたって“男の子”であった。

…

……

……

過去の自分を思い返し、軽く自己嫌悪に陥ってしまう。なぜ、あの時に否定しなかったのか。それ以上に、なぜ『任せる』などとはざいてしまったのだろうか。大体、髪を掻き撫でるってなんだよ、恋人同士かっ！ ……後悔は絶えない。

それに と、晃雅は思考を重ねる。

学院に入学してから、体調が悪い日が続いているのだ。時たま訪れる眩暈のような頭痛と、それに伴う吐き気。何かの病気に侵されているか、とも考えたが、学院の精密な健康診断にも引っかかるこ

とはなかったので、とりあえず大丈夫なのだろう。それでなければ、現在の“地球”の魔術学や科学の最先端でも解明できない病気だろうが、その場合は打つ手がない。諦めるしかない、決心もつく。

だが。晁雅の中のなにかがその可能性を否定する。“夢”で“望み”を叶えられ、“代償”を捧げさせられた時のように、性質の悪い確信のようなものすら感じてしまうのだ。

と、ここまで考えてまたも顔をしかめる。また、思考が明後日の方へ飛んでしまった。体調の悪さに関して考えはじめると、最近の彼は思考が止まらなくなるのだ。悪い癖だ。

「まあどちらにせよ、戦わなきゃならないってことだな」

そう呟き、思考は再び冒頭へ戻る。コロシウム内に五十人近くの生徒を放り込み、最後まで気絶せず、コロシウムに一時的に設置されたステージ内から放り出されることもなく勝ち残ったメンバーだけで構成される、六十四人のトーナメント制で行われる全魔戦の中でも、最初の戦闘に当たってしまった晁雅は、前日の勝ち残り戦を勝ち抜いた者の中で、誰よりも早くこのコロシウムの地を踏み、同じく第一試合に出場する生徒と相對する。コロシウムは四つあるのだ、AとDブロックで戦いは行われる。よって、第一試合に出場するのは計八人。勝ち残り戦の時から考えれば、千人以上もいる中で八人に選ばれてしまったのだ、かなりの不運だろう。やはり晁雅は、自身の不幸を嘆かずにはいらなかった。

しかし。そんな彼が、真剣に戦うか、と訊かれれば、それは否なのだろう。トーナメントに出るぐらいまでは気張っても大丈夫だろうと考え、勝ち残り戦を無難に生き残った晁雅は、それでも、いくら咲良の期待があるとはいえ、やはり御尊四家に目をつけられるわけにはいかない。試合会場に来て、その地を踏み、改めてそう思った。彼女には申し訳ないが、本気を出して期待に応えることはやめ

よう。トーナメントの初戦で、負けよう。

そう決心し、いつの間にか俯き加減になっていた顔を前へ向ける。必然的に視界に入る、茶髪の生徒の尊大なニヤケ笑いは晃雅の神経を大いに逆撫でするが、ここで気にしたら負けだ。いや、どちらにしろわざと負けなければならぬのだが。

それを思うとやはり洩れてしまう溜め息は、目の前の生徒に違う幻想を抱かせた。

「そんなに不安かね？」

「は？」

思わず聞き返してしまった。何を不安に思う必要があるのだろうか。痛くもない魔術を受けて痛がらなければならぬという、演技力への不安か？ それとも、格下の相手にわざとでも負けなければならぬという、屈辱感を強制されることへの不安か？

晃雅からしてみれば、どちらも大した不安でもなかった。ただただ非常に面倒なだけである。目の前の生徒が『不安か』と訊ねてくる意味も分からなかったし、それどころか『面倒だ』などと考えて溜め息の絶えない自分が、どうにも“東條家”の者と重なって、小さな微笑みを浮かべてしまったほどだ。

「何をニヤケているんだ。……ああ、そうか。無能な君は“魔術師”と相対することへの不安で壊れてしまったのだね。かわいそうにここまでこれば、汚い手で生き残ったであろう勝ち残り戦ですらも惨めに思えてくる」

ここでようやく、晃雅は相手が言う『不安』の意味を理解した。自分が勝ちようのない魔術師と相対することへの不安か、と。自分の中に、そのような不安の種類など存在もしていなかったのだから

ら、思い至ることがなかったのも仕方のないことだろう。そんなことよりも晃雅の心は、目の前の生徒がわざとらしく嘆息し、しかしニヤケている顔への苛立ちの方が募っていたのだ。

だからだろう。晃雅は、目の前の不遜な茶髪を少し茶化してやるう、と思いつく。幸い、試合開始の合図はA〜Dまで合図で鳴らされるので、時間はある。

「運がよかったな。俺みたいな無能との初戦で」

気軽に、気負わず、笑みすら浮かべているような、普段がしかめっ面の彼からしてみればあり得ないフレンドリーな態度で語りかけた。

この問いに、相手の生徒は今までのニヤケ笑いをさらに色濃く表し、晃雅を見下すような態度を全く崩さず、それどころか拍車をかけて見下しながら言葉を返す。

「ああ、すごぶる運がいいよ。君みたいな無能が相手だと、簡単に勝てるからね」

「かもな。そうじゃなきゃ、魔術師失格だろう。本当に、お前は運がいい。俺と当たったおかげで、初戦敗退という不名誉を被る必要がない。俺のみたところ、どう見ても俺意外と当たればお前は勝ち上がれないからな。実に運がいいよ」

余裕綽々。そんな四字熟語がたまらなく似合う、意地の悪い笑みを浮かべた晃雅は、目の前の茶髪をわざとらしく煽る。これは、ストレス解消にもなるうえ、明らかに実力不足なこの魔術師の魔術を怒りによって少しでも攻撃的なものにし、“負ける演技”を楽にするという、一石二鳥の効果が期待出来た。

その目論見は、晃雅の思惑通りに成功したようで。茶髪の生徒は顔を茹蟯のように真っ赤にし、目の端を吊り上げるように怒りに震



えている。自信満々に振る舞いながらも、実力の伴わないキザなこの年代の少年には、ありがちな沸点の低さであった。

「この“平塚 啓吾”を怒らせるとは、なんたる悲劇。今の僕は、非常に機嫌が悪いよ。僕の火の魔術で、燃やし尽くしてやる」

こいつはバカだろうか。そんな気持ちを抱いてしまった晁雅に、罪はないだろう。試合開始前から自分の適正魔術の属性を告げるとは。これで、いつかのように隠した属性がなければ、これはやはりただの“バカ”と言わざるを得ないだろう。

だが、それを指摘してやる道理もないし、時間もない。中心に位置するBブロックとCブロックの間の中継所にある小高いガラス張りの部屋に、学院長秘書である谷口 真樹の姿が認められたからだ。艶やかな黒髪を揺らし、颯爽とマイクの元へ向かう彼女は、今日もメガネが非常に良く似合う。

そんな彼女は、いつも通りにいろいろな感情（主に学院長への不満）を内に隠しこみ、繕った無表情でマイクを握る。魔術で効果を高めているマイクは、それだけでA～Dブロック全員の耳までよく響き渡る。

『準備はよろしいですね？ …… それでは、全校生徒出場制魔術戦闘大会、A～Dブロック初戦の開始を今ここに宣言致します』

生徒間に緊張が走る。コロシアムの観客席にいる生徒たちでさえも、心地の良い緊張間に包まれ、特有の興奮状態が生まれた。

それでは、始めっ！

全魔戦ブロック別初戦、開幕である。

そんなに不安かね？（後書き）

名前をつけるつもりはなかったモブキャラに名前が……。

平塚啓吾、恐るべし…！

私の憧れなんだよ…っ！

鳴り響く試合開始の掛け声。それと同時に詠唱を始める眼前の茶髪少年。晃雅からしてみれば、立ち止まって詠唱を始めるなどとはどれだけ戦闘経験がなければ気が済むのか、と言いたくなるほどである。この分なら、この少年 平塚 啓吾こそ、彼の言う“汚い手”で勝ち残り戦を生き残ったのではないか、と思ってしまうのも無理はない。それどころか、学院に合格した事実すら、虚構のものであったのではないかと邪推してしまいそうだ。

実際、実践形式の試験が多く含まれていれば学院の入学試験にも落ちたであろう啓吾は、それでも学院の魔術師である。それも、晃雅たちより長く学院生として授業を受け、その力を磨いてきた“学院四年生”である。中々に侮れない速さの詠唱の言葉を紡ぐ。

「《踊れ、踊れ。火の円舞曲<sup>ワルツ</sup>。逆巻く火炎の渦よ。その煌きを顕現せよ！》」

まもなく、詠唱は完成する。

晃雅は、動くことなくそれをただ冷然と見つめていた。わざと当たらなければ、負けることなど叶わない。

しかしこの場合、啓吾の魔術は明らかに長い詠唱の末の魔術つまり上位の魔術にあたる。それならば、この魔術に当たるだけでいくら晃雅には“魔術耐性”があるとはいえ、この魔術を真正面から受け止めることは、かなりの痛手と言えた。

そして、啓吾の魔術はその真名を告げられる。

「怖気づいて動くことも出来ないかい？ 哀れだね。《 炎舞<sup>えんぶ</sup>・  
豪火絢爛<sup>ごうかけんらん</sup>！！》」

啓吾の周辺から渦巻くように現れる炎。金色に煌く炎としては異様なそれは、まさに豪華絢爛。魔術名である“豪火絢爛”を冠するに相応しい美しさを誇る魔術であった。また、詠唱による発動時間の問題や、術者の周りを渦巻くという無駄な演出さえ省けば、その豪火という形容も相応しいと言えるほどの熱量を誇っている。

そんなまさしく豪火といえる炎が、渦巻き、逆巻き、だんだんとその熱量や規模を増してゆく。正直、晁雅からすれば早くしてくれ、とでも言いたくなるような演出の鬱陶しさだが、いくらかナルシストなきらいがある十八歳の啓吾だ、“魔術師”ではない晁雅が相手なら、これくらいの見栄を張っても、なんらおかしくはなかった。

「どうだい、この金火は。美しいだろう？ もうすぐ君は、この魔術で焼き尽くされるんだよ。……そう聞くと、この美しい炎が途端に残酷さを秘めているように見えてこないかい？ こいつ自体はこんなにも美しいのに。使い方によっては、人間を焼き殺してしまうことすら可能なだよ。まったく、おそろしいね、炎の魔術というもの。そしてなによりも、そんな炎を創りだしてしまう僕の才能が……！」

とんでもないナルシストである。それも、晁雅を焼き殺そうとさえしているのだ。ただの脅しではあるうが、その表情は真面目も真面目、大真面目である。

それでも。晁雅は慌てない。動じない。むしろ、大歓迎だ。強力な火の魔術で、少しでも怪我をしようものなら、棄権だって可能だ。さっさと撃つてくれ、そう言いたくなるほど、待ちわびてもいた。

だが。その現状を良しとしない人物が一人いたことに、晁雅は気

付かない。

そして、魔術は放たれた。

「ゆけ、僕の金火よ！！」

漏れ出す哄笑。魔術師ではない晃雅を真正面から嘲る笑い声。そんな音を奏でるかのように、金色に煌く炎は晃雅へ放たれた。

「来い。……その炎で、俺を焼き尽くせ。望み通りに、大火傷を負って、負けてやるさ」

彼女は、正直焦っていた。困惑もしていた

なんで、晃雅はあんなにも相手生徒を煽っているのだからか。

試合開始前のこと。観客席の中でもかなり前の方に陣取っていた咲良は、ゆあや海斗、いつかと共に晃雅を応援しようとしていた。驚きではあるが、一年生にしてこのメンバーは全員が勝ち残り戦を勝ち抜いたのだが、晃雅の第一試合に被る者はいなかったようだ。

そんなメンバーの中でも、空間を操る魔術師であるいつかは、綺麗にコロシウム内の空間を操って音をこちらまで届けていたのだが、それを聞いていた咲良にとって、晃雅の行動はどうにも、おかしいと思えなかった。

晃雅は、意味もなく人を煽ったりしない。そこには、必ずなんらかの打算がある。例えば、以前、魔術を使えないことで不良に絡まれた際、不良たちを逆上させるために動いているかのような言動を繰り返していたのは、自身の精神衛生を保つためだった。自分は今にも気にしていない、と。逆に、不良を煽る余裕すらあるのだ、と。そう自分に言い聞かせることによって、自身の確立を図っていた。それは些か悲しい事実ではあったが、確かに意味があったのだ。それでは、今回の場合はどうか。見ている限りでは、煽る意味など全く感じられない。なぜなら、晃雅は『任せる。咲良の期待には応えてみせるさ』と息巻いて、その……髪を掻き撫でてくれたのだ。当然のようにこの試合を勝ち進めてくれると信じて疑わないし、晃雅は完全にその気であると思っている。

だが。

それは違う。晃雅は、勝ち進む気などない。御尊四家に目をつけられるわけにはいかないからだ。本物の天城寺として、魔術師の才があつたならば、御尊四家全員の魔術師を一人で相手取つても、引けをとることはないだろう。だが、晃雅は違う。魔術以外の才能に溢れているとはいえ、複数の優秀すぎる魔術師と相對して、無事でいられるほど彼は強くない。それどころか、一人を相手にしても、勝利するのは些か骨が折れるかもしれない。下手すれば、彼らとの勝負の行方は五分五分という可能性もある。大いにある。それではどまでに、晃雅と御尊四家の其々との実力は拮抗していた。つまり、勝ちを辞退するしかないのだ。咲良の想いや、期待に応えられることはないのだ。

そして鳴らされる始めの合図。それと同時に始まる相手方の詠唱。それに対して取られる晃雅の行動は、咲良の期待を大きく裏切るも

のであった。

動かない。

ただひたすらに。

立ち尽くし、何もせず、冷めた瞳で茶髪の少年を何の気なしに見つめている。

なぜ、彼は動かないのだろうか。なぜ、彼は試合前にあれほど煽っていた生徒の詠唱を咎めることなく、妨害しようとしなののか。それを防ぐだけの手段も、実力も持ち合わせているはずなのに。なぜ動かない。なぜ妨害しない。なぜ……彼はあんなにも冷めた表情をしている。なぜ、彼は勝ちを取ろうとしない。目の前にあるのは、彼が動いた先にあるのは、相手生徒の油断の末である安易な勝利しか存在しないというのに。

「うわ、崎ちゃんも豪快だねえ。あいつ、ヤツの魔術を真正面から受けて『効かないな。火の粉でも散ったか?』とかクールに告げてフルボッコするつもりだぞ、絶対。えげつねええ!」

海斗の意見はこんなものであったが、咲良の直感が否と告げる。

あそこにいる黒髪の少年は、冷めた表情で立ち尽くすその少年は…

…晁雅は、負けるつもりなのだ、そう告げているのだ。

それに気付いた咲良は、大いに不安を抱く。晁雅の魔術耐性は万能ではないことを知っている咲良は、当然のようにあの火の魔術を真正面から受けければ決して少なくないダメージを負うことは理解している。それゆえの不安。同時に、彼の身を案じる。冷や汗が、ツーツと流れた。

「咲良? どうしたの?」

そんな彼女の変化に気付いたゆあへの問いかけにも、咲良が答える



ことはない。そして、それと同時に、いつかが何かに気付いたように、少し慌てたような声をあげる。コロシウムでは、金の炎が晁雅に向かうその直前だった。

「『負けてやるさ』って……………永崎は、あの魔術で負けるつもりなのか?!」

金火が放たれる。響く悲鳴。あの魔術を受ければ、いくら晁雅でも大火傷を負うに決まっているではないか。そんな咲良の悲鳴を伴った危惧と共に、その金火は晁雅に着弾した。

熱い。

もの凄い熱量だ。熱すぎる。

正直、悔りすぎていたかもしれない、学院の四年生というものを。本当に身が、内まで焼き尽くされているような感覚に陥るのだ。

燃える、渦巻く、逆巻く、炎。

決して燃えることのない、学院特別製のブレザーを通り越して伝わる熱。

熱い、熱すぎる。熱い熱い熱い熱い熱い熱いあついあついあついあついあついあついあつい……………。

聞こえてくる悲鳴。これは、咲良のものだろうか。小さな頃から慣れ親しんできた彼女の声。非常に優しい響きを持つはずの彼女の声は、いまや悲しみに染め抜かれていた。その悲しみを作りだしているのが自分だと思うと、どうにもやるせなかった。こんなことな

ら、なにもせず棄権した方がよかったかもしれない。せめて出るだけ出て、誠意は見せようと思っていた晃雅だが、彼女を悲しませるこの結果は、全く以って望んでいたものではなかった。

ああ、俺は選択を誤ったな。そう、彼は悟った。

それと同時に、止む炎。案外、大火傷を負うこともなく、ただただ熱いだけのものだったように、唐突に止む。実際は、晃雅の肌は軽くではあるが焼け爛れているのにも関わらず、彼はよろけることなくそこに立ち尽くしていた。

なぜだろう。これだけの傷ならば、倒れたフリをしても気付かれることはないだろうに。なぜ、未だに立つのだろう。なぜ、目の前の少年を驚愕させるような生命力を見せびらかしているのだろう。

これが、俺の見栄なのか。

自嘲するように笑う。やはり、どうにも自分は負けることが嫌いらしい。そう素直に負ける演技は出来ないようだ。それなら、啓吾の言った通り“不安”を覚える必要はあったのかもしれない。痛くもない魔術をくらって、痛いフリをするという、演技力への不安を……それでも、まだ決心はつかない。勝つことの決心は、つかない。御尊四家の存在は、それほどまでに大きい。

しかし。

彼の中でさらに大きな比重を占めるものは、確かに存在しているのだ。

「晃雅！ 期待に込めるって言葉は嘘だったの？ 違う、晃雅はい

つだって私を裏切らずにいてくれた！！ 本気出して、勝って！  
お願い！ そんな傷なんて、跳ね除けて！！」

晃雅は、私の憧れなんだよ…っ！

憧れ、か。晃雅は密かに笑う。そうか、憧れ。俺も、抱<sup>いだ</sup>いていたよ。お前に。いつでも俺を見捨てずにいてくれる咲良の度量に、憧れを、な。

ならば、俺もその憧れに応えなくてはならない。晃雅はそう考えてニヤリと、今度は不敵に笑う。まるで子供のように、楽しそうに。

「『効かないな。火の粉でも散ったか？』……海斗<sup>うみと</sup>だったら、俺が言う言葉をことう予測しただろうな」

そう呟き。やはり愉しそうに笑う。見ている側の啓吾には、炎の魔術をくらい、火傷を負って尚、愉しそうに笑う晃雅はホラー以外のなにものでもなかった。それが、なぜか恐怖を煽る。なぜ、自分は魔術を使えない落ちこぼれな無能<sup>むねう</sup>ごときに恐怖を抱いているのだろうか。

そんな啓吾の恐怖を指摘するように晃雅は口の端を吊り上げて笑う。言葉を吐く。

「怖いかな？ 当然だ。人つてのは、自分より強いモノには、恐怖を抱くように出来る。警戒しろよ？ それを怠れば、とって食われるのはもうすぐだ」

告げ終えたのは、晃雅が啓吾の後ろへ回り込んだ後だった。

「まあ、今さら警戒したって意味ないけどな」

おやすみ。

そう呟き、啓吾の首筋に手刀を落す。もはや完成された芸術にさえ見える華麗な手さばきで、“学院四年生”啓吾の意識は、あまりにもあっけなく刈り取られた。

『勝者、一年A組、永崎 晃雅！！』

咲良や海斗、いつか、ゆあのメンバーには非常に嬉しそうな笑みが、その他からは、驚愕で彩られた表情が、おもしろいほどくつきりと浮かべられた。

この勝負、“無能”の勝利である。

## 頑張れ、咲良

突然だが、ここで一つ“微笑み”というものについて記しておくと思う。

微笑みとは時として、残酷なモノである。とろけそうに甘い極上の微笑みの裏に、隠しきれない怒り……どす黒い障気のようなものさえ含まれていたりする場合もある。実に厄介で残酷、純粹な怒りなどより余程、人間の恐怖というものを喚起させるのだ。実際、微笑みとは元来、牙を見せつける威嚇のための行動だった、という説もあるほどなので、微笑みに厄介な残酷さを感じ、恐怖するのは当然の事象であると言えるかもしれない。

と、ここまで“微笑み”について語ったが、何も全く関係のない話をしていたわけではない。むしろ、大ありである。

先ほど説明した厄介な残酷さを秘める、それでいてとろけそうに甘い極上の微笑み、それを目の前の伶俐な美貌の少年に向けて浮かべている少女がいるのだ。白磁の頬に差す朱がなんとも魅力的なその少女、名を上原 咲良という。

しばらく先まで試合のない彼女は、たった今、試合を終えた少年の部屋に上がりこみ、一対一で相対している。

そんな状況で例の微笑みを湛え、真っ直ぐに黒髪金瞳の少年を見つめる。何も言い出さないこの状況が、少年、晁雅の恐怖を煽る。

そう、恐怖だ。彼は最愛の幼馴染に恐怖を抱いていたのだ。だが、それも当然のことなのかもしれない。何故なら晁雅の恐怖の形は、通常とは少し、性質が異なるモノなのだから。

その微笑みから、自分が咲良にどれだけ心配をかけてしまったのかと。この火傷で彼女をどれだけ悲しませてしまったのかと。想像するだけで怖い。罪悪感に苛まれ、それと同時に気付く。

「……俺は、こんなにも気にかけてたんだな」

その小さな発見は、小さな眩きとなつて。晃雅の、形の良い唇の間から漏れ出す。

「当たり前だよ。だって、晃雅は私の大切な人だよ？ それで憧れなの。晃雅はいつも危なかつかしくて、心配が絶えないんだから……」

晃雅の眩きに応え、今度は心配そうな、不安げな表情を浮かべる咲良。実に晃雅の“罪悪感”というものを逆撫でするその表情の変化は、眼前の少年を素直に謝らせるのに充分であった。その表情の変化というものを、意図的ではなく心からやってのけてしまう咲良のそんな純粹さに、晃雅は逆らえないのかもしれない。

「……悪い。実は、勝つつもりはなかった」

そして、そんなところに俺は憧れるんだ。晃雅は、そう心の中で眩く。

互いが互いに憧れ、尊敬しあっている。それは中々に理想的なことなのかもしれない。だからこそ、二人は互いのことがなんとなく分かってしまう。この場合は咲良だが、彼女も気付いてしまった。晃雅の、勝ちたくない理由に。

「あ………御尊四家？」

「まあ、そうだな。あれに目えつけられると、結構困る」

その言葉に、咲良はバツの悪い気持ちになる。確かに、晃雅は無茶をして炎の魔術に当たる必要はなかったし、そのせいで自分たちに迷惑をかけているので、あの怒りは妥当と言えた。しかし、その“無茶”をせざるを得ない状況を作り出してしまったのは、もしかすると自分なのではないか、そう思い至ってしまったのだ。

だが、それは彼女の思い違い。正直に言えば、晃雅としては、彼女の存在はありがたかった。彼女の声援を、妙に温かく感じた。やはり、彼には彼女が必要だった。

「ああ、別に咲良を責めてるわけじゃないぞ？ ……確かに、勝つ気はなかった。それでも、俺は負けず嫌いだな？ あれこれ理由つけても、結局は勝ち残り戦だって自分の意思で勝ち進んだし、棄権もしなかった。炎の魔術だって、くらったらすぐに負けを認めるはずだったんだ。なのに……俺はそれをしなかった。たぶん、待ってたんだろうな。咲良の声を。あれがあったから、俺は動けた。だから、逆に俺は感謝してるんだ。ありがとう、咲良」

そう言って、肩をぽんつと軽く叩き、照れ隠しをするように彼女の横を通り過ぎて、近くにあった椅子にどっかりと座り込む。自分で言った感謝の言葉が、気恥ずかしかったのだろう。

「晃雅………うつん、こちらこそ、私なんかの期待に伝えてもらっちゃって、ごめんね」

「いや、お前の期待があったからこそ、俺はやる気を出せるんだよ。どっちみち、俺はここで“魔術師”と対抗する術を見につけなきゃならない。なら、別に御尊四家に見えつけられるなんて、逆に好都合。……そのための一歩は、俺一人じゃ踏み出せなかったよ」

そう、晃雅の学院入学最大の理由は、“魔術師を越えること”。

それを叶える近道は、魔術の性質を学び、実際に見て、相対することだ。つまり、今回の全魔戦などは、絶好の機会。ただ、御尊四家という強大な力の前に、怖気づいてしまっていたのだ。晁雅一人なら怖気づいたまま、一回戦敗退を喫して……いや、勝ち残り戦さえ勝ち進むことを諦めていただろう。だが、そうはならなかった。咲良の声援、期待のおかげである。

だからだろう。晁雅はやはり、ここでも見栄を張ってしまう。

「さて……今度からの試合は本気でいくよ。嘘はつかない。しっかりと咲良の期待に応えてみせる。任せな。俺は火傷で医務室にいて気付かなかったが、高峰も初戦を勝ち進んだらしいし、あいつにも負けてられん。勝ち進むよ」

どこまでいっても負けず嫌いで、咲良の前では少しでも、頼れる自分でいたい。そんな子供な部分は、晁雅の中でも小さいと言いがたいほどに存在していたのかもしれない。

「だから。次は、咲良の試合だ。……初戦の相手は御尊四家の一角、北川 雪音だったか？ 同じ氷属性の“派生魔術師”だな」

「うん。正直、勝つのは難しいと思う……」

「勝て、とは言わない。北川の者は、情け容赦ないことで有名だからな。でも、応援する。俺にお前がついてるように、咲良には俺がついてるぞ。……まあ、なんだ、俺の言いたいことは一つ、だな」

頑張れ、咲良。

「……うん！ ありがとう、晁雅っ……！」



やはり彼女には、柔らかく、優しい微笑みが一番似合う。

「よおし、頑張るぞ。だって、晁雅が応援してくれるんだもん！  
勝てなくても、一回は雪音さんの意表を突きます、私っ！！」

Cブロックの試合を行うコロシアムの中心部。そこで、気合を入れて拳を天に向かって突き出す少女が一人。どこかぼわくんとした柔らかい雰囲気をした彼女は、目の前の冷めた表情で立ち尽くす銀髪の少女の冷たい視線など歯牙にもかけず、声を張り上げていた。

彼女が相対す少女　長く銀に煌くストレートセミロングの髪と、切れ長で冷めたグレーの瞳が特徴の彼女こそ、御尊四家が一角、北を守護する北川家第十七代目当主、北川　冬耶（ちゅう）の一人娘である“学院三年生”雪音嬢である。

その彼女は、どうにも嫌そうに顔をしかめて、咲良を見ている。なにかが気に入らないのだろうか。そして、そんな目を向けられているのにも関わらず、全く動じずに先ほどのような言葉をはいてしまふ咲良のある意味“天然”と言える部分は、さすが、としか言いようがない。

だが、雪音には咲良のそんな“天然さ”が気に入らなかつたようです。そのどこまでも冷たい表情が、もはや“凍てついている”とまで表現することが正しいのではないか、と思えるほどに冷たさを増していた。

「……先ほどからあなた、鬱陶しいですよ。大体、勝ちを諦めているのなら、一矢報いようと努力する必要などありません。大人しく散ってください」

その透き通るように真っ白な肌に映える、真っ赤な唇の間から零れ落ちるように呟かれた言葉は、やはりどこまでも冷たく、そして鋭利だった。

「そんなわけにはいきません。だって、晃雅が応援してくれるんですからっ！」

それでも、咲良の想いは変わらない。目をキラキラさせて、まるで夢でも見ているかのように晃雅からのそっけなくも優しい『頑張れ、咲良』という試合前の言葉を思い返す。それは、彼女のモチベーションの上昇へ、非常に大きな影響を及ぼしていた。

だが、咲良にとっては紛れもないプラスの存在である晃雅も、目の前の雪音には大いなるマイナスではない。そう、御尊四家であれば、知っている。晃雅の本当の姓を。彼が、“天城寺家の落ちこぼれ”であるという事実を。

「はあ、またその少年ですか。……いい加減、上原の者として自覚を持つたらどうです？ 落ちこぼれに肩入れするなど、私としては愚かしいことしか思えませんね」

「晃雅は落ちこぼれなんかじゃないもんっ！ 私よりも、もちろんあなたよりも強いんだからね！」

落ちこぼれ。魔術を使えない晃雅についた、二つ名のようなもの。他にも、“無能”や“汚点”など、どう考えても晃雅を差別する内容でしかなかった。

咲良は、それがどうしようもなく嫌だった。晃雅たちの前だとあまり感じられないのだが、元来彼女は人見知り……そうであるにも関わらず、二年も先輩である雪音に食って掛かるばかりでなく、敬語をはずしている。彼女にとってこの言葉は、その差別意を向けら

れている晃雅よりも敏感に反応してしまう言葉であった。

「そうですか。ならば、あなたが私に勝ってみなさい。あなたは、落ちこぼれよりも弱いのでしょうか？ そのあなたが私に勝てば、落ちこぼれの私への優位性が証明される」

そんな提案。もちろん、咲良は…。

「当然だよ！ 私は、勝つ！！」

その提案を受けた。

それでは、Cブロック第五回戦、始めっ！！

Cブロックのコロシアムだけに鳴り響く放送。

咲良の、晃雅が有能であることを証明するための初戦は、今まさに始まるうとしていた。

## 〈荒れ狂う雪の舞〉

始まりの合図は、まるで咲良の『私は、勝つ！』という言葉を受けたかのように、言葉が告げられた直後に響き渡った。

その瞬間に走り出す二人の少女。一方は柔らかいブラウンのポニーテールを、一方は煌くような銀色のストレートセミロングを、靡かせて駆け出す。

魔術師同士の戦闘は、基本的に相手からの距離を大きく開ける場合が多い。それは、少しばかり長めの詠唱でも成功させるためだ。距離があれば、魔術師自身を基点とする魔術の対処もしやすい。いつかの爆発魔術のように、魔術行使者の場所が関係なく突発的に効果を発揮出来る魔術は希少なため、相手との距離をとるこの戦法は、魔術師vs魔術師の基本とも言えるのだ。

当然、彼女らもそのように動く。と、そう誰もが予想した。実際に、北川 雪音ゆきねはそのように動きはじめていた。

しかし。咲良は一味違う行動に出る。

水魔術の応用で発生させた霧に身を隠し、接近したのだ。簡単な魔術を呟くように一言で詠唱し、地面に張った氷の上を滑りながら雪音に肉薄する。相手の詠唱が終わる前に近づき、一気にかたをつけることが出来たならば、名高い御尊四家が一角を相手にしても勝機はあるかもしれない。そう考えてのことだった。

普通に走りこむだけでは到底不可能なスピードで、咲良は地を滑る。彼女が風と水をマスターしたうえの氷魔術師だからこそ出来る芸当。凍らせた地面に足を置いた自分を、風によって運ぶ。雪音までの距離は、一瞬で詰まった。

「……はあっ！！」

そのまま、なかなか侮れない素早さと綺麗なフォームで拳を振りぬく。雪音を一発KOさせるために、彼女が考えた第一の策であった。

だが。そんな策など誰もが思いつくものであるし、相手は優秀すぎる家系である御尊四家が一角。それも、一番冷酷な北川家の長姉であるということをおぼえてはいけなかった。

「……《荒れ狂う雪の舞》」

たった、一言。ただそれだけ。距離をとろうとしていた雪音は、肉薄する咲良に気がついた途端に動くのを止め、たった三文字の“スノウ”というだけの言葉を紡いだ。

本当に、それだけだったのに。

彼女らの間に唐突に浮かび上がる、鋭く尖った無数の結晶<sup>バウダースノウ</sup>。それは、冷然と。ロシアム内の温度を数度下げて、咲良へ向けて吹き荒ぶ<sup>すさぶ</sup>。途方もない風量と、身体の芯まで凍りつくような冷気を伴い、ロシアムの壁に叩きつけられた咲良を侵してゆく。

とんでもない才能だった。通常、“優秀”と謳われている魔術師だとしても、十語近くの単語を組み合わせ、文章として意味を成すように繋がなければ、放つことなど到底不可能な魔術だ。それを、彼女はたった一言でやってのける。言うなれば“格”というものが違うのかもしれない。

「“勝つ”……そうほざいておいてコレですか？ 随分と呆気ない

ものですね」

相も変わらず無機質な声。まるで感情の籠っていないその機械的な声で、壁に叩きつけられ、今も尚“雪”に浸食されている咲良に見下しているような蔑む視線を向ける。

氷柱つらばのような鋭さと冷たさを全面に押し出したような凍てつく表情は、彼女の妖しく冷酷な魅力を存分に際立たせていた。些か、使い古された感は否めないが、まさに“氷の女王”とでも称するのが適切な表情であった。

誰もが思っただろう。対戦相手が悪すぎた、咲良では勝てるはずもない、むしろ今、棄権しなければ命すら危ないのではないかと。

だが、それは違う。……違うのだ。

咲良の、まるで生気の籠っていない瞳。体温が低下しきってしまったかのように、血すら流れていないのではないかと、疑いたくなる蒼白な肌の色。形が良く、艶やかで可愛い唇すらも、今は紫色に変色している。……確かにそれは、彼女の“死”が目の前にあるようにも見えた。

実際、その“咲良”は生きていなかった。

「……」  
《吹雪け、ダイヤモンドダスト》

唐突に呷かれる、聞き取ることすら困難であろう小さな言葉。それは、不思議と雪音の耳に届き、響いた。彼女の跳びぬけた危機察知能力によるものなのか、聞こえるはずもない呷きが、彼女の警戒心を大きく煽った。

彼女の警戒は正しい。実際、咲良は雪音の後ろに立ち、長い詠唱を終えて自身の十八番と言える魔術を放っていたのだから。

「…っ！！」  
《氷壁<sup>ウォール</sup>っ！！》

咄嗟に、後ろを振り返りもせず魔術を展開し、身を捻りながら半球状の壁を創りだす。自身はその壁の瀬戸際まで近づき、張り付くようにしながら魔力を送り込み続ける。

彼女が氷の壁を展開し終えるのと、咲良による氷の暴風が吹き荒れるのは、奇しくも完全に同時であった。

半球状に展開された強固な氷の壁に、鋭い氷の刃を孕んだ凄まじい冷気が、荒れ狂う暴風と共に衝突する。どんとどんと下がってゆくコロシウム内の温度。既にコロシアムの内側は、凍てつく氷で閉ざされていると言っても過言ではないだろう。

氷の暴風を球状にすることによって受け流し、その壁に張り付くことで、後ろに流れる狂気の風から逃れる。いくら北川家の長姉と言えど、天城寺の側近家系である“上原”の渾身の魔術に対抗するには、一言の魔術だけではこれが限界だった。

創造した壁が壊れぬよう、魔力を常に送り込み続けるために氷の壁に手を当ていることによって凍り付いてゆく白磁の腕。ほっそりと綺麗なその腕が、咲良の氷に侵されてゆく。

壁を展開している分、先ほどの“咲良”よりかは幾分かマシな状況ではあるが、ピンチなことにかわりはなかった。そもそも、なぜ

コロシアムの壁に叩きつけられていたはずの少女が、今はその反対方向から凶悪な氷の風を送り込んでいるのか、雪音には見当もつかない。

不意に。凍てつき、狂ったような滅びの風は止んだ。と、同時に目の前に展開していた壁が音もなく崩れ去る。注いだ魔力が切れたのだろう。

攻撃が止んだことに一安心し、距離をとってまた一言、詠唱の言葉を呟こうとした矢先。その瞬間の出来事だった。

鎮魂歌<sup>レクイエム</sup>は、静かにパチンつと指で鳴らされる小さな音。ただ、それだけ。氷ついていた雪音の真つ白な腕を、切り裂くように砕け散った。

「きゃあ…っ！」

普段の彼女からでは想像も出来ない、感情の籠った叫び。腕ごと砕け散つてもなんらおかしくない魔術でも、多くは凌いだために切り裂かれる程度で済んだダメージ。それでも、血の滲む腕は、彼女を言い知れない敗北感で染め上げた。

しかし、それは咲良にとっても同じ。今の魔術には自分の出来る全ての魔力を込めた。もちろん、手加減など考えずに、全力で。魔力は、ほぼ空になるまで使いきった。それなのに、与えたダメージは腕から血が滲む程度。勝ち目は、ない。そんな考えが、彼女の頭の中を駆け巡った。

「……ふふっ……まさか、ですね。ええ、今なら分かります。あな



たは、優秀だ。おそらく、霧を展開した時からの作戦だったの  
でしょう。一息ついた今なら、容易に理解出来ますよ。むしろ、なぜ  
気付かなかったのでしょうかね。あの、スケープ・ドール氷雪の人形に」

スケープ・ドール氷雪の人形。アイスメイクで生み出される、自我を持った氷人形だ。その詠唱はとても短く、ただ一言呟けばいい……《この身は我に非ず》と。それだけで、身代わりの自分は創造される。氷魔術師として、誰もが行使可能になっておきたい魔術の一つで、これを身代わりとして動かせ、その間に敵の死角から詠唱を行うのにもってこいの魔術だ。

ただ、それなりのリスクというものはある。それは、この魔術の半端ではない膨大とも言える魔力の消費量。足りなければ発動しな  
いだけではない。注ぎ込んだ分の魔力が暴発し、酷い怪我を負って  
しまう。高いリスクの末に用意された、有用な魔術だ。

当然、咲良の魔力は、『スケープ・ドール氷雪の人形を創り出すのは非常に簡単である』と言えるほどの量を備えている。が、その後の全力のダイヤ  
モンドダスト……それを考えると、彼女の魔力はほとんど残って  
いないも同義だった。

対して雪音の方はどうだろう。今この場で傷を負っているのは彼  
女だけ。ダメージだけで計算すれば、彼女の大負けだ。それが彼女  
の感情を敗北感で染め上げた。だが、魔力量を考えれば、彼女の優  
位性に気付かされる。彼女は、ほとんど魔力を消費していない。

「認めましょう、あなたは優秀です。……それならば、私が得意な  
魔術で対抗してあげなければ無礼に値するというもの。続けましょ  
うか」

そう言って、初めて意図的に無表情を崩した彼女は、優雅で冷た

い微笑みを見せる。それだけで、氷の魔術が使用されたわけでもないのに、コロシアム内の温度が急激に下がる。そんな錯覚を咲良に、観客席のギャラリーに、抱か<sup>いだ</sup>せて。

## 俺の前から消えてくれ

冷たい。どこまでも冷たい表情。それなのに、優雅に吊り上る口の端。どこかのお嬢様が、紅茶を片手にコロシウムへやってきているのかと見紛うほどの優雅な笑み。サラサラと揺れる銀色の髪が、そこはかとなく高貴さを滲み出させている。

その高貴な彼女は、目の前に立つ少女に冷たい微笑みを向け、人差し指をピツと天へ向ける。すでに立つことで精一杯な対戦相手。咲良に、雪音は自らの“得意な魔術”を使って対抗するという。明らかかなオーバーキルになってしまっただろうが、それが雪音にはたまらなく嬉しかった。

天へ向けられた、その細くしなやかな指先を見つめ、雪音は今まで一番長く、通常の魔術師が上位の魔術を行使する場合と、同じ長さの言葉を紡ぐ。呟くようなそれは、彼女の高く透き通るような詠唱として静かに響き渡る。

「《幻想は雪として。煌きはしんと降り注ぐ》」

響き渡るが、咲良にはなにも出来ない。魔力が枯渇したことにより、立つことすらままならない。ゆっくりと、膝をついた。ぼやける視界。身体が傾いだ。

そんな彼女にも関係なく、詠唱は続いていく。

「《そして降り積もるそれは、全ての思い出を塗りつぶすように》」

術の名などない。つけるのも滑稽だ。ただ、それは美しく。詠唱

の通りに、純白の結晶が降り注ぐ。それはゆっくりと、しかし次第に激しく、やがては豪雪となって。

「《冷たい雪は空気を凍てつかせ、廻り回る針は動きを止める》」

彼女の吊り上げられた真っ赤な唇の端から、妙に切なく吐息が洩れた。

「《 止まった針が時を刻むことは叶わず。ただ、冷たいこの地の時は止まる》」

ピシリ。そんな音を立てて、真白の雪が降り積もるコロシアムの時は止まった…。

「動かなくなりましたね。時が止まれば、仕方がないことですが。……何はともあれ。これでああなたの敗北は、決まったようなものです。時が再び動き出した際、あなたへの精神的ダメージは計り知れませんから。せいぜい、冷たい悪夢の中でもがいてください」

今までの冷たくも魅力的な微笑みを消し、無表情に戻った雪音。だが、小さく呟いた彼女は、確実に喉の奥でくっくっく…と笑い声を洩らしていた。

昔から、人と打ち解けるのは得意ではなかった。

幼少時代、友達など皆無。仲間に入れてもらうことは出来ず、それどころか話を聞いてくれる人物さえいなかった。それは、親さえも同じだ。

少しばかり良い家系に生まれ、過剰な期待をされ、自身の持つ“人見知り”でも言うべき気性のせいで避けられ、孤独を強いられた。彼女は正直、幼いながらに絶望していた。皆から避けられることに、ではない。この現状に対して何も出来ない人見知りな自分である。悲しい……悲しい幼少時代だ。

だが、そんな彼女にも、一つの“光”が出来た。すでに見捨てられたと思っていた親に、一つだけ感謝出来るとしたら、この“光”と引き合わせてくれたことに、なのだろう。

“光”と出会ったのは、彼女が五歳の時。代々、“光”が属する家系に仕えていた彼女の家系は、歳の近い子供を従者として主側の家系に差し出す。その差し出された子供が彼女であった。

その非社交的な性格のせいで親にも見捨てられていた彼女だったが、その日、“光”の従者として対面した時、思わずハツとしてしまった。なんて綺麗な瞳だろうか、と。金色に染まったその瞳は、何故か彼女を救ってくれると、そう感じさせてくれた。

『“さくら”だったっけ？ 父さんからキミの名前、聞いたよ。オレは昇雅っていうんだけど……まあよろしくね』

もじもじと何も言い出せない少女に、なんの躊躇いもなく話しかけたのも、彼女にとっての“光”である彼だった。しかめっ面だったはずの表情に、ふっと浮かべられた微笑みには安心させられたものだ。いつもならば無視してしまい、やがては飽きられて孤立してしまう……今回もそうなる、と漠然と思っていたのに、何故か今回

は顔を耳まで真っ赤にしながらではあるものの、受け応える事が出来た。安心できるその微笑みに、心が和らいだのかも知れない。

『あつ、あの、えと、こ、こうがくん……よ、よろしく！ お、おねがいします…』

『別に呼び捨てでいいって。そのかわり、オレもさくらって呼ぶから』

そうは言うが、自分は従者だ。本当は、すらすらと敬語で接することが義務付けられているのに、それは出来ない。そのうえ、呼び捨てなんて……そんな葛藤が、彼女の中で巻き起こった。

『え、で、でも…』

『ああ、従者とか？ いいって、そんなの。どうせ、オレもお前もただの人間さ。だから従者とか関係なく、オレの友達になってくれると嬉しいな』

今の晃雅からは想像もつかないほど純粹に、屈託の無い笑みが零れた。なんだか嬉しくなって、咲良は今と同じように柔らかく、ふんわりと笑って、元気のいい返事をするのだった。

『うんっ！ よろしくね、こうが！ わたしのおともだち！！ えへへ』

…

……

……

白い。なぜか、真っ白な中に自分が一人、身体を持たない意識だけの状態で漂っている気がする。

手持ち無沙汰に漂う中でなんとなく思い浮かぶのは、あの日の幼馴染。初めての“おともだち”が出来た日のこと。そして今は、一人の男性として意識し始めていることに、彼女は気付いていた。これが恋なのかな、と思ってみては悶え、『晁雅はお友達』と心の中で連呼する。こういう時、顔が真っ赤になるのがたまらなく嫌だった。

だが、それはそれで思春期特有の悩みとしてむしろ幸せなことだ。真っ赤になるのも、恥ずかしくなるのも、意識しすぎて悶えるのも彼女にとっては嫌だったが、何故かふわっと優しい気持ちになって、柔らかく笑みを浮かべてしまう。

私は、幸せだなあ。あの日、晁雅と出会えてよかった。

穏やかに、心の中で呟いてみる。なんとも言えない幸せに、心が優しく包まれた感覚を覚える。

幼馴染とよろしく、と笑いあったあと、それは大変だった。晁雅が魔術を使えないことが判明し、迫害され、だからこそ自分は魔術に真剣に取り組んだし、晁雅はいろいろな努力をしてきた。それを、彼女は精一杯応援し、“おともだち”を決して見捨てず、ほぼ一日中を共に過ごすようになった。

『オレはいつもさくらに支えられてるけど、いつか、オレもお前を支える。……全力で、キミを護るよ』

そんなことを言われたのは、いつのことだろうか。とにかく、随

分昔のことだったのを覚えている。まだ自分のことをさす代名詞が“お前”だったり“キミ”だったり落ち着かない頃なので、おそらくは小学校高学年ぐらいの時分か。すでに成長した今なら、これほどまでに恥ずかしいセリフを吐けるはずもないので、正しい記憶だろう。

なにか恥ずかしくも嬉しいセリフを言う時には決まって“キミ”と呼ぶので、どこかそう呼ばれるのを心待ちにしていた時もあったかと思うと、今でもどこか恥ずかしい。悶える。

今、ここがどこで、なぜ意識だけがふよふよと漂っているような感覚に陥っているかは不明だが、とにかく嬉しくて恥ずかしかった意識だけが漂う“今”で、表情を変えられているのは分からないが、とにかく赤面した。

楽しい？ さくら。

不意に、声が届いた。誰だろう、彼女はあるのか分からない首を傾げる。どこか幼さを残す少年の声だった。かなり聞き覚えがあるのだが、誰なのかわからない。

聞こえないか。なら、さくらのとこまでオレが行くよ。

子供の声は、だんだんと近づいてくるように感じた。咲良は、さらに疑問を覚える。漂っているだけしか出来ないと思っただのに、なんで動けるのだろう。

そんなことを考えている間に、少年は目の前に迫っていた。黒い髪、金色の瞳をもつ、小学生ぐらいの男の子がそこにいた。



「……へえ、五年でこんなに大きくなるんだ。胸とか」  
「ひえ?! あ、あの、晃雅、なの?」

いつの間にやら身体感覚が戻っている。彼女は、漂っているのは意識だけだと思っていたのだが。

「そう、オレは晃雅だ。お前から見たら、昔のオレだけだな」

慌てる彼女に、“晃雅”は子供らしく無邪気に笑ってみせた。……ただ、どうにも意地が悪く、なぜか彼を纏う雰囲気か淀むを感じた。

「ああ、そうだ。さくら、オレさあ、昔っから言いたいことがあったんだよね」

「い、いいいたいこと?」

「そう、言いたいこと」

さらに淀む。なんだろうか、この違和感は。

そんな違和感を覚えて引き攣った表情になっている咲良を気にもせず、“晃雅”はニヤリと口の端を吊り上げて、普段からは信じられない言葉を言い放つ。

「いい加減、邪魔なんだよね。お前」

「じゃ、ま…?」

「そうだよ、なにがお友達だよ。魔術の使えないオレの近くで魔術の練習して、魔術以外の努力をしてるオレを嘲って、そんなに楽しいか?」

一歩、また一歩と、“晃雅”は咲良の方へ歩を進める。触れられ

れば、何かが終わる……そんな危惧を咲良に抱かせた。

「嘲ってなんか……！」

「何言ってるんだ？ 嘲ってるじゃないか。支えてるフリして、オレの近くでこれ見よがしに魔術使ってるさ。オレ、いい加減うっとうしく思えてきちゃったんだよね。どっか行って欲しいって言うか」

悲しい悲しい悲しい。晃雅に、こんな風に思われていたなんて。負の感情は、スパイラルを起こす。

そんな彼女を嘲うかのように、“晃雅”の身体が一気に今と同じ大きさまで成長する。吐き出される声も、幼さが消えて落ち着きを見せる、が、辛辣さは変わらない。

「消えてくれ、咲良。さつさと負けて、俺の前から消えてくれ。…

…それが俺の望みだ」

「い、や……いやだよ……」

目元から、なにか熱いものがこみ上げてくる。どうしようもなく熱いのに、中々零れ落ちてこないそれは、非常に鬱陶しかった。

もやもやする。そしてなにより悲しい。どうせなら、溢れ出してくれればいいのに。なぜ、目元に留まるのだろうか。

「泣き落としか？ そんなものが俺に効くとも？ とんだお笑い種だな。俺は、一人が好きなんだよ。お前は、必要ない」

“晃雅”の手が咲良の腕を掴み、捻り上げる。

「いたい！ やめて……！」

「痛いかな？ そうだろうな。わざとだ。そんな痛みを、俺は受けてきたんだ、心にな。だから、消えろ」

「こ、こうがあ……いたいよあ」

零れた。滞留していた涙が。

悲しかった。信頼していた晃雅から受ける、この仕打ちが。

やりきれなかった。晃雅の傷に、気付くことが出来なかったなんて。

自分のやってきたことは、ただの自己満足だったのだろうか。彼を支えることなど、出来ていなかったのだろうか。自分は、邪魔だったのだろうか。……消えた方が、いいのだろうか。彼の前から、消えた方が、いいのだろうか……。

……  
……  
……

『違っつ！ 咲良！ 消えないでくれ……俺にはお前が……“キミ”が必要だよ。咲良、目の前にいるのは、俺の偽者だっ！！』

響き渡る、必死な声。いつもの泰然とした様子からは想像もつかない焦燥を滲ませているものの、それは確実に晃雅の声であった。

『目を覚ませ。咲良は、頑張ったよ』

優しい声……安心するなあ。咲良はそんなことを思いながら、近くに感じる本物の晃雅の方へ、身を委ねた。

「……趣味が悪いですよ、北川先輩。咲良を殺すつもりでしたか？」

咲良が目を覚ますと、なぜか晁雅の腕の中にいることに気がついた。以前、転びかけた時と違い、いきなりだったのでかなりの赤面モノだが、真剣な表情で北川 雪音を睨みつける晁雅に、気持ちだけが冷静になる。

「殺す…？ そんなことをするはずがありません。私は、北川家の権威のために、この全魔戦で優勝しなければならぬのですから。殺したら、反則負けになるでしょう？」

「そういう問題か…！」

珍しく激情を見せる晁雅だったが、途中でその怒気も和らいだ。いや、押さえつけた、と言った方が適切か。

一つ、あるかなきかの小さい…しかし感情の籠った溜め息を吐き出し、深呼吸をして言葉を続ける。

「……北川家の者が冷酷なのは知っています。それは、天城寺を潰して、のし上がるためであることも。落ちこぼれの俺が“上原”という優秀な血をもつ咲良と共にいることを、あなたが不快に思っていることも知っています。だから、負けでいいから……咲良には、手を出すな」

キツと睨む。だが、そんな睨みに全く怯まず、彼女は背を向けて歩き出す。ロシアムにはもう用はない、とでも言いたげだ。

それと同時に鳴り響く放送からの声。学院長秘書、谷口 真樹だろっ。

『部外者からの介入があったため、Cブロックは上原 咲良の反則負けとします。勝者、北川 雪音!』

放送が終わると同時に、雪音の背は見えなくなった。

「晃雅……勝てなかった」

未だ晃雅の腕の中、申し訳なさそうに告げる。

「ああ、あれはしょうがない」

「夢の中の晃雅を、怖いと思っちゃった。ほんとは、すっごく優しいの」

「そう信じてくれるなら、俺は嬉しい。……今まで、俺は支えられてきたんだ。感謝してる。咲良がいなかったら、俺は孤独で潰れてたよ。だから……」

この先だって、ずっと俺がキミを護ってみせるよ。

いつも支えてくれてるんだ、せめて恩返しをさせてくれ。と、そう続け、髪をくしゃっと掻き混ぜる。そうされた咲良は、どこか安心したように、少し……泣いた。

ああ、俺って最近…

晁雅が、試合で疲労した咲良を休ませようと、自室へ向かっている時のこと。

Aブロック第六回戦。それを行うためのAブロックコロシムに、二人の少年がなぜか双方共にダルそうに立っていた。

一人は癖のある栗色の髪をいじりながら溜め息をつき、もう片方は耳についた派手なピアスをそつと撫でながら生気のない瞳を相手に向けていた。分かる人には分かるだろうが、“空間魔術師”のいつかと、“いじられ役”の海斗だ。……海斗の紹介が適当な気がするものの、突出しているプラスの才能が他に“ツール作り”しかないのだから仕方あるまい。

地の文にすらもいじられている憐れな海斗は、そんな考察がされているなどとは夢にも思わず、ただテンションの低い表情でいつかと相対す。

「……勝ち目、ねえよなあ」

思わず、呟きが洩れた。海斗の初戦の相手が、空間魔術という希少で高度な魔術を使ういつかだということに、すでにやる気をなくしているようだ。勝ち残り戦を、爆発ツール乱用という強硬手段でなんとか乗り切った海斗だったが、レベルの高い空間魔術を使ういつかが相手となれば、そのいつものテンションが下がってしまうのも仕方のないことなのだろう。彼の場合は、課題の免除もかかっていたのでなおさらだ。

とはいえ。どちらにせよ、トーナメントで勝ちあがれば、御尊四

家という強大な敵とかち合うことになるのだ。幸い、Aブロックには御尊四家の者はいないものの、晁雅もいるブロックなので、やはり海斗に勝ち目はないのだろう。その答えまで自分で辿り着き、海斗はもう一度、深い深い溜め息をつく。

完全に学院側に踊らされたな……。無理ゲーなのに、期待しちまった……。

第一、このトーナメントで優勝するほどの猛者……。つまり、御尊四家ならば、大抵の者は課題などに苦労などするはずもない。唯一の例外として、めんどくさがりな東條 仁がいるが、彼も課題など苦することなくすらすらと消化してしまうだろう。まあ、課題免除で大喜びすることに変わりはないのだが。

それでもこの課題免除が、海斗のような本当に必要な者に、恩恵を与えることはないワケで。この辺り、学院の、生徒の扱いの上手さと、あくどさが垣間見る事が出来た。

そんな学院のあくどさに、海斗の溜め息は絶えない。文句の一つも言いたくなるというものである。幸い、目の前に文句をぶつけられる仲間がいるではないか。試合が始まるまで、愚痴を言わせてもらおう。

「なあ、いつかア。学院側のあくどさってのはホント、どうにかならね」「うるさい、僕はいま不機嫌なんだ」……「さいですか……」

だが、その試みは盛大に失敗したようで。海斗に負けなくらい低いテンションで、言葉を遮られてしまった。いつかの溜め息も、絶えない。

しかし、妙である。彼に消化困難な課題などない。海斗に勝つの

は大した労力も消費しないだろうし、御尊四家とかち合い、勝ち進むのが難しいことを予測するのは、彼にとって“予測”というもおこがましいほどに当然のことであったはずだ。ならば、何を意気消沈する必要があるのか。本当に妙であった。

そして、そこに疑問を持つのは海斗も同じだったようで。

「フーかよ。なーんでお前はんな不機嫌なんだ？俺みてえに、課題免除の慈悲が所詮ただのエサだって今さら気付いたわけでもねえだろうに」

「わ、分からないのか…？と、いうか、君はそんなくだらしないコトで意気消沈していたのか。信じられないね。僕の不機嫌は、君なんかとは質が違うよ」

言いながら、洩らす溜め息。それは、海斗などより実に感情が籠っていて、どこまでも悲しい、悲壮の香りが漂っていた。生気のまるでない栗色の瞳は、まるで死んだ魚の目だ。

「質、ねえ。んじゃあ、参考までに訊くけどよオ。そのテンションの低さの理由、教えてもらっていいか？」

試合は始まる直前だが、その理由くらいは訊く時間はあるだろう。そう思っつて、海斗は質問してみた。いつかのテンションが低い理由それは一体なんなのか。

そしていつかは口を開く。その唇の隙間から魂が抜けていくかのように、小さな呪詛のような呟きで、言葉を紡ぐ。

「高峰さんだよ…」

「ゆあちゃん？ケンカでもしたのか？」

「違っつー！…！」



大きな声で否定。先ほどまでの呪詛のような呟きが嘘かと思うよ  
うな、激しい否定だ。それだけ、彼女とケンカなどしたくなかった  
のだろう。酷く顔色が悪いので、彼女とケンカしたらどうなるかと  
想像してしまったのかもしれない。

そして、そんなヒステリックなテンションのまま、言葉が続ける。

「違うんだよ！ 僕はね、永崎の試合も、上原さんの試合も、もち  
ろん高峰さんの試合だって頑張つて応援してたんだ！ 魔術を使つ  
て、君たちに音まで届けただろう？ なのに！！ 僕たちの試合を  
観戦する仲間がいないとはどういうことだ！！ あの高峰さんまで  
『次の試合の準備』とかで見てくれないし…… タイミングが悪すぎ  
るぞ……」

叫ぶいつかに、海斗は思う。

そんなことか ああ ああ ああ ！！！！

「意味わかんねえよ、しょうがねえじゃん、次の試合あんだから！  
咲良ちゃんだってなあ、疲れてんだからしょうがねえ！ どーせ  
崎ちゃんも付き添いだろうしさア！！ んなことでテンション下げ  
てんじゃねえよ、鬱陶しい、ただでさえこっちのテンションは低い  
のに、さらにそれを助長してんじゃねえよおお！！」

海斗の叫びはまだ続く。いつかの状態でさらにテンションを下げ  
させられたと主張する彼は、そんな主張が嘘としか思えない大声で  
いつかに対して叫ぶ。

……それが、彼にとっては命取りだった。

もともと、試合開始直前だったのだ。いつまでも海斗の叫びが終



……と、ここで、いつかが片手をこちらに向けていることに気がついた。

「あ、あれ…？　なんで片手こつち向けちゃってんのかなあ？　ちよーっと、怖かったりするんだけども？　も、もしかして試合始まつちやたりして…？」

「始まつちやったりしている。残念だったな、吉井クン？　」

我、支配せし空間を開放す」

ニヤリ。笑みが零れた。あくどい笑みだった。いつもの晃雅に負けないほどの、あくどさだった。

ああ、俺って最近、こーゆー笑いしか見てねエわ

巻き起こる“火を伴わない爆発”のなか、海斗の心の中では、そんな悲しい言葉だけがくつきりと残っていたという。

## うん、相変わらずだね

杉山　いつかがあっさり吉井　海斗を倒し、勝ち進んだ頃。演技とはいえ、仲間の誰も応援に來ないことを嘆いていたいつかの想い人である高峰　ゆあは、寮部屋で一人、自身の得物を念入りにチエックしていた。

この全魔戦、今までに武器を使用する生徒は描写していなく、実際に武器を使う生徒も少ないのだが、実は武器の持ち込みが可能である。もちろん、それによって相手に致命傷を負わせれば罪にも問われるので、あまり殺傷能力の高い武器を持ち込む者はいないのだが、武器の種類は無制限だ。

今までに、剣や槍に魔力を纏わせるエンチャンター魔纏士とでも言うべき生徒もトーナメントには数名が出場している。武器に魔力を纏わせることで威力を調節し、あえてナマクラにして打撃を加えたり、逆に威力を高めて同じく武器を持った生徒の得物や、土魔術で作られたゴーレムを破壊したりなど、なかなか便利な魔術である。しかも纏わせるだけなので、魔術としては簡易的なものとなり、他の属性魔術などを同時行使できることも大きな利点と言えるだろう。

しかし、もちろんこれも“魔術”であるので、詠唱が必要になる。詠唱が必要となる魔術ということは、晁雅にも行使不可能ということだ。魔力を噴出することは出来るのだが、纏わせるように自由に動かすことすら出来ないのが彼の魔力。噴き出そうとすれば、それは全身から溢れ出し、意図せずに渦巻いて再び彼の中へと還るのみ。晁雅にとって、魔術師となる最後の道であった魔纏士への道も、七年前に潰えた。

## 閑話休題。

上記で説明した魔纏士エンチャンターであるゆあだが、彼女の試合はもはや十数分後に迫っている。得物の点検も、最終確認といったところだろう。左右の手に収まる小振りの筒をガチャガチャといじくり、どこか気難しい表情を浮かべている。

「なーんで、御尊四家と、こつも早くあたるかなあ。咲良なんか、初戦だったし。もう、なにかの因縁があるとしたか思えないよ。学院長の息子……えーと、東條 仁だっけ？ その人も同じBブロックらしいし。ホント、運ないよ」

そう、彼女の次の試合相手は、御尊四家が一角、南原家の者なのだ。名を、南原みなみはら 有流人あると。学院の二年生である。

御尊四家の中でも特に“お坊ちやま”と言うに相応しい待遇で育ててきたらしく、そのせいか、御尊四家の子女のなかでも特に我がままで傲慢、『この世の中心は俺だ！』というような思想の持ち主らしい。他の御尊四家も多大なる権力を持っているし、さらに権力を持つ天城寺家もあるが、その子女でさえ、ここまで我がままな性格を持つ者はいないだろう。あの北川家でさえも、その性質が冷酷なまでに高い上昇志向の持ち主というだけで、物事をしつかりと考えた上で、自身のやるべき仕事はこなしつつも目的を達しようとする者が多いので、我がままというには程遠いと言える。その残酷さに目を瞑れば、非常に有能な家系である。

ちなみに、捕捉しておくが、東條家の者は総じてめんどくさがりだ、おおらかな気質の者が多く、西藤家は基本的に穏やかで優しいが、頭のいいキレ者が揃っているとか。

その事実を考えると、ゆあはさらに不幸なのかもしれない。“冷酷”な北川家とあたった咲良の凶運も嘆くべきものだが、彼女としては“我がまま”な南原家とあたった自分は、さらに運が悪いので

は、と思っている。

「……どうせあたるんなら、東條クンのほうにあたればよかったんだけど。あっちなら同学年だし、永崎くんが言うには結構話も分かるほづらしいしね。手加減は絶対にしてくれそう。てか、楽に勝とうとするだろうし、本気は出さなそう」

このような嘆息は絶えない。どうやらよほど南原家とあたるのが嫌らしく、先ほどからひとり言がずっと続いているのだ。心なしか、憂鬱で暗い雰囲気纏っている気がする。

それには理由があるのだが、彼女にとっては思い出したくもない記憶だ。ただ、南原家の者に……いや、“南原 有流人”には、もう二度と会いたくなかった、とだけ言っておこう。

そんな陰鬱な空気が流れるこの寮部屋にも、空気を換えてくれる訪問者が現れた。ノックのあとから聞こえてくるのは、自身の大事な親友と、その幼馴染という少年であろう声。二人仲良くと言うべきか、同じような言葉を同時にかけてくる。

「「ちょっと、試合前の声援を贈りに来た（よ）」」

やはりこの二人は息が合う。そのように、ちょっと呆れたように笑い、暗い雰囲気を払拭するように、サイドポニーに纏めていた髪を下ろし、扉を開ける。

開けた先には、案の定、咲良と晃雅が。先回の試合直後、観客席から見ていたところでは、咲良は泣いていたように見えたが、どうやら収まったようで今はいつも通りのふわっつとした笑みを浮かべている。それと一緒に、いつも通りにしかめられているくせに、どこか優しいな晃雅の表情を見て、なんだか気分がほのぼのしてきた。

「うん、相変わらずだね」

その言葉が相応しかった。相変わらず、二人は仲がいい。幼馴染ということも考慮しても、相性ぴったし、といった雰囲気にも包まれている。

「なにが相変わらずなの？」

「へ？ ううん、なんでもないつ。ただ、仲いいなあ、ってさ」

「うん、仲いいよ。晃雅は幼馴染だもん」

嬉しそうに話す咲良の頬に差す朱色。彼らが言う“幼馴染”という関係にも、少しは進展があったのか、と邪推してしまうくらいには“恋する乙女”な表情に見えたが、どうなのだろうか。

しかし、そんなゆあの期待には全く応えないのが、永崎 晃雅という男である。咲良の部屋でもあるこの寮部屋に入って最初に彼が目をつけたのは、咲良の私物などではなく、ゆあの机の上に置かれた小型の筒 つまり武器であった。

確かに、幼馴染として咲良の私物などほぼ把握しているのかもしれないが、それでもなくとも想い人（と、ゆあは思っている）の部屋であるのに、目をつけるのが武器とは、なんだか拍子抜けで味気ないことだった。

「あれが……高峰の得物か？ 魔纏士エンチャンターだったんだな？ 訓練の時は、使ってたかったみたいだけど」

「あー、うん。これの訓練より、普通の属性魔術を練習しておきたかったから」

訓練時、乗り気でなかった晃雅が、始めた途端に豹変して鬼教官になったのも、今はいい思い出である。そういえば、あの時はいつかが参加していなかったようだが、彼は何をしていたのだろうか、

とゆあが考えている間にも、晁雅の質問は続く。どうやら、この小型の筒の形をもつ得物に興味が尽きないようだ。

「魔銃、だよな？」

小型の筒……その黒光りする重厚な小銃を指さして言う。

「エンチャンター魔纏士の中でも珍しい装備だな。……俺たちの着る衣服は銃弾を通さない。着用するだけで、生地に覆われていない部分だって魔力の膜で護られる。だから、いまや銃を使う者はだいぶ少なくなつたと聞いていたが……」

晁雅の言う通り、現在の軍隊は銃などの近代兵器はあまり好まれない。確かに、魔術のように詠唱を挟まず、ワンアクションで攻撃できるのはかなりの利点ではあるのだが、銃弾の補給面や、銃弾を通さない服の普及という問題などもあり、使う者は極少数となつたのだ。銃弾が有限なのに対し、魔力は回復するという面において無限であるとも言える、という事実も、銃が好まれなくなつた理由なのかもしれない。

しかし、彼女はその銃を使う。そもそも、銃弾に魔力を付与するエンチャンター魔纏士　魔銃士とも言うべき者たちは、銃弾に魔力をしっかりと固定しなければならぬという点において、非常に少ないのだが。それでもゆああの得物は魔銃であつた。

「そうだね。うん、魔銃を使つてる人なんて、数えるくらいしかないよ。でも、私は普通の魔銃士とはちよつと性質が違つてね。多分、エンチャンター魔纏士とは言い難いんだろうけど、私は銃身に魔力を込めるんだ。実はコレ、武器型のツールでね？　魔力を込めると、銃弾の形に固定化させてくれるんだよ」

「つまり、打ち出すのは純粋な魔力というわけか。随分使い勝手が



いいツールだ。……うん、良作だな」

カチャリ…という音をたたせながら銃型ツールを一通り観察し、ゆあの手に戻す。

「次の試合は南原だったな。難儀なヤツって噂だが、まあ頑張れよ」

ついでに、激励の言葉も一つ。今回この部屋を訪れた、最初の目的を思い出したのだろう。先ほどまで武器に興味を示し続けていたので忘れがちだが、晁雅たちは彼女に声援を送りに来ていたのだ。

「私からも応援するよっ。たぶん、杉山くんたちの試合も終わってるし、音も送ってもらって観戦するね！」

晁雅の激励に、思い出したように咲良も追従する。柔らかなその笑みは、御尊四家と対戦するという恐怖、そしてその相手がよりもよって南原 有流人だという事実への不満を少し忘れさせてくれるような笑みだった。

「うん、そうだね…！ 頑張ってみるよ！ そろそろ試合開始だから行くけど、応援よろしくっ！」

右手でサムズアップし、無邪気な笑みを見せる。晁雅と咲良も穏やかに笑んでサムズアップを返す。

そしてゆあは、応援の二人を伴って、Bブロックのコロシアム……試合会場へ向かうのだった。

## 後悔させてやるっ

Bブロック、トーナメント第十回戦。ブロック内の一々八回戦を勝ち進んだ八名の中で、二回目にあたる試合だ。御尊四家の者が二人いるせい、他のブロックはまだ八回戦を終えてもいないのに、ここまで進んでいるのである。

ちなみに現在は、Aブロック第七回戦終盤、Bブロック第十回戦直前、Cブロック第八回戦中盤、Dブロック第九回戦直前、といったところだろう。Bブロックの、試合消化の速さが窺える。

そんなBブロックの第十回戦に出場する選手、高峰 ゆあは、目の前の一年先輩の少年と相對していた。南原 みなみはら 有流人 あると。御尊四家の一角、南方を守護する家系の御曹司である。

「それで、答えは決まった？」

癖のある黒髪と、黒い瞳のその彼、意外と整った顔立ちをしている。だが、その性質はワガママ。それに尽きる。大きな欠点だ。

「最初から、嫌って言うてるじゃないですかっ！」

どうやら彼は、彼が以前、ゆあに問うたであろう何かの問いに対し、Yesを求めているらしい。ゆあがあれほどまでに有流人との対戦を嫌がっていたのも、彼にこの問いの答えを、ひいてはYesを求められるからだろう。

なんでも、以前に廊下ですれ違った際に、一目惚れされたとか。そして、一も二もなく告白。もちろん断ったのだが、『いやだな、

照れ隠しか？ 素直になりなよ』などのたまい、それからというもの、会うたびにYesを迫ってくるようになったのだ。

……ゆあが避けるのも、無理はないだろう。

「ふふ、また照れ隠しか？ 可愛いな。でも、さすがにそろそろYesをくれないと、俺、怒っちゃうかもね」

「私には恋人を選ぶ権利もないんですかっ？！ あなたとは嫌です、そうきっぱり断り続けていますっ！！」

綺麗な弧を描く眉を盛大に顰め、大きな声で言い返すのだが、それでもワガママな有流人には通じないらしい。

必死の抗議も意味をなさず、彼は『そうだ、いいこと思いついた』と、ゆあの否定を受け入れずに自分勝手な提案をする。

「俺がこのブロックのトーナメントで一役になったらさあ。そして俺と付き合いなよ。さすがに、そうになったら俺に惚れてくれるよね？ そうに違いない。よかった、それなら俺と君が付き合い可能性は100%だね」

随分、傲慢な物言いだ。そして、“ゆあが自分に惚れる”と、信じて疑ってもいないらしい。どうせなら、“ブロックを勝ち抜いた四人で行われる一位決定戦で優勝したら”とさえばいいものを、“冷酷”や“キレ者”な気質の北川家や、西藤家に勝つ自信はないらしく、ブロック限定にする小物ぶりを発揮しているというのに、傲慢なヤツである。

そのうえ、“ものぐさ”な東條家すらも見下しているようで、ブロック優勝を確実なものとして見ているという、その奢り。どこかで必ず、痛い目を見るだろう。

「い、いやですよ…。私は、あなたとは付き合いませんっ！！」

「だから！ 照れ隠しはもういいって。……でもまあ、すぐに試合は始まるしね。抗議は、受け付けないよ。君と付き合うため、まずは君を倒してあげる」

Bブロック第十回戦、始めっ！

彼の言葉と同時に鳴り響く放送。Bブロックトーナメント・第十回戦目は、ゆあへの否定を待たずに始まってしまった。

変化は、すぐに起こった。詠唱が必要とはいえ、ゆあへの魔銃はほぼワンアクションと言っていいスピードを誇る。一言、『装填』と告げるだけで八発の銃弾を打ち続けることが出来るのだ。ゆあへの武器は速さと言っていいだろう。

銃弾を放ち、ゆあは即座に上位魔術の詠唱を始めた。無論、銃弾を装填し、放って牽制をする間にも、詠唱は出来る。御尊四家には……特に、ワガママに育てられた有流人には、魔術の才能はあつても運動能力には乏しいと踏んだ彼女は、魔銃での牽制で十二分に時間を稼げると読んでいたし、その間に完成させるロングスペルでの上位魔術ならば、いくら御尊四家といえども大きなダメージを与えられるだろう、そう考えての行動だった。

だが。御尊四家が、そう簡単に手玉に取られるはずはないのだ。端的に言えば、最初に放った銃撃から無意味だったと言ってもいい。本来、魔力の込められた魔銃の銃撃ならば、通常の銃弾を通さない服をも突き抜けることが可能だ。幾分、威力は衰えるものの、直撃すれば激痛に見舞われるはずである。

それなのに、有流人は全く動揺した様子なく、その銃弾を受ける。また、それによって苦悶の表情を浮かべることがもなかった。

「『c a p p o』<sup>カーボ</sup>」

ただ、ゆあの銃弾を受けながらたった一言、彼は告げる。それだけで彼らの御尊四家の魔術は、通常生徒の上位魔術に値する力を発揮できる。

よく、楽譜で『初めの意』を示す言葉として使われる単語。それで有流人の魔術は始まった。

音魔術。それが、彼の扱う特殊魔術の名だった。

始まりと同時に、ゆあは声を失う。彼の音楽の始まりに、他人の演奏は要らない。そう告げるように。

歌うように紡がれていた長文のルーン詠唱が、ぴたりと止んだ。

「いけないなあ。いきなり俺にそんな武器を向けてくるなんて。それ、普通の服を着てたら結構痛いよ？」

詠唱が止んだことで、有流人は余裕を得たのだろう。下卑た笑みを浮かべ、嬉しそうに話しかけながら、ゆつくりと距離を詰める。

だんだんと近づいてくる有流人に恐怖を抱きながらも、ゆあはなにも出来なかった。ただ、『普通の服ではないのか、制服着用義務があるのではないのか』という非難の意味を込めた、憎々しげな視線、それだけを送り続ける。

「んー？俺の服が、どう違うのか気になるって？しょうがないなあ、そんな可愛い瞳で見つめてくる君になら、特別に教えてあげよう。つつても、大したもんでもねえんだけどねえ。実はこの服

さあ、ウチで最近造られた服だね。純粋な魔力は全部吸収しちゃうように出来てるんだ。もちろん、許容範囲以上の魔力を浴びればダメージはこっちにくるけどー、まあ君の魔銃程度じゃ、絶対に通さないよね。ちなみに、武器と並んで防具の着用も許可されてるから、反則じゃないよ？ 理解、してくれた？」

べらべらとよく喋り、抜け目のない釘刺しも忘れない。完全に、勝ったつもりでいるだろうし、実際にその通りになると、誰もが当事者であるゆあさえもそう予想した。

否、せざるを得なかった。

「じゃあ次。抵抗しないみたいだし、ちょこつと調教しながら先に進むとしよう。始まりと同時に終わっちゃ、つまらないもんね」

そう言って、彼はクヒヒと笑う。趣味の悪い笑みだった。ひとしきり笑い、その表情を貼り付けたままに、有流人はゆあに手を向けた。

「グラウエgrave」

音楽用語で、重々しく。その言葉の意味とはかなり解釈の仕方に違いはあるものの、その魔術は、重力を操るものだ。これは、魔術が魔術師本体のイメージに左右されることに由来するのだが、それは、今は些事と言っていいだろう。何故なら、ゆあの身体は実際に重力の影響を今までよりも大きく、感じる事となったのだから。膝を伸ばして立つこともままならなくなり、ついに片膝をつく。ゆあは、震えるように下を向きそうになる頭を、必死に前へ向け、ただ、目の前の有流人を睨んだ。

「おほお　いい目だよ、ゆあちゃん。もっと抵抗してくれ、もっ

と敵対心を見せてくれっ！ それを服従させるのが、なにより楽しいんだっ！！」

狂気を孕んだ瞳。剥がれ落ちない気味の悪い笑み。それに、ゆあは恐怖した。この人物に、自分はなにをされるのだろうか、と。この人に、抗う術はもうないのか、と。絶望の色を瞳に浮かべそうになる。

それでも、諦めるわけにもいかない。有流人をトーナメントで優勝させるわけにはいかないのだ。自分では勝てないにせよ、少しでも有流人を消耗させ、優勝だけはされないようにしなければ、自分の自由恋愛の機会はほぼ永久に奪われるのだから。

気取られることのないよう、静かに、魔力をかき集めた。動けないわけではないのだ。声が出ない、そして身体が異常に重い、ただそれだけ。まだ、噛み付く手段は残っている。

「じゃあ、次い〜」

《カランドcalando》》

意味は、次第に消えゆくように。

言葉と同時に、ゆあがかき集めていた魔力すら、減少をはじめ。それはまさに、次第に消えゆく魔力。せめてもの抵抗にかき集めていた魔力は、あっという間に消え去った。ゆあの表情は、瞬時に青くなる。もはや、抵抗する術はない……そのような絶望すら感じさせる瞳だった。

「変に抵抗しようと、魔力を集めるのがいけないんだよ？ そんなのが分かったたら、こうやって魔力を消し去るしかないじゃないか」

そう言って、またも笑う。下卑た笑みを浮かべる彼とゆあの距離は、もうすぐそこと言えるほどまでに迫っていた。

「俺は魔力の流れを音で認識できる。魔力を動かせば、俺は知覚できるんだよ。だから、隠そうとしたって、む・だ　お分かりい？」

クヒヒヒッ！　思わず、声が洩れた。歪んだ表情に、人としての情が覗くことはない。ただ、ワガママが過ぎておかしくなった少年に、娯楽を与えるのは他人の恐怖、それだけだった。

「でも、もうそろそろ終わりにしてあげようか。抵抗の意志も消えたみたいだし？　大丈夫、抵抗してくる君も素敵だけど、従順な犬みたいになった君も、きつと可愛いから」

ほぼ魔力の枯渇した、ゆあの目の前。有流人は、そんな背筋の凍るようなセリフを傲然と吐き、お馴染みの笑みを浮かべた。そして、右手の人差し指をぴんつと突き出し、ゆあの額に押し当てた。

「ばいばい」

指先に、魔力が集中する。これで、終わり。有流人は、呆気なく済んだ試合を思い返しながら、クヒヒと笑う。洩れでた笑い声を、抑える気にはなれなかった。指だけは突きつけたままに空を仰ぎ、大声で笑いこけた。

だからだろう。ゆあの瞳に、新しく意思の光が灯ったことに気付かなかった。声の出ない喉を使って、音のない眩きを一つ。

「（魔術がないからなんなのさ。魔術に、魔術以外で抵抗してる人は、確かにいるんだ）」

勝てなくてもいい。後悔させてやるっ



勢いよく顔をあげ、ギンツと睨みを利かせつつ、身体中に力を込める。魔力なんてなくても出来る、なんてことはない“立ち上がる”という動作。ゆあにはもう、抵抗の意思はないと決め付けていた有流人には予想外の展開、完全に意表をつかれた。その隙に、彼女は渾身の力を振り絞って両手を重ねて小さなハンマーを作り、小さくでもいい、少しだけジャンプした。

そしてそのまま……。

「（くらえええつー！）」

声にならない叫びをあげ、有流人の肩口に、思い切り振り下ろした。有流人の加重魔術により、下へ向く力は一時的に凄まじいモノとなっている。振り下ろした拳は、間違いなく、有流人の肩口に綺麗にはまった。

バキッ！ 聞こえてはならない、ナニカが折れるような音。肉を隔てて響く、ソレが折れた音は、とても鈍い、ひどい音だった。……骨が、折れたのだろう。

苦悶の表情を浮かべ、声にならない叫びをあげる。それも当たり前だ。それだけの威力だったのだから。

ただ一つ、ゆあには誤算があった。その苦悶の表情を浮かべている者、それが……。

「……自滅、か。クヒツ！ その抵抗には心惹かれるけど、そーんなんじゃ俺の特注の服に衝撃を伝えることなんて出来ないよ？ 言わなかったっけ？ 俺の服は魔力を吸収し、物理攻撃はその衝撃を跳ね返す、って」

彼女自身の骨が折れた、という誤算。それが、彼女の最大の誤り

だった。有流人の防具の性能を、甘く見すぎていたのだ。

「わー、痛そうっ　んー、そうだなあ。俺も鬼じゃないし、骨を折った君を蹂躪するような趣味はないしー、終わりにしてあげようっ！　いくよ。《<sup>ファイネ</sup>fine》」

終止符。その意味の言葉告げられる。ゆあの目の前にいた有流人の指先から、終わりを告げる光の筋が、彼女へ向かって飛び出した…。

ふふふ、その子が人がかな？

指先から迸る、紫色の光。それは、ゆあを貫かんばかりに……とてもではないが目では負えない速さで彼女の額に照射された。

どこからか聞こえる、危ないっ、という声。おそらく、有流人が魔術を放つ前に、誰かが言った言葉だろう。そうでなければ、こんなにも速い魔術が当たる前に、それだけの言葉を聞き取ることはいらないだろうから。

そんなどうでもいいことを考えながら、ゆあは光に貫かれ…。

「あゝあゝ。めんどくせえことしてくれたなあ、おい。おかげで、親父にかりだされたじゃねえか」

……貫かれなかった。何者かの乱入によって。

ゆあの額近くに右手をかざす彼は、そこに真っ紅な炎を灯し、直撃するはずだった光の筋を遮っていた。

光線を遮ったその彼は、炎の灯っていないほうの手で、不機嫌そうに後頭部をガシガシとかきむしり、そこに立っていた。その身体は、薄く炎を纏ったかのように揺らいでいる。後ろから、ぼーっと見るだけでも、感嘆の溜め息をこぼしたくなるような、見事な金色の髪を持ち、ゆあから見える後ろ姿は、どこまでも頼れると錯覚を起こすように、広い背中が印象に残った。

前から見れば、鮮やかな碧い瞳を認識することが出来たであろうこの少年。名を、東條 仁という。今代学院長の、一人息子である。

いきなり現れた仁を、有流人はなにかおかしなモノでも見たかのように驚きの表情で見、狼狽する。その表情に、今まで浮かべられ

ていた、下卑た笑みは存在していなかった。

「だいたいよお、全魔戦ごとき子供の遊びで、こんなふざけた魔術使ってんじゃないよ。使ってたら、この先ずっと、彼女は魔術を使えなくなってたぞ？ 相手を救い出す俺の身にもなってみやがれ。非常にめんどくせえぞ、どうしてくれる、そうだ、次の試合でぶっ飛ばしてやろうそうしよう。覚悟はいいな？」

学院長と同じく、めんどくさがりではあるのだが、自分の平穩で楽な生活を潰された恨みは、必ず返す主義らしい。随分挑発的な態度で、有流人を睨めつける。

それに若干の恐怖を抱いたのか、有流人は些か慌てたように背を向けた。

「ふっ、どうせ、君は問題なく倒すつもりだったさ。この勝負も、君の乱入でゆあちゃんの反則負けだしね。俺の勝ちだ。優勝は、もらってくよ。そして、ゆあちゃん、君のこともね」

そっさい残し、有流人はコロシウムから去っていった。

その、仁から逃げるように去ってゆく彼を見届け、ゆあはやっと安心したような溜め息をついた。恐怖から解放され、緊張も解けたのだらう。

そんな様子の彼女に気付き、仁は大変めんどくさそうな表情を浮かべながらも、ぱっと手を振って回復魔術を発動させ、彼女が立ち上げられるように手を差し出す。

「おい、だいじょーぶか、あんた？」

「ひゃっ！ えと、あの、うん。だいじょーぶ…だよ？」

「ぶらっぶらじゃねえか。大丈夫そうに見えねえよ。ほら、手えつ

かめつて。ずっと差し出してんのもめんどくせえだろうが。折れた骨だつて、一応治したしな。もう、痛くねえだろ？」

そう言つて、仁はゆあ目の前で、自身の右手をぶらぶらと振るう。ゆあは、その手を恐る恐る、と言つた具合に握つた。本当に、痛みは感じなかった。回復魔術は、希少な“特殊魔術”の一つに数えられるのだが、仁には行使可能なようだ。しかし、彼曰く『回復魔術についてあ、西藤家のヤツらにはかなわんよ』だ、そうだ。どうも彼は、最低限の回復魔術しか使えないらしい。

### 閑話休題。

彼の手を握つた瞬間に、ぐいつと引つ張られ、あつという間に立ち上がってしまう。勢いあまつて、彼の胸に飛び込みそうになるのを、慌てて踏みとどまつた。

「その、あ、ありがとう……」

「ん、どーいたしまして、っと。まー、南原は俺らん中でも性格悪い方だしなあ、あいつの言うことなんて、聞かなくてもいいぜ？ これからも、困つたことがありゃあ俺に言えや。めんどくせえけど、他の御尊四家が見苦しいとこ見せてんのに、尻拭いしねえわけにもいかないしなあ。助けてやるよ」

そう言つて、どこかやる気なさげだった表情に暖かな笑みを浮かべせた。変なところでめんどくさがりではあるものの、親である齊ひらよりは面倒見もよく、人付き合いもいい人物なのかもしれない。

そんな確信を得てしまうほどには、魅力的な笑みに、ゆあはなんだか少しドキリとしながら、礼を述べる。

「ホントに、助けてくれてありがとね…？ いつつも付きまとわれ

て、断ってんのに告白されて……すごく、困ってたんだ。助かったよ」

「おう、そらなにより。めんどくさくつても動いたかいたががあったぜ」  
そう言いながら、さり気なく手を離す。今頃になって、未だに手を握りっぱなしだったことに気がついたのだろう。些か、慌てた様子で手を離すのは、やはり彼が“男の子”であるということか。ずいぶん、恥ずかしげであった。

もちろん、その“慌て”を敏感に感じ取ってしまったゆあが、さらに慌てて赤面してしまうのは、言うまでもない。

しばらく、気まずい時間が流れた。どちらも、動けない。その様子に、放送側からも苦情が出る。当然のことだろう。試合は、まだ消化されきってないのだから。

『東條 仁くん。早く、その子を連れて戻りなさい。大事をとって、保健室に連れて行くべきでしょう』

学院長秘書、谷口 真樹の声。どうやら彼女は、全てのブロックを観察し、回しているようだった。中々のやり手である。

「んー、なんだ、その、一応、保健室行けって言ってるみたいだし、俺が連れてこようか？ ほら、俺って移動魔術使えるから。一瞬だけ？」

ほら、と言われても、初めて会ったのでそんなこと知らない。そう答えそうになったゆあだが、不思議と出た答えは肯定、それもずいぶんしおらしい頷きになってしまった。

「うし、じゃあ行こうか。《瞬動》」

ぶつ切りの単語を一つ呟くと、途端に炎に包まれる二人。そして、そのまま二人の姿はコロシアムから消えていた。ゆあを助けるために入った時も、この魔術を使ってワープしてきていたのだろう。ちなみに、いつかはすでにこの時、次の試合に出場していたために、ゆあを助けることは出来なかった。このままでは、彼の恋は儚くも散ってしまいそうであった。

白系統で纏められ、パステルカラーのカーテンがかかる部屋。その棚には医療用器具が並べられ、魔力枯渴を起こした人用に、魔力を溜め込んだ魔宝珠まほうじゆもいくつか用意されていた。五台ほど、ベッドもある。奥には扉があり、その先に保険医がいるようだ。

一般的に、保健室と呼ばれるそこに、唐突に吹き上がる炎と共に現れる者が二人。東條 仁と、高峰 ゆあである。仁の移動魔術による瞬間移動のおかげだろう、本当に一瞬で辿り着いた。

「うわあ、ホントに一瞬だ！　すごいね、東條くん！！」

「んー？　そか？　まー、そうなんだろうな。コレ、使えるようになるまでは結構苦労したし」

少し、嬉しそうに答えた。この移動魔術は彼が提案、発明し、炎属性にさえ適正があれば行使可能（少なくとも机上では。現在使えるのは仁のみ）な魔術だ。自身の発明した魔術を褒められれば、誰だって嬉しいだろう。

そんな嬉しさを、少しだけ気恥ずかしく思いながら、仁は保健室の奥にいろであろう保険医に声をかける。

「おい、けが人連れきたぞ。手を骨折したつぼくてな、回復魔術は使ったが、念のため診てやってくれ」

仁の、大きくはないがよく通る声に反応し、保健室の奥からくぐもった声が聞こえる。ずいぶんホラーな声音だが、仁が特になにも動じないので、ゆあはビクツとするだけに済ませて前を向いた。

そして、やがて開かれる扉。そこから覗く、くすんだ白髪。完全な三白眼の持ち主の彼は、まるで死神のように薄気味の悪い笑みを浮かべ、こちらに向かってきた。

「ふふふ、その子がけが人かな？ どれどれ、見せてもらいなさい。僕がおもしろおかしく解b……じゃなかった、やさしく治療してあげるからあ」

名を、樺根かほね 司郎しろう。学院では“マッドでホラーな保険医（正直出くわすと怖い）”と呼ばれ、親しまれ……たらいいなあ、と、彼は常々思っているとかいないとか。

彼のその“怖さ”は、愛称（と言っていいものなのかは分からないが）の通り、常軌を逸している。少女が怯えるのも無理はないだろう。

「ひいえ?! む、無理いつ! たたた、助けてよ東條クン!!」

そのあまりのマッドさに、思わず仁の後ろに隠れて服の裾を掴んでしまうゆあ。完璧に、ドン引きだった。そのうえ、ドン引きされたことにも気付かないのか、先ほどの笑みをまったく壊さずに仁の後ろへ手を伸ばす保険医。……声音と同じく、ホラーだった。

さすがの仁も、このホラーさはまずいと思ったのか、少しゆあをかばうような立ち位置を取り、声をかける。



「落ち着けつての。あんた、保険医だろ？ 怖がられてどーする。だいたい、この子の骨折は一応、治しといたしな。異常がねえか、レントゲンとつてくれるだけでいんだよ。ほら、あんたの魔術なら一瞬だろ？ さっさとやれ、ここに立ち尽くしっぱなしつてのも、めんどくせえ」

どうやら仁は、保険医・司郎と知り合いらしく、相手の魔術がどんなもののかも分かっているようだった。病气やけがの状態を見るのには、もってこいの魔術だとか。

「そうだねええ。うん、じゃあ見てみよう。ほおら、腕だけでも出してごらん？ すぐさま切り裂いて血管を……じゃなかった、診てあげるから」

やはり、ずいぶん危なげなことを口にする司郎。……知り合いである仁さえ、彼に見せるべきではないかもしれない、と思いはじめてしまうが、彼が制止する前に司郎は“診る”ための魔術を発動させ、ゆあの両手を覗き込んでいた。

「ディテクト  
《探知》」

ぼうつと、司郎の瞳に蒼い光が灯る。これまた、なんともホラーな光景だった。

しばらくの間、無言で骨折していたゆあの両手を注視し　その間、ゆあはなんとも居た堪れない気持ちで視線を逸らしつつ、仁の服の裾をギュッと握りしめ続け　やっこのことで目を離れた。

「ほおう。仁くん、君の回復魔術も、レベルが上がったようだねえ。クフフっ！ 完璧、完璧だよおお！　ますます、御尊四家の解剖をしたくなってk……いや、なんでもないよ。その治療は完璧だ

ったようだからね、僕は奥の部屋に戻るとしよう。ふふ…あははははあー!!」

哄笑し、司郎はそのまま奥へと歩いて行ってしまった。もちろん、気色の悪い哄笑はそのままに。…非常に、不気味である。

「……あの人はさ。治療は、完璧な人なんだけどなあ。回復魔術と言やあ西藤家だが、あいつらにも負けないほどの治療術を持つてるとか。でもやつぱり、解剖…とかはキツイよな。悪りいな、あんなトコに連れてきちまって」

保険医・司郎から完治を告げられた二人は、ゆつくりと豪華な装飾のなされた廊下を並んで歩いていった。その時、唐突に呟いた仁。  
“あの人”とは、言うまでもなく司郎のことだろう。

「き、気にしないよ！ だって、ちゃんと助けてくれたし、その、嬉しかった!!」

「あー？ そうか？ なら良かった。親父に命令されて、仕方なく助けたんだが…まあ、あんたみたいなヤツだったら、助けてよかったよ」

豪勢で広い廊下に、二人の声が響く。他の生徒のほとんどはコロシアムの観客席にいるのか、廊下は非常に空いていた。声が、とても響きやすい。

二人の歩幅の違う足音も、カッソ、カッソ、と少しずつずれて聞こえてくる。それがゆあには、なんだかおもしろかった。少しだけ、リズムを刻みながらスキップしてみた。

なんか、変にテンションが上がってしまつのはなぜだろう。

ゆあ自身ですらそんな疑問を持つテンションだ。当然、隣を歩く仁も異変に気付く。

「楽しそうだな？ 南原のヤツ、まだ諦めてねえんだぞ？ んな能天気で大丈夫か？」

そして、仁のその言葉は、ゆあのハイテンションを急激に冷めさせた。

「あの、その……」

急に落ち込んだ様子で言い淀んでしまった。仁の“能天気”という言葉も、言いて妙だ。未だ、南原 有流人の告白問題は解決していないのだ。トーナメントで優勝すれば、ゆあの抵抗などお構いなしに付き合わせようとしている。ハイテンションになっている場合では、決してない。

それを察してか、ゆあは自己嫌悪にまで陥り、先ほどのテンションが嘘のように落ち込み始めた。……さすがの仁も、いくらめんどくさがりとはいえ、そんな状況に見かねる。

「あー、そうだ。南原のヤツはさあ、確かトーナメントで優勝したら君をもらう、とか抜かしてたよなあ？」

「……うん」

力なく頷く。ずいぶん、弱々しかった。有流人に負けたこと、その彼の告白から自力で逃げる事が出来ないこと、それを察してしまっているのだからしょうがない。

だが、気を使った仁から、思わぬ助けが。

「んで、俺がヤツと同じブロックなのは、知ってるよな？」  
「うん、知ってる……」

どうせ御尊四家とあたるなら、東條 仁と当たった方がマシだったな 試合前にそう考えていたことを思い出す。

「そして、ヤツは試合に勝ったら、お前を恋人にするつもりだ、と……なら、ヤツの横暴を確実に防ぐ手があるぞ」

「え?! なに? 教えて!!」

ガバツと嬉しそうに顔をあげ、訊ねるゆあ。そんな彼女を、少し微笑ましく思いながら、仁は答える。

「俺が、あいつをぶちのめす。俺さ、結構お前のこと、気に入ったしなあ。んで、あいつは気に入らねえし。あいつが二度とその気にならないように、釘を刺しといてやるよ。本当ならめんどくせえからやんねえけどな? お前は、特別ってことにしといてやる」

「ほ、ほんとに?! ありがとう!!」

「はは、気にすんなってーの。ただの俺の自己満さあ。まー、めんどくさがるの俺がこういう風に積極的になるのは、珍しーけどな?」

そう言って、仁は笑う。何度も何度も、自分がめんどくさがりであることや、その行為を自分がやるという希少性について語るもの、彼の表情はどこか楽しそうだった。

「お、着いたんじゃね? 確か、お前は208号室だって、言ってたよな?」

「あ、うん……」

少し残念そうな表情をして俯くものの、肯定して後にハツとして顔を上げる。お礼を言わなければ失礼だろう。

「その、えと、送ってくれて、ありがとね？」

「おう、どういたしまして。……ああ、そうだ。さつきも南原について困ったことあったら俺に言えって言ったばっかだしなあ、一応、俺のメアド教えとくよ。赤外線、いけるか？」

そう言っつて仁はケータイを取り出す。ゆあもすぐに応じ、メアドの交換はすぐに終了した。……女性にメアドを聞く方法としては、かなり鮮やかな方法であった。

まあ、彼がやるからこそ、自然に、なんの躊躇いもなく出来ることなのかもしれないが。

「あの、またお礼するね。私が言うのもおかしいかもしれないけど、試合、頑張ってくださいっ」

「おー、任せろ。んじゃあ、コレで失礼すんぜ。次の試合まで、自室で寝ることにする。また、二人で会おうぜ。じゃーな。……《瞬動》」

ゆあの目の前で、鮮やかな紅の炎が燃え盛り、彼の身体を一瞬で運び去っていった。……去り方まで鮮やかだ。

この光景をもし、いつかが見ていたとしたら……彼が、落ち込んでしばらく起き上がれなくなることは、説明するまでもない。

## 僕の最後の決め手だ

一番進行の早かったBブロックだが、有流人が少し調子に乗って戦闘を長引かせすぎたらしく、他のブロックに消化具合を追い越されていた。特に、Aブロックの進行スピードは凄まじく、最も試合が残っていたにも関わらず、最初にブロック別の決勝を迎えることとなった。

それは一重に、晃雅といつかの実力のおかげと言っているだろう。いつかはもともと、御尊四家以外の人物には負けないほどの実力と才能を持っていたし、一度試合に勝ってしまった晃雅も、吹っ切れたのか試合相手に容赦はしなかった。その結果、試合はなんの盛り上がりもなくほぼ一瞬で決まったのだ。

Aブロック決勝戦は晃雅といつか、二人の対戦である。四月の最初に行われた、サバイバル時の戦闘の再現、いつかのリベンジマッチ。それが、今まさに始まるうとしていた。

Aブロック用コロシアムの中央に集まる二人。どちらともなく、握手を交わした。

「やっと、再戦の約束が叶ったよ」

いつぞやの約束とも言えない話を持ち出すいつか。晃雅は、その約束に『勘弁してくれ』と嘆息したのを思い出す。

「俺は、約束したつもりなんてなかったんだがな」

「そうなのか？ まあ、僕は再戦できるだけで満足だよ。次は、負けないからね。そのために、君たちから隠れて訓練したんだから」

いつものメンバーで全魔戦へ向けて修行した際、いつかだけは共  
に行動しなかった。どうやらそれは、決勝で戦うことになるであろ  
う晁雅に、自分の新しい魔術を見せたくなかったがためらしい。

「ほう、それは期待大だな。それでも、お前に負けるつもりはない  
けど、な」

いつかが突然、攻撃を仕掛けてきたあのサバイバル時の戦闘を彷彿  
とさせるような、不敵な笑みを浮かべた。また、いつかも晁雅の  
それに負けなくらい不敵な笑みを浮かべるので、この状況を間近  
で見ている者がいれば、正直引いただろう。

ひとしきり笑い合い、二人は握手していた手を離す。それと同時  
に、二人して二歩ずつさがり、規定の位置につく。そして、試合開  
始のアナウンスは流れる。

Aブロック決勝戦、始めっ！

学院長秘書、谷口 真樹のクールな声と共に、試合は開始された。

試合開始と同時に、二人に動きがあった。そのうちの一人、晁雅  
はその凄まじい瞬発力と反射神経で、猛然といつかに迫り始め、い  
つかの方も一言だけ何かを呟き、同じように全力で相手に肉薄した。  
空間魔術師である彼は、それにも関わらず、魔術を使う気配など  
なく、ただ全力で晁雅とぶつかるようだ。

ぶつかり合う直前、これ幸いとばかりに、晃雅は身を低くし、トリッキーなステップでいつかを翻弄しながらわき腹に向けて拳をシユッと放つ。もちろん、それは軽いジャブ。いつかが避けようとするのを見越し、その避けた先に力強い拳を叩き込んだ。

ブンっ！！ 拳が空気を裂き、唸りを上げる。吸い込まれるようにいつかの鳩尾に突き刺さり、彼は大きく後方へ吹き飛ばされた。

ヒュッという短い音と共に、コロシアムの端までいつかの身体は運ばれ、飛んで行く時とは似ても似つかない鈍くて大きな音と共に、コロシアムの壁に激突した。激しい衝撃のせい、いつかの口の端からゴフツツと血が吐き出される。

「……なんだ、この違和感は」

明らかに、晃雅に有利なこの状況。もはや、彼の勝ちでいいのではないか、と思えるこの状況で、晃雅は不思議そうに拳を見つめて立ち尽くす。その呟きに反応し、壁にたたきつけられていたいつかが、辛そうに顔をあげ、キツと彼を睨む。

「……《我が…支配せし空間、を、解放…す》」

途切れ途切れの声で詠唱し、未だ立ち尽くす晃雅のちょうど腹にくる部分で、火の伴わない爆発を起こした。

凄まじい風。それが、周囲に撒き散らされる。それを、晃雅は右側に大きく身を投げることによってかわした。相変わらず、この爆発は直接的な魔術による攻撃ではないので、魔術耐性など無意味なものとしてダメージを与える。かすることも致命的な失敗につながるので、晃雅も真剣だ。



身を投げた先で手をつき、身を捻って今度は後ろに身を投げる。いつかの詠唱により、爆発の第二段が放たれたためだ。爆発によって四散する風に乗る、大きく後方へ下がった。

「だけ、ど。そこには…」

しかし、いつかは壁にたたきつけられた格好のまま、不敵に口の端をゆがめる。晃雅の着地地点に目を向け、その後を起こるであろう事象に、思わず笑みをこぼしてしまった。

「……っ?!」

気付いた時にはもう遅い。大きく距離をとった晃雅の着地地点が、彼の足が着いた途端に赤く光る。瞬間、それは広がって魔方陣を構成、晃雅の身体に痺れが走った。

「《縛り地雷》<sup>バインド</sup>。試合開始、と同時に、魔術札を設置させて、もらった…よ。気付かれないで、よかった」

幾分かダメージから回復したのか、壁にたたきつけられた当初よりは滑らかな口調で、いつかは告げる。同時に、いくつかの魔術札を取り出しながら。

彼は、符術師だ。札に魔方陣を書き込み、魔力を込めることによって、自身の得意としていない属性の魔術も自在に操る。

《バインド》は実は風の派生である雷属性に、ある程度の才能を持つていなければ行使不可能な魔術なのだが、いつかはいとも簡単にそれを行使した。それは、確かな魔方陣の知識と、精密な魔術コントロールの賜物である。

「……拘束、か。それで、何をするつもりだ？　いつもの爆発なら、相当簡単にダメージを与えられるはずだが……それはしないのか？」

痺れて動かない身体に、若干顔をしかめながら、晃雅は問う。この状況ならば、簡単に行使できるいくつかの特殊爆発を使用するのが吉のように思えるのだが、その彼は全くそうしようとはせず、ただ不敵に笑っているのだから。

叩きつけられた格好のまま動かず、魔術の詠唱すらもしない。晃雅には、何を考えているかさっぱり分からなかった。

「……しかも、ここで黙秘、ね」

晃雅の問いにすら答えず、叩きつけられて地に座り込んだままの姿勢で、ただこちらを見据えているいつかに、晃雅は不満を洩らす。その間も思考をめぐらせていた。

しばらく、なんの動きも見せない状況が続く。いつかは今までどおり、無様な姿勢のままに不敵な笑みを浮かべ続け、晃雅は縛りつけられたまま、頭を働かせ続ける。いつかの思考を読むために。

「……時間稼ぎか」

唐突に。晃雅は思い至る。

そこからの彼の行動は早かった。縛り付けられたままの身体を必死に動かそうと魔力を吹き出させ、無理矢理に右腕を動かさし始める。縛り付けられていることが嘘のように、滑らかな動きでその右手を自身の制服の懐へ伸ばした。

その懐に手をつ込み、縛りに逆らいながら何かを取り出し、ここで限界を向かえ、その取り出した物を落としてしまう。だが、そ

れは彼にとって正解のようで…。

キンっという短くて高い音と共に、晁雅の取り落とした球体の物質から炎が噴き出した。炎の魔術を詰め込んだ魔珠。ツールの一種だ。その吹き出した炎によって下に描かれている魔方陣を抉り、一瞬で自由になった身体を動かし始める。

そのままの勢いで魔方陣跡地から飛び退き、懐から取り出したナイフを投げつける。徒手空拳だけが、晁雅のスタイルではないのだ。

しかし。投げたナイフが、いつかの腹部を貫き、それでも紅い血が滲まないことに気付く。蘇るのは、先ほどコロシラムの壁にたたきつけた時の違和感だ。

「やはり、身代わり…！」

悟った瞬間、壁にいたいつかは、不敵な笑みを残して消え去る。そこにあつた風が、次の瞬間には吹きぬけている、そんな気まぐれさを残して。今まで、いつかを認識できたのは、“風”のほんの気まぐれだった。……いや、それは“いつか”と呼ぶべきではなかったのかもしれない。

「……ふふ、僕は、空間魔術師だ。だけど、風属性も得意なんだ」

どこからか、いつかの声が響く。

「空間を操って、君からは見えないようにしてる。……そもそも、君と試合開始前に話したのは僕じゃないしな。あれは、僕の魔術札から発生させた、風の人形さ。風はどこにでもあって、どこにも

ない。あれは存在していたけど、ただの影に過ぎなくて　でもまあ、難しく言う必要はないか。要するに僕の分身だったってことだな。……ああ、一応これも武器扱いだし、試合開始前から身を隠してはいけない、というルールもない。許可も貰ってるから、反則ではないからな」

響く声は、試合開始前から晃雅を倒すための準備をしていたと告げる。おおかた、“バインド”の札を設置したのも、隠れている本体のいつかだろう。晃雅が見る限りでは、相對していた“いつか”に、札を仕掛ける隙などなかった。

「……それで、なにが目的だ？　無駄話に興じる余裕があるんなら、もう準備は整ったんだろう？　さっさと仕掛けて来い」

「君はせっかちなな。……でも、分かった。これが、僕の最後の決め手だ。さっきまで、長い詠唱をバカみたいに唱え続けたんだ。くたばってくれよ？」

### 《完全空間支配、虚》

ズズズ…そんな鈍い音と共に、コロシアムの戦闘区域全域を、なにか黒いモノが覆い始める。どうやら、晃雅に避ける術はないようだ。

その黒いモノはコロシアムの四方の端から広がっており、そこに札でも設置してあっただろうことが読み取れた。ずいぶん詠唱も長く、札の設置から時間がかかるので、実用性も低いのだろうが、効果は折り紙つき。現在のいつかに行き可能な、最高の魔術と言ってもいいだろう。

「ほら、これで君は僕の空間の住人だ。喜べ」

響いた声は届く。が、すでに晃雅の目に、いつかは映っていないか。先ほどの“黒”で視界を埋め尽くされ、一寸先すらも視認できなくなっただらう。

「……これは、ピンチかもしれない」

自身ではなく、フィールド自体に影響を与える魔術。それは晃雅が一番苦手とする魔術形式であった。自分自身にかけられた魔術でなければ、魔術耐性も効果がないのだから当たり前だ。

そんな少しの不安を抱きながら、いつかの本気と言える第二ラウンドは始まる。彼の反撃、開始である。

負けを認めるか、永崎？

黒。全てが黒だ。晃雅の視界には、なにも映らない。……いや、  
“黒”だけが映るといのが正確か。

いつかの術によるものだ。フィールドに影響を及ぼす魔術は、晃雅にとって天敵になる。魔術耐性が意味をなさないからだ。

そしてそれは、この黒に覆われる視界を晴らすことが不可能であることを示す。それに気付いた晃雅は、すぐに目を閉じた。視界は、  
必要ない。気配だけで追えば、まだ勝機はあるだろう。

『視界に頼らないか。君らしい。……けど、ここはその程度じゃどうにもならないよ』

「そうか。それでも、さっさと終わらせるぞ。……いつまでも観客を待たせると、ヤツらはずっと“黒”だけを見ることになる」

ニヤリと、口の端を吊り上げる。まるで、観客を気にする余裕を見せ付けるかのように。晃雅は、まだ勝ちを諦めていないようだ。

『そうだね、じゃあ始めよう』

いつかの声が響いた。それにあわせて、鋭い風が晃雅の腕を切り裂く。身をよじったが、避けきれていない。パツと舞う血は、“黒”のせいですぐに見えなくなった。

晃雅に遠隔攻撃を無限に近く繰り出す術があるならば、すぐに風が飛んできた方向へ攻撃していたのだろう。が、それはしない。遠隔攻撃をする手段すらないのか、それとも絶妙のタイミングを探しているのか。

どちらにせよ、晃雅が反撃することはない。

それとは対照的に、いつかの攻撃は激しさを増してゆく。右から風の刃が飛来したと思ったら、真逆からも風の刃が……そして、前方で空間凝縮の爆発。とても激しい攻撃の連続だ。

『どうした？ 僕の攻撃に、何も反応しない君ではないだろうか？』

攻撃の合間に響いてくるいつかの声にも晃雅が反応することはない。ひたすらに瞳を閉じ、いつかが繰り出す魔術を避け続ける。

なにかを待ち続けるように。そして、その時は……。

「そこだっ！」

意外にもすぐに訪れた。いつかが攻撃をする際、かすかに放つ殺気。それを、少しずつ辿り、隠し持っていたナイフを投げたのだ。

ヒュンっ！ この黒の空間に風があるのかは分からないが、風を切るような音と共に、晃雅が察知したいつかの方へナイフが突き進む。

彼は確信した。自身の投げたナイフが、いつかに突き刺さっていることを。感覚から言って、腿辺りに命中しているはずだ。

晃雅がそう思った瞬間には、腿にナイフが刺さった痛みで呻き声が洩れた。

「な……ぜ……？」

……晃雅の方から。

明らかに動きが鈍り、ほぼ完璧に避けていた風の刃掠り始める。

それは、痛みによるものからの鈍りだけではない。疑問。自分が放った攻撃が、自分の太ももに突き刺さったことへの。

確実にいつかの腿を捉えていたはずだった。まるで自分と相手の立場が変わったように、いつかに刺さるはずのナイフが自分に刺さった。なぜ、なぜ、なぜだ……そんな疑問が、晃雅の思考を支配し、動きが鈍る。

『どうした永崎？ 攻撃が当たり始めているぞ？』

いつかが煽る。晃雅を焦らせ、絶望を引き出し、負けを認めさせるためだろう。彼の魔力も無限ではないのだから。

『ほら、次は右！ 左！ 下かもね、と思ったら上だよ！ さー、次はどこに攻撃しようか？』

彼の言葉は、攻撃が着弾すると同時に届く。ヒントを与えることなく、晃雅のイラつきだけを煽り続ける。晃雅の表情は歪み、術者であるいつかには、それが手に取るようにわかった。

『そろそろ降参するか？ 僕はそれで一向に構わないぞ。どうする？ 答えるよ。それとも、しゃべることすら出来なくなったのか？』

いつかの問いに、晃雅の表情はさらに歪む。眉は顰められ、深い深い縦皺が刻み込まれ始める。痛みからか、悔しさからか、それともただ単にイラついたのか。それは、いつかに対する怒りにも見え、負けを悟り始めたようでもあった。

……晃雅の表情の歪みは、いつかによる攻撃が放たれるたびにひどくなる。

「なあ、杉山……」



『なんだ？ 負けを認めるか、永崎？』

いつかの嬉々とした声が響く。前回の負けのリベンジが成功するとそんな喜びが溢れたのだろう。

だが、その喜びは、すぐに消えることになる。

「俺ら、そろそろ名前で呼び合わないか？」

今の状況からは、確実に不適切だと思われる提案。いつかは驚きで攻撃が乱してしまい、晃雅は口の端をニヤリと吊り上げた。

『き、君は、いきなり何を？』

「俺たちの中で、名前呼びじゃないのは高峰とお前だけなんだ。で、お前の方が先に会ったからな、名前で呼んでやろうかと。ダメか？」

『いや、別に悪くないが……なぜ、今その提案を？』

「決まってるじゃないか。それは……」

勝ちを確信したからだ。

晃雅はそう呟き、走り出した。太ももの怪我など意に介さず、猛然と走る。

右で殺気を放って攻撃したかと思いきや、次の瞬間には左で殺気を放ついつかに、近づくように。殺気的位置が変われば走る向きを変え、それでも少しずつ、距離を詰める。

何も動かないように晃雅には感じるが、確実にいつかへと向かっていった。

「この空間は、座標に働きかける魔術空間だろう？」

走りながら、息も切らさず問いかける。先ほど、いつかがした口撃のように、いつかの余裕を削ってゆく。

「まず、自分の座標はほぼ自由に操れるはずだ。つまり、お前はこの空間内では、自由にテレポートが可能だ。が、それは完全に自由じゃないみたいだな」

晃雅はそう言って笑う。もちろん走りながら。

先ほどからいつかを追いかける中、テレポートの法則に気付いたのだ。

「さつきからお前は、十メートル以内でしか移動していない。もっと離れればいいのにな。それでもそうしないってことは、そう出来ないからだ。違うか？」

「……どうだろうな」

いつかの返答は歯切れが悪いものだった。晃雅の予想は、当たっているのだろう。

確実にいつかの余裕は削られ、晃雅を襲う魔術の嵐は的外れなものに変わってゆく。それに伴って、晃雅が走りながら身をよじる回数も減っていった。

「そして最後に一つ。この空間では、基本的に自分の座標を変えることしか出来ないようだが……自分と被術者の座標の交換だけは、可能のはずだ」

それが、いつかの太もみに刺さるはずのナイフが、晃雅の太もみにささった理由。いつかは、晃雅と座標交換をして立場を逆転させたのだ。

どの攻撃も、この座標交換で相手に受けさせることが可能だった。唯一つ、近接での攻撃を除いて。

「さあ、チエックメイトだ」

とうとう、晃雅はいつかの後ろに回りこんだ。彼が逃げぬうちに、地面に両手をつき、足を開いて回転させる。

ここまで密着している状態なら、座標交換で逃げることは敵わず、当然のように晃雅の立場に変わったとして、回し蹴りを回避することは不可能だ。

……いや、そんなことをする暇すらなかった。魔術師であり、必要以上の運動をしない彼に、晃雅ほどに鍛えぬいた人物の蹴りを察知しても避けることなどできるはずもないのだから。

蹴りはいつかの肩を捉える。そして……。

“黒”は晴れた。

晃雅の目の前には肩を抑えて蹲るいつか。“黒”は晴れ、あの設備が整ったコロシウムと、固唾を呑んで見守る観客席が目映った。

「俺の勝ち、でいいか？　なあ、いつか」

フツと軽く、しかし柔らかく笑い、晃雅は問いかけた。

「……ああ、君に敵わないな。負けたよ、えーっと、うん、あの、こ、晃雅」

少し照れたように顔を背けた。そんないつかを引っ張って立たせ、晃雅は満足そうに頷く。今度は高峰と名前呼び出来るようになるだろう、などと思いつながら。

Aブロック優勝者、永崎 晃雅！

そして鳴り響く、学院長秘書・谷口 真樹による放送。それに伴って、少しだけ控えめな、それでも大きな歓声がAブロック内で木霊する。

それは、魔術の使えない“無能”が、魔術戦闘大会において、“魔術師”を凌駕してブロック優勝した瞬間であり、魔術の使えない“晃雅”を、少しなりとも“学院”側の魔術師である生徒たちが認めた瞬間でもあった。

各ブロック優勝者四人による本当の決勝戦は一日の休憩を挟んで明後日に執り行われる。晃雅以外の優勝者は誰なのか。そして、ゆあの恋を左右する東條と南原の勝敗の行方は？

それが分かるのは、この晃雅のブロック優勝が決まってからもう少しだけ、後のことである。

また、来るかも

六月もすでに中旬。梅雨はまだ終わらないものの、昨日までの全魔戦トーナメントの日と同じく、空は晴れ渡っている。

トーナメントを勝ち進み、ブロック優勝した者たちで繰り広げられる本戦は明日だ。天気予報が正しければ大雨だが、関係なく本戦は開かれるだろう。雨もまた、一つの演出として捉えられ、観客席以外には屋根を広げられることもなく進める、と大会説明の際に言い渡されたためだ。

そんな雨の日の大会に向け、英気を養っている者たちがいる。本戦出場者だ。これから、その中でも“無能者”でありながらブロック優勝を果たした晃雅、彼をピックアップしていこうか。

彼は、特に気負うことなく、部屋に居た。相も変わらず鬱陶しく動き回る海斗を尻目に、静かに本のページをめくる。紅茶片手に本を読み進める様は、そこはかとなく優雅である。

「なあなあ崎ちゃん！ 優勝とかあんたすげえよ、うん！ 明日も勝ち進むんだよな？ やっぱり、御尊四家相手でも無双しちゃったりなんかして余裕で優勝っすか？ 先輩、憧れるっす！ 弟子にしてくd「ヤダ」……即答は酷いと思う」

今日も今日とて、晃雅は海斗を適当にあしらって読書し続ける。この様子は、入学当初からなんら変わらない。海斗には多少の不満もあるだろうが、平和だ。

だが、そんな平和もある者の乱入で一気に終わりを告げることになる。

パンツと開かれる扉。学院最高峰の魔術師による鍵がかけられているはずだが、扉を開けた女性にとって、開錠することなど雑作もなかったらしい。

その彼女は、ふんわりとしたウェーブのかかったハニーブラウンの髪を揺らし、明るい茶色の瞳をまるで子どものようにキラキラと輝かせて、しかし何も言わずに部屋に入ってきた。

二十歳程度の若々しくも“お姉さん”と言った風情の顔を近づけ、晃雅を観察するようにじろじろと見つめる彼女。顔の距離は、近かった。

「はっ、え、ちょ！　おいおい崎ちゃん、このキレイなお姉さんはお知り合いですかっ?!」

さすがの晃雅もこれには驚き、訊ねてきた海斗を完全無視して問いかけた。もちろん、顔が近いのを気にして、少し下がるのも忘れない。

「どうしたんですか、明菜さん」

「あ、おねーさんの名前覚えてくれたの？　なんか嬉しいなっ。小さい頃に一回会っただけなのに」

明らかに晃雅と違うテンションで、また顔を近づける。晃雅の小さな抵抗は、無駄に終わったようだ。

晃雅が“明菜”と呼んだ女性は、満足そうに頷き、再びその可憐

な声を発する。

「晃雅くん、また強くなったんだね。顔つきが、前よりいいよ。ほら、あれだね、護るべき者のためにー、みたいなの！」

「あー、まあ最近、もう一つ決心したんで。確かにそうかもしれないですね」

『この先だって、ずっと俺がキミを護ってみせるよ』 そう告げた。幼少の頃からそばにいる、大切な“幼馴染”に。

「え、なになに、親友である俺を護ってくれちゃったりなんk「自分の身は自分で護れ」……はいはいわかってますよ、咲良ちゃんだろ、護んのは」

「それと、別に親友だって認めたくわけじゃないからな」

「え、まだ認めてくれてなかったのかっ?！」

「……悪い、俺には認められそうも……」

「ないってか?! つかそんな嬉しそうな表情で言ってるじゃねえ

! 冗談ってわかっててもなんかイラつくわボケえ!!」

客がいても関係なく、晃雅と海斗の“親友劇場”は開幕する。思いのほか晃雅も、海斗とのこの掛け合いを気に入っているらしい。

「ちなみに、冗談でもなんでもないからな」

「や、無表情で言われるとそれはそれでかなりイラつくのですが?！ そこんところどう思「うるさい。明菜さんに迷惑だろ」……

う、うわああ、崎ちゃんがいぢめるう! そのキレイなお姉さん、貴女の柔らかい神秘の丘へ俺っちを誘って慰めてくださああい!!」

海斗の身体が宙を舞う。真っ直ぐにGo to Heavenである。そして、その彼はもう一度宙を舞う。地面に叩きつけられ、

G o t o H e l l だ。

「ふふ、おねーさんに襲い掛かるうなんて、君には千年早いよ？」

紛れもなく、明菜の仕業だった。晃雅も、この結果が見えていたから海斗の暴拳を止めようとしなかったのだろう。

「泣きまねしてでも逝きたかったか？」

「……おそらく、逝くってホントに死ぬって意味で訊いてんだろうな」

「ああ、死んでもおかしくなかったな」

ニヤリと笑ってサムズアップした。晃雅にしては珍しく、本当に楽しそうな笑みだったとか。これだから、海斗いじりはやめられないのだろう。

そんな二人を見ていた明菜もまた、楽しそうに笑う。この掛け合いが気に入ったのか、それとも海斗自身がおもしろいと思ったのか。今度は晃雅ではなく、海斗に話しかけた。

「ねえ、ところで君のお名前は？ ずいぶん晃雅くと仲良いみたいだけど」

「はいっ、吉井 海斗といます！ ちなみに崎ちゃんとは「なんの関係もない人物」です！ ……や、親友だろ！？」

「親友と認められたかったら、もう少し静かにしてくれ。読書する時、正直迷惑だ」

「……あ、なんかそれ冗談じゃないっぽくて、今までで一番傷ついた！」

「そうか、それはよかった。明菜さんもそう思いませんか？」

「そうだね、海斗くんどんまい！ とだけ言って、落ち込むのを喜んで見てるよ」



晃雅の嫌味な笑いに、明菜も被せて笑う。案外、気の合う二人なのかもしれない。

「あ、けど静かにしてれば親友って認めるってことじゃね？ 逆に言えばっ！ そーかそーか、崎ちゃんは素直になれなかったただけなんだなア！ つまりはツンデレさんとゆるーワケkいだあああああ？？」

おかしなベクトルで復活の早い海斗には、お馴染みのオチが待っていた。ちなみに、今日の被害は脇腹だ。脇腹をこっ、ガツンと。回し蹴りだ、とだけ言うておこっ。

「中々、クレイジーなことするんだね」

「こいつの扱いはこれで充分です。そもそも俺は、っ、ツン……」

「ツンデレ？」

「そう、それなんかではないですから」

「え？！ 崎ちゃんはツンデレひぎゃあああ？？」

晃雅の『ツンデレではない発言』に否定的な意見をぶつけてくる海斗を、もう一度蹴って黙らせた（ちなみに、“黙らせる”とは“気絶させる”と同義である）あと、晃雅はあからさまに話題を切り替えるように話し始める。

……これ以上、ツンデレ云々の話をするのは、自分にとってよくないと予想したのだろう。

「……ところで、明菜さんはどんな用事でここにいらっしやっただす？」

「え？ 用事？ んー、なんだっけ？」

しかし、晃雅の話題切り替えは成功したものの、その質問はすぐに答えられるものではなかったらしい。

明菜はそのウェーブがかかったハニーブラウンの髪を揺らし、首を傾げる。

そして一言。

「うん、忘れちゃった!」

「いや、忘れないくださいよ……」

「んー、じゃあ、晃雅くんの顔が見たかったっていうことにしておくよ。ほら、トーナメントでは頑張ってたみたいだし。魔術が使えないのにこんなに強くて、やっぱり君はおもしろいよねっ」

楽しそうに笑った。案外、本当にそれが彼女の目的だったのかも  
しれない。

「あ、けど……一種の挨拶かなあ」

「挨拶、ですか?」

「うん、挨拶。本戦、頑張ろうねって。優勝、したんでしょ? 晃雅くんは」

ふふ……と、含みのある笑みを洩らし、明菜は晃雅の目を覗き込む。そんな彼女に、晃雅はほとんど動じることなく、再び身を引いて距離を離れた。

そして彼女とは違う、ニヤリとしたシニカルな笑みを浮かべて言葉  
を返す。

「そうですね。貴女と同じです。……本戦では、よろしく願いますね、西藤先輩」

西藤 明菜。それが彼女のフルネームだった。

「うん　けど、明菜さんって呼んでもらった方がうれしーかなあ」  
「ふふ、分かりました。じゃあ、明菜さん。頑張りましょう」  
「よし、おねーさんを倒すつもりでくるんだよ？　まあ、御尊四家・西藤家の長姉として、負ける気はないけどね。……無事に、本戦を終えられるとは、思わないほうがいいよ」

最後に意味深な言葉をはき、『それじゃあ』　そう言って、彼女は去ってゆく。今回の訪問目的は、自分の中で達したと判断したのだから。そこからの行動は早かった。

元々、荷物もなにも持ってきていない状態での訪問だ。身一つ、翻して、閉まっていた扉を開く。

「また、来るかも」

最後に振り返って言い放ち、今度こそ部屋から出て行った。

一つ、晁雅に似た不敵な笑みを残して　。

とりあえず満足してろよ

晁雅の部屋を、御尊四家が一角・西藤 明菜が訊ねていた頃。彼とAブロック決勝で激戦を繰り広げていたいつかの部屋にも、一つの動きがあった。

どうやらいつかが溜まりに溜まった愚痴をこぼし続けているようで、それを聞き続ける相部屋の人物の根気を褒めてあげたくなるほどだ。

「聞いてくれよ……。ほら、あれだよ、高峰さんだよ。もう、僕の恋は完全に終わったな、あれには勝てない。いい雰囲気すぎだ」

「……諦めが早い。せめて、そこまで落ち込んだ説明してよ。』もう僕はダメだあ』ばかり言われても、困るんだけど」

幾分かいつかに似た顔で、冷静な反論を返した。彼ら曰く、いとこ同士の関係らしい。名を、伊坂<sup>いさか</sup> 蓮<sup>れん</sup>という。

基本的に面倒見はいいものの、少しばかり素直になれないところがある人物である。

「説明、か。いいだろう。僕がここまで落ち込む理由、存分に聞きたいさ」

「別に興味ないけどね。……まあ、とりあえず話してみたら？」

「くう、君はいつも冷たいな。けど、まあいい。話そう。実はね…

…」

そうして、いつかは話し始める。要約すると、次のようなことがあったとか。

優勝を逃し、ほんの少しだけ沈んだ気分だ。廊下を歩いていたいつか。その当時は、悔しいという思いと、しかしどこかすっきりしたような思いが混じり、大した精神的ダメージも受けていなかった。が、この歩いている廊下。ここで彼にとっての悲劇は起きる。

迎え側から聞こえてくる、楽しそうな声。片方が、聞き覚えのある声だと気付く。

「あははっ、ありがとうね東條くん。おかげで、変なヤツと付き合いわなくて済みそうだよ」

気付いた瞬間、愕然とする。

高峰さんが、東條家の長男と二人で楽しそうにしているのだとっ?!

心の中で叫び、なんとか空間魔術を駆使して身を隠した。会話の続きを聞く、それだけが彼の目的だった。

「まー、俺あ元々、南原なんかに負けるつもりはなかったさ。気に入んな」

「それでも、ありがとうだよ！ 東條くんには、感謝してもしきれ

ないっ」

「んー、そーか。なら、一つお願いしてもいいか？」

「お願い？」

「そう、お願い。ま、大したお願いじゃねーんだけどな？ お互い、名前で呼び合わねー？ お前とは、もうちょい仲良くなっときてーからさ」

な、名前呼び?! そんな心中での驚きを必死に隠し、気取られないように、いつかは二人の後を追う。心臓はもう既に、バツクバクだった。

「うん……そだね。じゃあ、仁くん、で、いいのかな……っ？」

「別に『くん』もつけなくていいーぜ、ゆあ」

「あう、えと……はい、わかった。じ、仁、これからもよろしくね」  
「おう、よろしくー」

いつかに見られたのは、ここまで。これ以上は、精神衛生的に無理だと悟る。そして早足で部屋に戻った彼は、相部屋の蓮にたくさんの愚痴をこぼし続け、今に至るのだった。

…

……

……

「ふーん、まあどんまいだね。完璧に、その子は東條くんに惚れてるよ。そのうち付き合っちゃうんじゃない？ おめでとーって言うてあげな。ボクだけは、君を慰めてあげよう。うわっ、ボクやさし

ー」

「……棒読みで言われても、全く嬉しくないんだけどな」

いつかの気分は、落ち込みの一途を辿る。

そんな彼に見かねたのか、蓮は少し顔をそらし、恥ずかしげに話を切り出した。

「じゃあ……じゃあさ。もしボクが本気で慰めてあげるって言うたら、いつかはどうする?」

「気持ち悪い」

そして、一言でバツサリ切り裂かれた。

「むう！ そんなこと言わなくてもいいじゃないか！ ボク、勇気を出して言ったんだからっ！！」

「そんなこと言われたって……。いとこに本気で慰められたら、なんか悲しくないか?」

「うるさいな、少しは素直に慰められるよ。あれか、色気か。ゆあとかいう子は、胸とかおっきいのか」

「……うーん、大きくはないな。むしろ、君の方が……」

ここまでの会話で気付いた方もいるだろう。そして気付かなかった方は、話がおかしな方向に進んでいる、と思ったことだろう。なので、ここで今起こっていることを、少し整理しておこうと思う。

いつかと相部屋の人物、伊坂 蓮。身長162cmで少し吊り目気味。顔にはいつかの面影があり、そこは『さすがいとこ』と言ったところだろうか。

しかし、吊り目気味の瞳を縁取る睫毛は艶っぽく長い。ちょこんとついた小さな鼻と、なにもつけていないのに健康的に紅い唇。そこはかとなく色っぽい。黒い髪は肩口でショートに切りそろえられ

ている。ちなみに、胸はある。少女である。

伊坂 蓮。 上位魔術学院に在籍する、女子高生だ。

「ボクの方が、なんだよ」

「大きい……うん、かなり」

「……うう、かなり大きいとか言うなあ、セクハラだっ!!」

いつかの腹を蹴り上げる、鈍い音が部屋の中に響いた。

伊坂 蓮。 いつかのいところであり、花も恥らう乙女であり、ボク  
っ娘……ツンデレである。そして、いつかに想いを寄せている少女  
でもある。

「ぐう……痛い。本当のことを言っただけなのに、理不尽だ……」

「いつかは、ちよつとえつちなんだよっ！ いとこだからって相部  
屋にした、学院側の意図がつかめないねっ!!」

「じゃあ、部屋換えを訴えてみるか？ 僕は一向に構わな「それは  
めんどくさいっ!!」……そうか、ならやめておこっ」

いつかの『やめておこっ』という言葉に、蓮がひどく安堵したと  
いう事実は、あくまで余談である。強いて言うならば、彼女にとっ  
て彼との相部屋はチャンスなのだから。

互いの親にも相談し、認められ、学院に相部屋を志願してもらえ  
るようになったのだ。そこまでの苦勞を思い出し……と、ここまで  
言えばすでに『強いて言う』ことにはならないだろう。とにかく、  
彼女はいつかと相部屋になるためにたくさんの努力をした、という  
コトで一つ。



「ボクとしては最悪だけど、いつかとボクは相性がいいみたいだからね」

「ああ、あの水晶か。確かに、あれで相部屋になる人物を選んでいくからか、相部屋同士で親友になるケースは非常に多い。晁雅と吉井が、その良い例だな」

納得するように頷くいつか。相部屋になる人物は、相性を判定する水晶によって決まるのだ。それに間違いはない。

「けど、僕らのケースははずれのようなのだ。お互い、そこまで好きになれないし、ケンカも多いしn……」

「そんなことないもんっ！」

「おおっ?! いきなり大声出すな! びっくりするじゃないか」

「水晶は、ボクたちが相性いいって判定してるんだからねっ! 非常に不本意だけど、ボクらは相性びつたしなのっ!」

水晶で判定したのは、事実だ。学院側に相部屋を要請する際の条件として、二人が学院内で一番相性がよい場合のみ、とされていたからだ。つまりは、いつかにとっても蓮は相性のいい相手で、大切な人物だとも思える人物なのだ。

「不本意なら、怒らないでほしいよ……」

「ボクがいつ怒ったって、ボクの勝手だろ。とにかく、ボクは……」

その、いつかと相部屋がいいのっ! ほら、素直に言ったよっ! 満足したっ?」

しかし、いつかは気付かない。蓮の、ここまであからさまな好意にも、気付かない。少なからず、蓮のことを好いているにもかかわらず、関係が近すぎて、自身の中にある彼女への好意にすら気付いていない。

「いったい何に満足すればいいんだか……」  
「とりあえず満足してろよバカいつかあ！」

二人のすれ違いは、まだまだ……続きそうである。

以上、Aブロック決勝戦敗退者、いつかの本戦前日の過ごし方with蓮でした。

とりあえず満足してるよ（後書き）

三十六話にして、やっと学院での主要キャラが出揃った今話。

本当はもつちちょっと早く進行していくつもりだったんですけどね…。

い、いつ、いつかつ

雨。降り注ぐ雨。暑くなってくる季節を迎えたこの街にも、それを冷やそうとするような冷たい雨が降り注いでいる。

しかし、本戦の行われるコロシウムは、人々の熱気に包まれていた。

今日は本戦。A B C Dそれぞれのグループを勝ち抜き、見事に優勝した四人によって繰り広げられる、学院最高峰の魔術戦の日である。

そんな決戦の日、コロシウム観客席の一角で、小さめの屋台を開いている者一人。

「さあ全魔戦！ 始まるぜオイ！ ほら、誰に賭ける？ 今はAブロック代表、永崎 晃雅の倍率がめっちゃ高いぜ！ 大穴だっ！ がっぱり儲けたいヤツはチャンスだぞいだああ？？」

……すぐに、その屋台をたたむことになりそうな事態にはなったが。

「もう、吉井くん！ そういう賭け事とかは、よくないんだよ！」

ポニーテールに纏めた、柔らかいブラウンの髪をびよこつと動かし、両手を腰に当てている。説教体勢は万全だ。

「……ハイ、スミマセン、咲良サン」

そう上原 咲良。この賭博に文句があつたのだらう。いつもは晃雅の役目である鉄拳制裁を、代わりにくだしていた。……わざわざ、賭博場に群がっていた生徒を押しつけてまで。

これには、隣にいるゆあも苦笑いを隠せなかった。頭に手をやり、軽く溜め息をつくのも忘れない。こうなったら咲良は止められないと分かつていたのだらう。

しかし、咲良の行動は、そんなゆあの子想の斜め上をいくことになる。

「晃雅の親友なんだから、ちゃんと晃雅を応援しないとダメっ！だから、晃雅に5000円賭ける！」

「え、賭け事ダメって言ったの咲良なの?!」

咲良のあまりの行動に、ゆあがツツコミ役に転身した瞬間であった。

「おー、崎ちゃんに5000と！りょーかい！」

「ちょ、吉井くんもなんで乗っかつちゃうの?!」

「うん、ありがとね、吉井くん」

満面の笑みで笑う。もう、ゆあにはツツコミを入れる気力は残っていないようだ。せめて、新たに助けがはいってくれないとやっつけられない。そんな雰囲気だった。

「咲良まで無視なのか……」

……ツツコミという職業も、大変なものらしい。

大きく溜め息をつき、助けになるであろう人物を探す。三人のバカみたいな騒ぎのせいで、賭博場に集まっていた生徒はみんな散り

散りになっており、周りを見通すのは簡単だ。

が、本戦出場によって絶対にいないはずの仁はもちろん、いつか見え見つかからない。再び溜め息をついて、質問することにした。それなら、話題を変えることぐらいは出来るだろう。

「そういえば、杉山くんは？ 吉井くんと一緒じゃないの？」

「んー杉山？ あれあれ、噂の東條くんじゃなくて？」

しかし、その話題転換さえも無駄だったようで、ニヤリとした嫌らしい笑みを返された。

「……えと、どこから仕入れたの？ まだ噂になんてなってないはずなんだけど」

「え、なにになに？ ゆあ、東條くんとなにかあったの？ 教えて教えてっ」

咲良も興味津々のようで、ここでゆあは話題転換の方法を大いに失敗してしまったことを悟る。

「ふっふーん。俺っちの情報網を甘く見ちゃダメなのだよ。ちゃーんと、偶然にも東條と仲良くしているところを見たのさア！ ……杉山が」

「自分じゃないのかっ！！」

「おー、もはやツッコミスキルが板についてきてるじゃねエか」

「ついて欲しくなかったけどねっ！」

今ここに、新たなツッコミキャラが誕生した。これで、海斗の『いじられ』といつかの『へたれ』に並ぶ。ゆあの『ツッコミ』という特性が生まれたわけだ。

非公式で、晁雅にも『ツンデレ』という特性が生まれはじめてい

る。実にバラエティに飛んだ五人組だといえよう。

そんな中、彼らと出会う前から『天然』というスペックを持ち合わせていた咲良が、驚きの声をあげる。

「え、えええええ???!」

……相当驚いたのだろう、周りの人間まで注目してしまうほどに、その声は大きかった。これには、さすがの海斗やゆあも、ギクツとして咲良の方を見て、慌てながら訊ねる。

「ど、どーしたよ咲良ちゃん?!」

「そ、そうだよ、そこまで驚くことでもあったの???!」

「す、す、杉山くんが……!」

ごくり。そんな喉が鳴る音は、誰からこぼれたのか。とにかく、思わず喉が鳴ってしまうような緊迫した空気が生まれる。しばらくの沈黙を貫き、存分に焦らしきつたのち、告げる。

その、驚愕の事実を。

「杉山くんが、女の子と一緒にいるよっ!」

……。

どこからか、人の転ける音がした。いや、『どこからか』という表現は正しくかもしれない。『周りのギャラリーのほとんどが』……転けたのだ。海斗など、まっさきに盛大に転け、その反動で気絶

をしにかけているという体たらくだ。

その惨状に気付いたいつかも、隣の『女の子』を連れて、三人に近づいていく。

「あれ？ みんなどうしたの？ いきなり転んで……バナナの皮でも踏んだ？」

「いやいや、そんなたくさんバナナとかないから。……で、あのさ、杉山くんだってね、年頃なんだから恋人の一人や二人、いてもおかしくないよ？」

「えー、そうかなあ？ だって杉山くんはゆあのおふえあつ?!」

慌てた様子で咲良の口を塞いだ。気迫の籠もった切実な瞳が、その先を続けてはならないと告げている。いつかだ。

「コレは僕のいとこだ。伊坂 蓮。彼女とかじゃないからな」

いつかの気迫に、咲良も何かを感じ取ったのだろう。一つ頷き、それを見て塞いでいた手を外しても、先を続けることはなかった。

「ちょっと、コレってなにさ？ ボクには蓮って名前がちゃんとあるんだからね。名前で呼べよ……っ」

いつかの少し後ろから、服の裾を引っ張って抗議。なまじ身長差が小さいばかりに、間近で潤んだ瞳の抗議を見ることとなった。

それを見てうろたえ、素直に名前呼びをしてしまうのは、いつかがへたれである故のことなのか。

「じゃ、じゃあ蓮。紹介するぞ。こちらのストレートヘアの子が高峰 ゆあさん。そしてさっき騒いでたポニーテールの子が上原 咲良さんだ」



「よろしく、伊坂さん？」  
「えと、よろしく…っ」

ゆあ、咲良の順で、それぞれ挨拶する。ゆあはニッコリと微笑み、咲良は少し、怯えながら小さくお辞儀をした。人見知りな面が出てしまっているようだ。が、すぐに打ち解けてしまうことだろう。

「上原さんと…高峰さんね。うん、わかった。負けないから」

蓮は少し咲良のあとに少し間を空け、しかとゆあを見据えて、そんな言葉を吐いていた。

「な、なにに？」

「高峰さんに」

「なんで？」

「え、そ、そりゃあ…い、いつ、いつか…その、いつかつ、いつかそのうちっ、他の魔術師にも勝ちたいと思ってて…うん、そう、だから今度試合してよ、約束っ！ ……あ、いや、やっぱめんどくさいからやらないでいい…っ」

最終的には、顔を赤くして俯くという状態に落ち着いた。『いつかをオトすのはボクだからね』と言いたかったのだろうが、とんでもない方向転換である。それも、試合を行う方向に持っていったかと思いきや、言い放つ言葉は『めんどくさいからナシで』で締めくくられる。

…正直、聞いていたゆあには、最初から最後まで全く理解出来なかった。

しかし、そんな状況も、咲良の視点から見れば実に簡単なことであつた。

「結局、伊坂さんはいつかくんのがすkひあんっ?!」  
「そそそ、それは最後まで言っちゃダメだっ！ ボクは、誰のことも好きなんかじゃないからなっ！」

……その簡単な事実を、最後まで告げることは叶わなかったが。

「さ、さあて、そろそろ永崎くん……だっけ？ 彼の本戦も始まるだろうし、席につこう？ ね、そうしよう。うん、それがいい！ ほら、いつか！ いくぞっ！」

「お、おお……って、引っ張るなっ！ っとと、高峰さんたちも着いてきてくれっ」

そして、いつかは蓮に引っ張られるように、咲良とゆあは、それに着いていく形で、この場を去るのだった。目指すは、観客席の中でも昇雅を見やすい特等席だ。空いているといいのだが。

皆さん、お忘れではないだろうか。物語初期で登場した、騒がしい赤髪ピアスの人物のことを。彼は一人、大げさなリアクションのせいで命を散らし（もちろん、本当の意味ではない）、ついには蓮への自己紹介もされずに、その場に残された。  
哀れ。実に哀れ。そうとしか言いようがない。

ここはそんな哀れな彼の、なけなしの名誉を守るため、あえて名前の明記を避けておこうかと思う。ご了承していただきたい。

「……さくらちゃん、ゆあちゃん……そしていつかア！マジで、ひどすぎると思うのですがこれ如何に?!」

リアクションは、ない。すでに、この賭博場周辺に、人などいないのだ。

「ああ、ここで崎ちゃんだったら『知らんっ』とか言っつてツッコミを入れてくれんだろうなア……」

今までで一番、仲間内のいじられキャラたる彼が、親友のありがたみを実感した瞬間であった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3650t/>

---

キミの求めるモノを教えて

2011年10月9日23時46分発行